

さん の う や ま
三王山遺跡Ⅱ 第4・7次調査

— 新潟市立亀田中学校校舎・体育館改築工事に伴う三王山遺跡第2・4次発掘調査報告書 —



2010

新潟市教育委員会

例　　言

- 1 本書は新潟県新潟市江南区城山1丁目1170番地2号ほかに所在する三王山遺跡発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査は新潟市立亀田中学校（以下「亀田中学校」という。）改築工事に伴うもので、新潟市教育委員会（以下「市教委」という。）が調査主体となり、新潟市文化観光・スポーツ部歴史文化課埋蔵文化財センター（以下「市理文センター」という。）が補助執行した。発掘調査に係る経費は、市教委施設課に予算を計上し、文化観光・スポーツ部歴史文化課（以下「歴史文化課」という。）が執行委任を受け、これを執行した。
- 3 遺跡の発掘調査は平成19年および平成20年に実施した。整理作業は平成19年から平成21年にかけて実施し、平成21年度に報告書刊行を行った。発掘調査と整理作業の体制は第Ⅳ章に記した。
- 4 本書の執筆・編集は朝岡政康（市理文センター　主査）が行った。
- 5 本書で用いた写真は、遺跡写真は立木宏明（市理文センター　主査）・瀬田憲幸（同　副主査）・朝岡が撮影し、遺物写真は佐藤俊英（ビッグヘッド）に委託した。ただし写真図版1は国土地理院の提供による。
- 6 各種図版作成・編集に関しては、株式会社セビアスに委託してデジタルトレースとDTPソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者に入稿して印刷した。
- 7 調査から本書の作成に至るまで下記の方々・機関より多大なご指導・ご協力を賜った。厚く御礼申し上げる。

五十嵐吉智平・春日真実・鶴巻康志・水沢幸一

新潟県教育庁文化行政課　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

（所属・敬称略）

凡　　例

- 1 本書は本文・別表と巻末図版（図面図版・写真図版）からなる。
- 2 本書で示す方位は全て真北である。磁北は真北から西偏約7度である。
- 3 掲載図面のうち、既存の地形図等を使用したものは、原図の作成者・作成年を示した。
- 4 引用・参考文献は、巻末に一括して掲載した。本文中は著者と発行年（西暦）を〔 〕中に示した。
- 5 遺構番号は発掘調査の際に付したもの用いた。番号は遺構の種別毎に付せず、調査区ごとに通し番号とした。
- 6 土層観察の色調および遺物観察表の遺物の色調は『新版 標準土色帖』[農林水産省農林水産技術会議事務局 1967]を用い、その記号を本書に掲載した。
- 7 土器実測図の断面は、須恵器を黒塗り、須恵器以外を白抜きとした。その他、遺物の特徴を示すため網目を用い、頁内に凡例を示した。
- 8 土器実測図で全周の1/12以下のような遺存量の低いものについては、誤差があるため中軸線の両側に空白を設けた。
- 9 遺物の注記は「07三王山」・「08三王山」とし、出土地点等を統けて付した。
- 10 掲載遺物は通し番号とし、本文・観察表・写真図版の番号は同一番号とした。
- 11 図面図版中の「P」は土器、「S」は石を表す。

目 次

第Ⅰ章 序 章	1
第1節 遺跡概観	1
第2節 三王山遺跡周辺の周辺の遺跡	1
第3節 調査履歴	2
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	3
第1節 遺跡の位置と地理的環境	3
第2節 三王山遺跡周辺の周辺の遺跡	3
第3節 歴史的環境	5
第Ⅲ章 調査の概要	8
第1節 試掘・確認調査	8
第2節 発掘調査	8
第3節 整理作業	12
第Ⅳ章 遺 跡	14
第1節 概 要	14
第2節 層 序	14
第3節 遺 構	15
第Ⅴ章 遺 物	33
第1節 土器の分類と記述	33
第VI章 自然科学分析	42
第1節 樹種同定	42
第2節 植物珪酸体（プラント・オパール）分析	43
第3節 花粉分析	45
第4節 三王山遺跡における放射性炭素（ ¹⁴ C）年代測定	47
第VII章 ま と め	48
第1節 各調査区の状況	48
第2節 各調査区の状況	49
第3節 遺物の年代観について	52
A SK13出土遺物について	52
B その他出土土器について	52
C 鎌倉・室町時代	52

第4節 三王山遺跡の性格について	52
A 奈良・平安時代の三王山遺跡	53
B 鎌倉・室町時代の三王山遺跡	53
引用・参考文献	54
報告書抄録・奥付	54
	巻末

挿図目次

第1図 越後平野周辺地形分類図	4
第2図 三王山遺跡周辺の遺跡分布図	6
第3図 試掘・確認調査位置図および土層柱状図	10
第4図 タタキメ・あて具痕跡の細分類図	34
第5図 SK13出土炭化材の顕微鏡写真	42
第6図 植物珪殼体（プランツ・オ・パール）	43
第7図 三王山遺跡2区における植物珪殼体分析結果	44
第8図 三王山遺跡の花粉・胞子・寄生虫卵	45
第9図 2区SK13覆土の土層柱状図	46
第10図 三王山遺跡2区SK13覆土における花粉ダイアグラム	46
第11図 3区SE30土層断面	50
第12図 3区SE193土層断面	50
第13図 3区SE193土層断面図	51
第14図 三王山遺跡周辺の遺跡の存続期間	53

表 目 次

第1表 三王山遺跡にかかる調査履歴一覧表	2
第2表 SK13 2層出土炭化材樹種同定結果	7
第3表 2層出土炭化材樹種同定結果	42
第4表 三王山遺跡2区における植物珪殼体分析結果	43
第5表 三王山遺跡における花粉分析結果	46
第6表 測定試料と処理・測定方法	47
第7表 放射性炭素(¹⁴ C)年代測定結果	47
第8表 2区SK13出土土器の器種構成率表	52
別表1 三王山遺跡 2区主要遺構計測表	56
別表2 三王山遺跡 3区主要遺構計測表	56
別表3 遺物観察表	59

図版目次

図版1 周辺の旧地形図(1/25,000)	1
図版2 周辺の旧地形図(1/50,000)	1
図版3 遺跡周辺図	1
図版4 グリッド設定図(1/2,500)	1
図版5 1~3区遺構平面図(1/1,000)	1
図版6 1区・2区 遺構全体図(1/250)	1
図版7 1区 調査区全体図(1/100)	1
図版8 2区 遺構平面部分図(1/100)	1
図版9 2区 遺構平面部分図2(1/100)	1
図版10 2区 遺構平面部分図3(1/100)	1
図版11 2区 遺構平面部分図4(1/100)	1
図版12 2区 遺構平面部分図5(1/100)	1
図版13 2区 遺構実測図1(1/40)	1
図版14 2区 遺構実測図2(1/40)	1
図版15 2区 遺構実測図3(1/40)	1
図版16 2区 遺構実測図4(1/40)	1
図版17 3区 遺構全体図(1/100)	1
図版18 3区 遺構平面部分図1(1/60)	1
図版19 3区 遺構平面部分図2(1/60)	1
図版20 3区 遺構平面部分図3(1/60)	1
図版21 3区 遺構平面部分図4(1/60)	1
図版22 3区 遺構実測図1	1
図版23 3区 遺構実測図2	1
図版24 3区 遺構実測図3	1
図版25 3区 遺構実測図4	1
図版26 3区 遺構実測図5	1
図版27 3区 遺構実測図6	1
図版28 3区 遺構実測図7	1
図版29 亀田中学校用地内の旧土地利用図、1・2区遺構確認面の状況	1
図版30 1・2区 Ⅲ層出土土器重量分布図／ 第1次調査地遺構配置図・豎穴式遺構平面図	1
図版31 2区遺構出土土器 SE31・SE39・SE41・ SK13・SK33・SX7・SX16・SX18	1
図版32 2区遺構出土土器 SD1・SD2・SD3・SD11・ P36・P45／1区遺物外出土土器	1
図版33 2区遺構外出土土器	1
図版34 2区遺構外出土土器	1
図版35 2区 珠洲焼・遺構出土の錢貨・鍛冶関連物・ 金属製品・石器・石製品・木製品	1
図版36 2区遺構出土の木製品	1
図版37 3区遺構出土土器・陶器 SE30・SE31・SE45・	1

SE95・SE145・SE193

図版 38 3 区遺構出土 土器・陶磁器 SK47・SK50・SK59・SK62・SD7・P159・P170・P254・P332 / 遺構外出土 陶器 / 遺構出土 鉄製品

石器・石製品

図版 39 3 区遺構出土の木製品 SE30・SE45・SE193・P64

写真図版目次

- | | |
|------------------------|---|
| 写真図版 1 三王山遺跡周辺空中写真 | 写真図版 18 3 区遺構個別写真 3 |
| 写真図版 2 2 区全景空中写真(合成) | 写真図版 19 3 区遺構個別写真 4 |
| 写真図版 3 2 区全景写真 1・2 | 写真図版 20 3 区遺構個別写真 5 |
| 写真図版 4 3 区全貌写真 1・2 | 写真図版 21 3 区遺構個別写真 6 |
| 写真図版 5 1 区・2 区土層堆積状況写真 | 写真図版 22 3 区遺構個別写真 7 |
| 写真図版 6 2 区遺構個別写真 1 | 写真図版 23 3 区遺構個別写真 8 |
| 写真図版 7 2 区遺構個別写真 2 | 写真図版 24 3 区遺構個別写真 9 |
| 写真図版 8 2 区遺構個別写真 3 | 写真図版 25 3 区遺構個別写真 10 |
| 写真図版 9 2 区遺構個別写真 4 | 写真図版 26 遺物写真 1 2 区遺構出土・遺構外出土土器 |
| 写真図版 10 2 区遺構個別写真 5 | 写真図版 27 遺物写真 2 2 区遺構出土土器 / 1 区・2 区遺構外出土土器 |
| 写真図版 11 2 区遺構個別写真 6 | 写真図版 28 遺物写真 3 3 区遺構出土遺物・3 区遺構外出土遺物 / 2 区・3 区遺構出土遺物(土器・陶磁器以外) |
| 写真図版 12 2 区遺構個別写真 7 | 写真図版 29 遺物写真 4 2 区出土墨書き器 / 2 区・3 区遺構出土木製品 |
| 写真図版 13 2 区遺構個別写真 8 | |
| 写真図版 14 2 区遺構個別写真 9 | |
| 写真図版 15 2 区遺構個別写真 10 | |
| 写真図版 16 3 区遺構個別写真 1 | |
| 写真図版 17 3 区遺構個別写真 2 | |

第Ⅰ章 序 章

第1節 遺跡概観

三王山遺跡は新潟市江南区所島1丁目780～790ほかに所在する(新潟県埋蔵文化財包蔵地カード)。昭和48(1973)年に発見された遺跡である。新砂丘^{こうさんう}の亀田砂丘と呼称される砂丘上およびその縁辺の自然堤防上に立地する遺跡である。これまでの調査結果から、古墳時代・奈良時代・平安時代・中世・近世の各時代に断続的に営まれた集落遺跡であることが分かっている。昭和54(1979)年、宅地造成を契機とした緊急発掘調査が行われた(図版4・30)。調査は3月21日～5月13日にかけて行われたが、主に休日や土曜日に限って行われた調査であった。井戸や溝状遺構・竪穴状遺構・柱穴などが発見され、古代の須恵器や土師器のほかに、中世の陶磁器が多量に出土した。また銅製香炉や鉄鉢など仏器と推測される貴重な遺物が出土した(酒井1980)。

第2節 発掘調査に至る経緯

平成17(2005)年に新潟市は近隣の13市町村と合併した。また平成19(2007)年4月1日には政令市となり区政を実施している。合併に伴い、市内の埋蔵文化財保護行政に係る事務は歴史文化課で一括して対応することとなった(教育委員会事務の補助執行)。市埋文センターは歴史文化課に所属している。

新潟市立亀田中学校は旧亀田町にあり、60余年の歴史を持つ中学校である。亀田町が新潟市と合併したことから亀田町時代に改築工事が計画された。合併に伴い事業は合併建設設計として新潟市に引き継がれた。

歴史文化課で行った合併建設設計の聞き取り調査の結果、当該地は三王山遺跡に隣接し、かつ市内でも遺跡が多く所在する亀田砂丘上に位置することから、事業着手前に埋蔵文化財の有無を確認する試掘調査が必要であると考えられたので、平成18(2006)年に亀田教育事務所学校教育課と協議を行った。協議後、新潟市長(以下「市長」という)は、市教育長宛てに平成18年7月19日付新亀教学第170号にて試掘調査の依頼を行った。これを受け市教育長は平成19年10月27日付18新歴第701号の2にて新潟県教育委員会(以下「県教委」という)教育長宛てに、文化財保護法(以下「法」という)第99条に係る発掘調査の報告書をし、平成18年10月31日および11月16～24日に試掘調査を実施した(第3次調査)。事業予定地を中心に36か所のトレーンチを設定した。調査面積は約139m²である。

調査の結果、平安時代と考えられる遺物および遺構が発見され、事業地に三王山遺跡が広がっていることが判明したので、事業実施前に本調査が必要である旨、担当各課と協議を行った。また三王山遺跡の範囲が拡大したことを受け、平成18年12月28日付18新歴第701号の7にて遺跡の範囲変更の手続きを行い、平成19年1月4日付教文第1235号にて新範囲が新潟県埋蔵文化財包蔵地カードに登録された。

改築工事は、平成19年度に体育館・武道館・ランチルームを建築し、平成20(2008)年度に既存体育館を解体後、新校舎を建築する計画であった。協議の結果、計画変更はできないので事業計画に従い本調査を実施することになった。

平成19年度工事に際して、市長は平成19年2月8日付新亀教学第445号にて県教育長に法94条に係る通知(以下「発掘通知」という)を行った。県教委から平成19年3月5日付教文第1432号の2にて本調査の指示があった。市長は、平成19年3月20日付新教施第1086号にて市教育長に調査依頼を行い、これを受け、

市教育長は平成19年4月26日付18新歴第701号の17にて県教育長宛てに法第99条に係る発掘報告を提出した。市埋文センターは平成19年5月1日～8月10日にかけて本調査を実施した(第4次調査)。調査に係る経費は市教委施設課に計上され、歴史文化課が執行委任を受け、これを執行した。

平成20(2008)年度は、既存体育館解体後新校舎を建築する予定であったことから、市長は平成20年4月25日付新教施第166号にて県教委教育長に法94条第1項に係る発掘通知を行った。また平成20年5月12日付第209号にて市教育長宛てに事前調査の依頼を行った。依頼を受け、市教育長は平成20年9月3日付新歴第5041号の2にて県教育長宛てに法第99条に係る発掘調査の報告を行った。平成20年9月3～8日にかけて確認調査(第6次調査)を実施した。調査は体育館の床を撤去した段階で実施した。事業予定地を中心に10か所のトレンドを設定した。調査面積は約166m²である。

確認調査の結果、調査対象面積約1,100m²のうち、410m²について本調査が必要であるとの結論に至った。このことを受け市長は平成20年9月30日付新教施第911号にて市教育長宛てに調査依頼を行った。市教育長は平成20年11月7日付新歴第5041号の17にて法第99条に係る発掘調査の報告を県教育長宛てに提出した。市埋文センターは平成20年11月5日～25日にかけて本調査を実施した(第7次調査)。調査経費は前年度同様、施設課に計上され、歴史文化課が執行委任を受け、これを執行した。

平成21(2009)年度は前2か年分調査の報告書作成を行った。整理作業および報告書作成に係る経費は前年度と同様に行つた。

第3節 調査履歴

三王山遺跡は新潟市内で最も早く周知化された遺跡の1つである。発見以降の調査履歴は第1表のとおりである。今次調査は通算で第4・7次調査に当り、新潟市立亀田中学校改築工事に伴う調査としては、第2・4次調査に当たる。

第1表 三王山遺跡にかかる調査履歴一覧表(平成21年1月現在)

通算調査回数	市立亀田中学校 改築工事に伴う 発掘調査回数	調査年(西暦)	調査種別	調査原因	調査主体	調査の概要	文献
		調査期間	調査担当				
		昭和48年(1973) —	分布調査		亀田町教育委員会 酒井和男	遺跡発見。 新潟県埋蔵文化財包蔵地カード への登録。	
第1次調査		昭和54年(1979) 3.21～5.13	本調査	宅地造成	亀田町教育委員会 酒井和男	古代・中世の遺構・遺物発見。	「三王山遺跡発掘調査報告書」1980 亀田町教育委員会
第2次調査		平成17年(2005) 5.6	確認調査	個人住宅建設	新潟市教育委員会 諫山さりか		
第3次調査	第1次調査	平成18年(2006) 10.31～11.16～24	試掘調査 試掘調査	学校改築に伴う 試掘調査	新潟市教育委員会 瀬田重幸	古代の遺構・遺物発見 (範囲拡大)	
第4次調査	第2次調査	平成19年(2007) 5.1～8.10	本調査	学校改築に伴う 本調査	新潟市教育委員会 胡國政康	古代・中世の遺構・遺物発見。 調査面積 1,845.2 m ²	
第5次調査		平成20年(2008) 6.2	確認調査	個人住宅建設	新潟市教育委員会 今井さきやか	遺構: 土坑 遺物: 土師器	
第6次調査	第3次調査	平成20年(2008) 9.3～9.8	確認調査	学校改築に伴う 確認調査	新潟市教育委員会 今井さきやか	遺構: 土坑・小土坑・溝 遺物: 平安時代灰陶器・土師器 中世珠洲盤	
第7次調査	第4次調査	平成20年(2008) 11.5～11.25	本調査	学校改築に伴う 本調査	新潟市教育委員会 胡國政康	古代・中世の遺構・遺物発見。 調査面積 410.7 m ²	
第8次調査		平成21年(2009) 1.26	試掘調査	宅地造成に伴う 試掘調査	新潟市教育委員会 相田多喜	平安時代土師器	

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境（第1図、図版1～3）

新潟市は越後平野の中にあり市域は約726km²である。越後平野は河川の運ぶ土砂によってできた沖積平野で、平野面積約2,040km²と日本海側最大である。越後平野には信濃川・阿賀野川といった大河川が貫流し、これに連なる中・小河川と共に大量の水を日本海に注いでいる。市域はこの平野の約3分の1を占め、信濃川・阿賀野川の河口に位置している。

新潟市の地形は、西の角田山塊、南の新津丘陵といった山地丘陵部、海岸部に砂丘を持つほかは広大な沖積平野が広がる。平野の中には砂丘列や河川の自然堤防などの微高地が点在する。越後平野の砂丘は、信濃川や阿賀野川のような大河川や中・小河川の運ぶ膨大な土砂が沿岸流に押し止められ砂州となり、それが冬の季節風によってうず高く積もることによって形成された。現在の村上市と角田山塊を結ぶ海岸線に並行するように弧状に連なっている。これらの砂丘は全て完新世第四期以降形成されたとされ、更新世由来の「古砂丘」と対比して、「新砂丘」と呼ばれている〔新潟古砂丘グループ1979〕。この新砂丘は10列にもなり、砂丘列間の重複関係や、砂丘表面の腐植層（植物が腐った有機質を含んだ層）の状態、砂丘上で発見された遺跡の時代などから、大きく3つに分けられ、形成年代の古い内陸側から新しい海岸部へ向かって、新砂丘I・II・IIIと呼ばれている。三王山遺跡が立地する砂丘は亀田地城にあることから亀田砂丘と呼ばれ、新砂丘Iに比定される。新砂丘I列は現在の海岸線から最も内陸に位置し、亀田砂丘は海岸線から約10km内陸に位置する。新砂丘I上には^{12,000年}佐山前遺跡（江南区）や^{6,000年}布目遺跡（西蒲区）といった縄文時代前期の遺跡があることから約6,000年前には既に形成されていたと考えられている。同様に新砂丘II列は縄文時代後期～弥生時代には形成されていると考えられ、一部は新砂丘III列の下に埋もれている。新砂丘III列は室町時代にはかなりの高さになっていたものと考えられている。新砂丘III列は現在の海岸線にもなっており、近年まで成長が続いている。

一方市域の大部分を占める沖積地は、上記砂丘によって土砂が堰き止められ、潟湖のような内海状の環境下で繰り返された堆積作用の結果形成されていった。その堆積層は主に粘土やシルト・未分解の植物遺体層（いわゆるガツボ層）から成り、軟弱な地盤である。平野中には、旧河道や旧潟湖の縁部に沿って自然堤防が数多く分布しており、地形図や空中写真を見ると、現在の河川もかつては様々な流路であったことや干拓以前の潟湖の縁部がうかがえる。

また市域に広がるこの沖積面は海拔0m前後の低地帯が広いことが特徴である。特に信濃川・阿賀野川・小阿賀野川に囲まれた地域は「亀田郷」と呼ばれ、鳥屋野潟に向かってすり鉢状に低くなっている。かつて水はけが悪く、腰までつかる沼田が多く水害の常襲地帯であったが、戦後は土地改良が進み乾田化され、現在は市内でも有数の穀倉地帯になっている。

第2節 三王山遺跡周辺の遺跡

現在新潟市内では約744か所の遺跡が周知化されており（2009年現在）、江南区の旧亀田町周辺は市内でも、角田山周辺・新津丘陵周辺に次いで様々な時代の遺跡が多く確認されている地域である。三王山遺跡周辺の遺跡は砂丘上や自然堤防上、あるいは双方にまたがるように立地している遺跡が多い。時代別に見ると、縄文・弥生時代の遺跡のほとんどは砂丘上に分布し、古墳時代以降になると自然堤防上にも分布が見られるようになる。し



第1図 越後平野周辺地形分類図

かし砂丘上という好条件は各時代ともに利用され続けるよう、砂丘上に分布する遺跡は様々な時代の複合遺跡である場合が多い。以下市町史(亀田町 1990・新潟市 1994, 2007・横越町 2000)をもとに概観する。

縄文時代の遺跡は亀田砂丘前例(新砂丘I-1・2 内側が前例)上に分布が見られる。笛山前遺跡から出土した縄文時代前期前葉の表鉢式の深鉢は亀田郷最古の土器である(廣野 1997)。このほか亀田城山A遺跡、山ン家遺跡でも前期の土器が出土している。中期では砂丘上の遺跡としては大規模な砂崩遺跡が知られている。後期及び晩期の遺跡は少ないが、後期では中山遺跡や笛山前遺跡、城山遺跡、日水南遺跡、前郷遺跡からこの頃の土器の出土例がある。晩期では養海山遺跡や前郷遺跡、駒込小丸山遺跡で出土例がある。また晩期後半になると上田遺跡のように沖積面に進出する遺跡も現れる。

弥生時代になると石動遺跡や、緒立遺跡、六地山遺跡のように新砂丘II上にも遺跡が分布するようになり、縄文時代より陸地が広がっていたことがうかがえる。亀田砂丘周辺では縄文時代と同様にほとんどが砂丘上(新砂丘I-1・2)に分布する。日本南遺跡、亀田城山A遺跡、齊助山遺跡、上の山遺跡などから出土例が見られる。また縄文晩期から弥生時代中期にかけての土器・石器を多く出土した養海山遺跡は、地表面下3mという深さからの出土であった。同じく西郷遺跡は平成18・19年に国道拡幅工事に伴い本調査が行われ、現地表面下2~3mの深さから縄文時代晩期末葉~弥生時代中期の遺構・遺物が発見された(土橋ほか 2009)。養海山遺跡は沖積面下に埋没した砂丘上に立地し、西郷遺跡は砂丘間低地に立地していると考えられており、これらのことから亀田砂丘あるいは新砂丘Iが形成以来不均等に沈降している事が明らかになりつつある。江南区茅野山以西は埋没している砂丘列が存在する可能性が高い。

古墳時代は前期の遺跡が多く、中期・後期の遺跡はこれに比べて少ない。特に江南区以北の海岸平野部で顕著である。亀田砂丘上では、武左衛門裏遺跡のほか城山遺跡、三王山遺跡、山ン家遺跡、養海山遺跡などで出土例があるが遺跡数は多くない。笛山前遺跡では後期の住居跡や土坑墓が発見されている(廣野前掲)。一方沖積面での発見例は弥生時代と比べるとるかに増加し、新砂丘Iの沿岸砂州上の東岡遺跡(朝岡ほか 2003)や自然堤防上の上郷遺跡(春日ほか 1997c)、下西遺跡、宮尻郷遺跡、小杉中州遺跡などのほか、北区や秋葉区でも自然堤防上を中心に沖積地での遺跡の発見例が増加する。弥生時代と比べ低地への進出が顕著になることから、農耕社会の形成と関係が深いと考えられる。

奈良・平安時代、いわゆる古代の遺跡も古墳時代同様の分布を見せるが、平安時代に入ると沖積面での発見例が非常に多くなることが特徴で、市内遺跡中最も多いのがこの時代の遺跡である。

三王山遺跡周辺で行われた主に古代の遺跡の発掘調査成果の概要については第2表にまとめた。

第3節 歴史的環境

古代の江南区 江南区域は、古代では越後国蒲原郡に属していた。越後国は「越国」が分割されて成立したのであるが、その分割は、諸国の境界を定めた天武12(683)年から、越前国司の記事が見られる持統6(692)年の間になされ、成立当初の越後国は阿賀野川以北の沼垂郡・磐船郡およびそれ以北であったと考えられている(新潟県編 1986)。その後大宝2(702)年に当時越中国であった頸城・古志・魚沼・蒲原の4郡が越後国に編入された。このことにより、越後国の南限が定まった。和銅元(708)年に越後国出羽郡が設置され、4年後の和銅5(712)年に出羽郡は出羽国として越後国から分離した。このことにより越後国の北限も定まった。佐渡は佐渡国として成立し、文武天皇4(700)年に初見記事があることからこのころ成立したものと考えられる。天平15(743)年から天平勝宝4(752)年まで越後国に編入された時期もあるが、この間以外は1国として運営されている。

蒲原郡の郡域については明確ではないが、現在の北区を除く新潟市・五泉市の阿賀野川以西・田上町・加茂市・燕市・三条市・弥彦村を含む地域と考えられている。蒲原郡の成立は前述した702年ころには成立していたと



国土地理院1:50,000地形図
新潟南部・水原
2007「日本遺跡第3次調査」新潟市教育委員会 第2回 一部改変

No.	名 称	時 代	No.	名 称	時 代	No.	名 称	時 代
1	内曲郷	縄文後期・奈良・平安	31	中山	縄文後期・奈良・平安	61	市助畠	平安・中世
2	早削前	平安	32	城山	縄文・古墳・平安・中世	62	川内	平安・中世
3	義尚山	縄文・弥生・古墳・平安	33	居附B	平安	63	狐山	奈良・平安
4	八坂前	平安	34	居附C	平安	64	猿塚	奈良・平安
5	武之森門戸	古墳	35	居附A	平安・中世	65	手代山	中世
6	日出前	縄文・弥生・平安	36	江尻	平安	66	中の山	奈良・平安・中世
7	日水	奈良・平安・中世	37	松嶺寺	平安	67	荒木前	中世
8	日本南	縄文後期・奈良・平安・中世	38	小杉中州	古墳	68	舟津御山	縄文
9	城山道下	平安	39	上山	縄文後期・奈良・平安	69	塚ノ山	平安・近世
10	龟山城山B	中世	40	山のハサバ	平安	70	二輪湖	奈良・平安・中世
11	龟山城山A	縄文中期・弥生中期・奈良・平安	41	新田郷	奈良・平安	71	前山	奈良・平安
12	舟越山	縄文・弥生・奈良・平安	42	吉尻郷	奈良・平安	72	北山	平安
13	牛道	平安	43	下郷	平安	73	金塚山	縄文・奈良・平安
14	三王山	古墳・奈良・平安・中世	44	下郷経塚	近世	74	大道外	平安
15	茨鳥	平安	45	曾我墓跡	平安	75	彦七山	奈良・平安
16	紗間	平安	46	岡田跡	平安	76	浦ノ山	平安
17	紗間上ノ山	奈良・平安	47	上原	奈良・平安	77	浦水が丘	平安
18	紗間前郷	縄文・平安・江戸	48	川根谷内	平安	78	丸山	平安
19	紗間	縄文中期・奈良・平安	49	川根谷内廻所	平安・中世	79	若荷谷墓地	平安
20	辻山	縄文中期・後期・奈良・平安	50	上郷C	平安	80	名谷谷	縄文中期・平安・中世
21	鶴郷	縄文中期・平安・近世	51	上郷	古墳・平安	81	松山向山	平安
22	山ノ家	縄文中期・中期・弥生・奈良	52	上郷B	奈良・平安	82	西野	平安
23	鶴山居浦郷	奈良・平安	53	横越船跡	中世	83	東田	縄文・弥生・古墳
24	鶴山居所	奈良・平安	54	円通寺右石仏	中世	84	小丸山	縄文中期・奈良・平安・中世
25	鶴山小丸山	縄文・弥生・奈良・平安	55	天王杉	平安	85	松山	縄文・中世
26	上白山	弥生中期・平安	56	御前湯	平安	86	直山田山	平安
27	藤山	平安・中世	57	鶴ノ子	平安	87	直山山A	平安
28	平山	平安	58	下西	古墳	88	大瀬	平安・中世
29	神社裏	平安	59	泥湯	平安・中世	89	御山石仏	中世
30	猪山前	縄文前期・桃葉・奈良後期・古墳・平安	60	内郷	弥生	90	手代山北	奈良・平安・中世

第2図 三王山遺跡周辺の遺跡分布図

推定される。10世紀に成立した『和名類聚抄』によれば、蒲原郡内には日置郷・桜井郷・勇礼郷・青海郷・小伏郷の5つの郷が存在していたことが分かる。各郷の所在地については、桜井郷は弥彦村を中心とした地域に比定する説が多く、勇礼郷は三条市井栗周辺を、青海郷は加茂市周辺を、小伏郷は三条市布施谷周辺と比定する説が多い。残る日置郷の位置は不明であるが、『新津市史』では古津八幡山遺跡が存在することなどから旧新津市周辺としている。近年、西区赤塚周辺を当てる考えも出てきている（小林2010）。

郡内産業については、新津丘陵における須恵器生産が早ければ7世紀後半には始まり、8世紀前半～9世紀中頃が主な操業期間であり、このことは越後国内の他地域の須恵器生産動向とも一致しており、いわゆる「一部一窯体制」であった。また金津丘陵製鉄遺跡群は新津丘陵北西側の金津地区に所在し、窯跡と近接するのは燃料である薪や木炭が共通するためだと考えられている。古代の重要な産業である須恵器生産と製鉄産業が新津丘陵で営まれていることからも当地域が蒲原郡における重要な地域であったことがうかがえる。

8世紀中葉以降に成立した寺院のための莊園（初期莊園）も蒲原郡内に見ることができる。宝亀11年（780）『西大寺資材流記帳』（『寧良遺文』中巻）には西大寺の莊園として鶴橋庄・梶田庄が見られ、同資料に「越後國水田并耕田地帳景雲三年」と見られることから成立は8世紀中葉のことと考えられる。両庄は式内社所在位置から、鶴橋庄は五泉市橋田周辺・梶田庄は三条市周辺と考えられている。初期莊園は律令体制の衰退と共に衰退し、平安時代には衰退していたと考えられている。

11世紀後半に成立したと推定される金津保は、秋葉区に所在したと考えられている。保とは、未墾地の開発申請に対し国守が認可を与えることで出現した所領のこと、金津保の初見は建武3年（1336）11月18日「羽黒義成軍忠状写」で「同二日、引籠于金津保新津城、对于小国政光以下御敵等、到散々合戰事」、『新潟県史』資料編4-1935とあり、北朝方である三浦和田（羽黒）義成は金津保にあった新津城に籠り、南朝方の小国政光らと戦ったとある。この資料によって金津保には新津城が含まれていたことが分かり、この新津城とは新津城・程島館・東島城のいずれかであろうとされる（木村1993）。また天正5年（1577）「三条衆給分帳」に「金津保之内遊川」（『新潟県史』資料編5-2704）とあり、遊川は田上町湯川と見られ、天文13年（1544）10月10日「上杉玄清定実知行宛行状」・同「長尾晴景副状」（『新潟県史』資料編4-1495-1496）に「金津保下条村」とあるのは、五泉市下条に当たるとされる。以上のことから金津保の領域は年代によって違いがあつた可能性はあるが、秋葉区～田上町北部と五泉市の一部を含む範囲であったと推定される。

第2表 三王山遺跡周辺の発掘調査一覧

遺跡名	本調査実施年	調査原因	調査主体 調査担当者	主な時代	主な遺構	主な遺物	出典
若荷谷遺跡	1972	砂取工事	新潟市教育委員会 土門甲子部	奈良・平安	堅穴住居・掘立柱建物 ほか	古代須恵器・古代土師器・鐵質・ 銅質金具など	『新潟市史』資料編1
三王山遺跡	1979	宅地造成	亀田山教育委員会 酒井和男	奈良・平安・鎌倉・ 室町	長方形堅穴造構・井戸・ 溝ほか	古墳時代土師器 古代須恵器・古代土師器 中世土師器・青磁・白磁・珠鋼 鏡・唐州美濃焼・網代香炉など	『三王山遺跡』
中の山遺跡	1981	宅地造成	亀田山教育委員会 川上良夫	奈良・平安・鎌倉・ 室町	自居居・小形堅穴建物・ 副葬遺物・井戸・ 溝ほか	古代須恵器・古代土師器 病院標・瀬戸・美濃焼など	『中の山遺跡』
荒木前遺跡	1988	宅地造成	亀田山教育委員会 酒井さみすみ	飛鳥・奈良・平安・ 鎌倉・室町	掘立柱建物・土坑・井 戸・溝状遺構・鐵軌道 ほか	古代須恵器・古代土師器 青磁・白磁・唐前焼・珠鋼焼・ 瀬戸・美濃焼など	『荒木前遺跡』
荒木前遺跡	1994	宅地造成	亀田山教育委員会 川上良夫	平安・鎌倉・室町	道路・土坑・井戸・溝 ほか	古代須恵器・古代土師器 珠鋼鏡など	『荒木前遺跡』第2次 調査
川根谷内裏所遺跡	1994 1995	国道建設	新潟県教育委員会 江口友子	平安・近世	土坑・井戸・溝状遺構 ほか	古代須恵器・古代土師器など	『川根谷内裏所遺跡』
上郷遺跡	1992 1993 1994	国道建設	新潟県教育委員会 吉崎・上郷一・射田正	吉崎・平安	堅穴建物・掘立柱建物・ 土坑・井戸・溝状遺構・ 帆状遺構・水田跡ほか	古墳時代土師器 古代須恵器・古代土師器など	『上郷遺跡1』 『上郷遺跡2』
牛道遺跡	1995	国道建設	新潟県教育委員会 土崎山理子	平安	土坑・井戸・堅穴遺構 ほか	古墳時代土師器 古代須恵器・古代土師器など	『牛道遺跡』
日本遺跡	2005	宅地造成	新潟市教育委員会 今井さやか	平安・室町	堅穴遺構・掘立柱建物・ 土坑・井戸・溝ほか	古代須恵器・古代土師器	『日本遺跡 第3次調査』
手代山北遺跡	2007 2008	市道建設	新潟市教育委員会 朝隈康重	平安・鎌倉・室町	掘立柱建物・土坑・井 戸・溝状遺構ほか	古代須恵器・古代土師器 珠鋼鏡	『手代山北遺跡 第2・ 3次調査』

第III章 調査の概要

第1節 試掘・確認調査

A 試掘調査（第3次調査）

亀田中学校改築工事に伴う試掘調査（第3次調査）は平成18年10月31日と同年11月16日～24日にかけて行われた。調査対象面積5,217m²に対し、36か所の試掘坑を設定した（第3図）。調査面積は139m²である。試掘坑の位置は亀田教育事務所・亀田中学校と協議をして決定した。4T・9T・10T・11T・14T・15T・19T・21T・24T・26T・28T・30T・31Tから遺物が出土した。12T・13Tから遺構が発見された。8T・18T・34Tから遺構と遺物が発見された。遺物はほとんどが土師器や須恵器の破片で、平安時代のものと考えられた。土層の堆積状況は試掘坑ごとにかなり異なっており、調査対象地の土層はかなり改変を受けていることが推測されるため、遺物出土層と遺構確認層の関係は必ずしも明確にはならなかった。新校舎建築部分に遺跡が残っている事が判明したので工事着手前に発掘調査が必要であると判断された。

B 確認調査（第6次調査）

第4次調査の結果、調査対象地は遺跡であるものの、土層はかなり改変を受けており、遺存状況はあまり良くないことが分かつてき。この結果を受けて、平成20年の工事に際しては、事前に確認調査を実施し、遺跡の遺存状況を確認してから本調査の要否を判断することになった。平成20年は新校舎建築に先立つ体育館解体工事が行われ、体育館の照明や内壁・床が撤去された段階で、9月3日～8日にかけて確認調査を実施した（第7次調査）。新校舎建築部分と渡り廊下建築部分に10か所のトレンチを設定して調査した（第3図）。調査対象面積は約1,200m²、調査面積は165.6m²である。1T・4T・6T・7T・8Tから遺物が出土した。1T・5T・6T・7T・8Tで遺構が発見された。遺物は、古代の須恵器・土師器の細片、中世の珠洲焼すり鉢細片、近世陶器片である。表土から遺構確認面までの土層は削平または客土に入れ替えられ、自然堆積層は残っていないかった。遺構確認面の上部も削平を受けていた。1Tでは土坑と溝状の遺構が検出されたが、近世もしくは近世以降の遺構と推定された。6T・8Tで古代・中世の井戸と推定される遺構が発見されたことから、遺構が発見された区域を中心本調査が必要と判断された。

第2節 発掘調査

A 調査方法

調査は亀田中学校の改築工事の進捗にあわせ2か年にわたって実施した。

1) 調査地の着手前状況

平成19年度調査地（以下「1区・2区」という。）は主に中庭・遊闇地・テニスコートとして利用されていた。平成20年度調査地（以下「3区」という。）は体育館および武道場として利用されていた。

2) グリッドの設定（図版4）

グリッド網は、三王山遺跡全体を覆うように設定した。座標軸は世界測地系を用いている。2区の20M杭

のX座標は206870.000、Y座標は53840.000である。3区の12C杭のX座標は206950.000、Y座標は53740.000である。大グリッドの名称は北西隅の杭を基準として東西方向をアラビア数字、南北方向をアルファベットとし、この組み合わせによって表示している。大グリッドはさらに2m方眼に区分して1から25の小グリッドに分割し、「20M1」「13D1」のように呼称した。座標北は真北に対し0度22分29秒西偏し、磁北は真北に対し7度20分0秒西偏する。

3) 調査方法

①事前準備

1区には松などの樹木やブロックで作られた石垣があった。2区には樹木や鉄筋造りの連絡通路、焼却炉などがあり、テニスコートは周囲全面にフェンスが巡らされていた。また周囲には体育設備や排水溝などが設置されていたので、調査に当たってはこれら全ての撤去や移設を先行した。

改築工事に必要な作業区域は施設課と学校との協議で決まっていたので、調査も同じ作業区域を使用した。作業区域内は関係者以外立ち入り禁止とし、全面を高さ2mの鋼矢板で囲った。

3区は体育館および武道場であった。解体業者によって照明や床・仕切り壁などを撤去した後に、確認調査を実施した。調査の結果から、解体工事を中断し、体育館の躯体を残したまま本調査を実施することとなった。調査では1・2区同様解体作業区域を作業区域として利用し、全て鋼矢板で囲い、関係者以外立ち入り禁止とした。
②1・2区の調査方法

表土などの掘削残土は、量的に調査区域内に全てを仮置きすることができなかった。周辺は住宅密集地で道幅も狭く小・中学校の通学路にもなっていることから、大型ダンプによる頻繁な場外搬出も不可能と考えられた。このため1区調査後に1区を埋め、2区の西側に張出した凸部を調査し、終了後これを埋めて2区東側の長方形部分を調査することとなった。表土ほか掘削残土は埋めた場所に積み、安全確保のため重機で整形した。

また、第3次調査の結果では土層の堆積状況を明確に掘めていなかった。調査環境の諸条件と期間とを考慮し、機械掘削開始前に小型重機によるトレレンチ調査を行い、層序の確認をすることとした。幅1m前後で5本のサブトレレンチを設定し、造構確認面が見えた段階で掘り下げを止めた。層序を確認し、どの層まで機械掘削が可能か検討し、2区の調査を実施した。

③3区の調査方法

3区の表土および掘削残土は体育館内に仮置きした。残土山は安全のため重機で整形した。

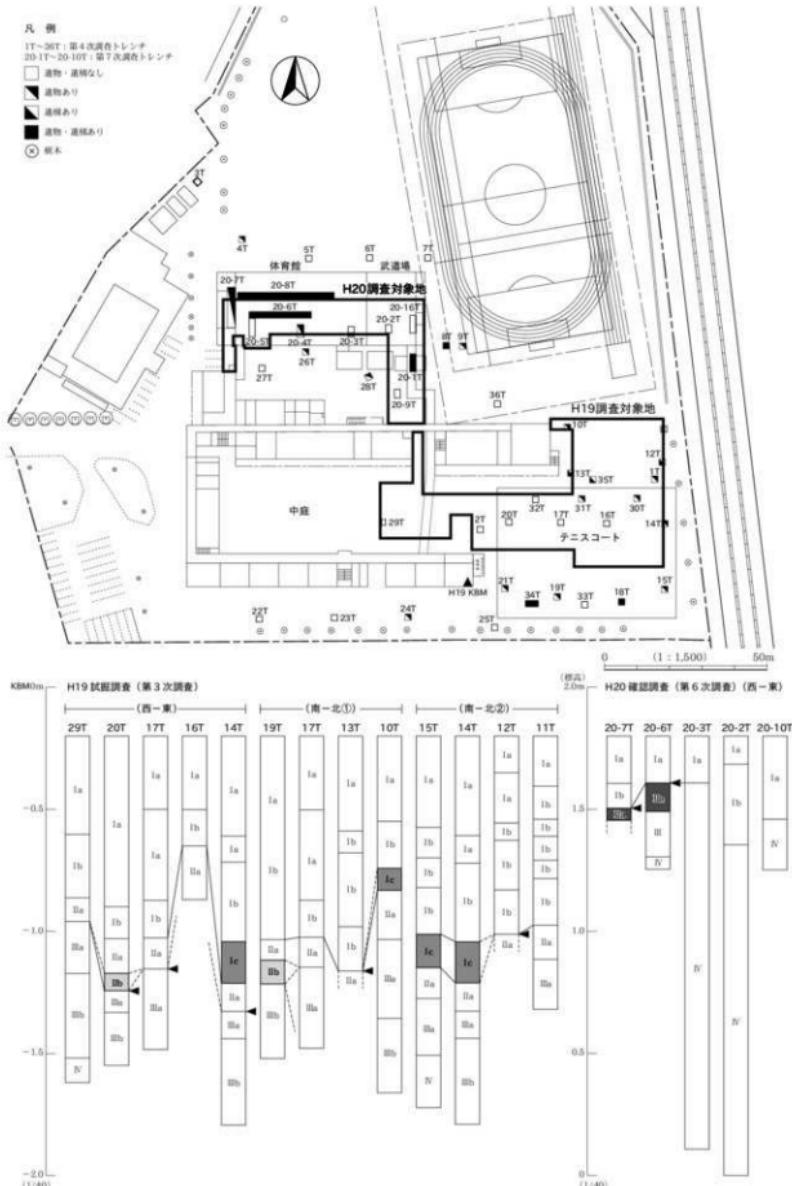
④包含層掘削・造構検出・造構掘削

1区・2区の遺物包含層(Ⅲb・Ⅲc層)は2区の一部に確認でき、1区と3区では確認できなかった。表土から造構確認面までは、造構・遺物の発見に努め、重機で慎重に掘り下げる。遺物が多く出土した部分は重機掘削は行わず、人力で掘り下げたが、機械掘削が主体的であった。掘削残土は重機で調査区外へ搬出した。その後1・2区の造構確認面であるⅣa層上面を、3区の造構確認面であるⅢ層上面を人力で精査し造構検出に勤めた。造構は人力で掘削した。掘削残土はベルトコンベアで調査区外に搬出した。

⑤遺物の取り上げ 遺物は、包含層や搅乱層から出土したものは小グリッド単位で層位と日付を記入して取り上げた。造構出土遺物は重要と考えられたものは、微細図を作成し、位置の測量をしてから番号を付して取り上げた。それ以外は各造構とも層位一括で取り上げた。

⑥自然科学分析 古環境推定や土地の利用条件を考察するためのプラントオバール分析を行った。またSK13からは遺物がまとまって出土しており、遺物の出土層から炭化材も出土したことから、この炭化材の樹種同定と放射性炭素年代測定を専門業者に委託して実施した。結果は第VI章にまとめた。

⑦実測・写真 実測図は断面図を1/20で作成した。平面図測量はトータルステーションを使用し全て国家座標(世界地図系)で記録した。1・2区では、略図や造構断面図は臨時職員が実測し、平面測量などは業者に委託



第3図 試掘・確認調査位置図および土層柱状図

第3次調査 土層記述

- I-a層 グラウンド・テニスコート直上。
 I-b層 黒色の砂利層。
 I-c層 土表に出来ると想われるが、規則が整い、古代～現代までの遺物が混入している。
 黒色の粘土層。
- II-a層 黒色の土層で、表面より上は強化した跡があり、本來の表土と思われる。平安時代までの遺物を包含している。
- II-b層 黒色の土層で、表面より上は強化した跡があり、平安時代までの遺物を包含している。
- II-c層 黒色の土層で、表面より上は強化した跡があり、平安時代までの遺物を包含している。
- III-a層 はげやての試掘部で検出されているが、表面部分は解剖されていることが多い。ST、BT等異なる角度で傾斜の乏しい。
 黒色の土層。
- III-b層 黒色の土層で強度があり、軽量地盤では灰褐色の粘土層としてあらわれる。中世および平安時代の遺構を確認される。
- IV-a層 黒色～暗褐色の土層。
- IV-b層 黒色～暗褐色の土層。
- IV-c層 黒色～暗褐色の土層。
- V層 黒色の砂利層。

◀ 遺構確認面

第6次調査 土層記述

- I-a層 黑色の砂利層とした盛土層。
- I-b層 黒色の砂利層とし、六角形の柱状の柱状構造を有する。
- I-c層 明顯なシルト層。
- II-a層 黑色のシルト層。
- II-b層 黒色のシルト層。
- II-c層 黒色の砂利層 (いわゆるクロスナ)。
- IV 層 黒白色砂利 (砂丘風成層)。

◀ 遺構確認面

して実測した。3区では、略図は臨時職員が実測し、遺構断面図・平面測量などは業者に委託して実測した。

写真は空中写真以外の写真記録は全て調査員が撮影した。35mm版および6×7版カメラを使用し白黒フィルム・カラーポジフィルムを適宜併用した。調査終了状況写真は1区と2区西側は校舎の屋上から撮影し、2区東側は高所作業車を使用して撮影した。3区はローリングタワーから撮影した。また2区は調査の進捗に合わせ西側終了後と東側終了後にそれぞれラジコンヘリコプターを使用した空撮を実施した。

B 調査経過

1) 撤去工 平成19年5月1日から5月21日まで鉄筋造渡り廊下やテニスコートのフェンス・焼却炉などの撤去工事、樹木の伐採や移植、作業区域の仮囲い設置工事などの準備工事を実施した。この間に仮設事務所の設置とベルコン用の電気配線工事を行った。

2) 1区 5月21日から表土除去を開始した。表土直下からコンクリートの基礎やガラが多く出てきた。遺物が出土した段階で掘り下げを止めて、土層の観察を行ったが、遺物が出土した周辺だけIV-a層が残っており、ここ以外は下水敷設に伴う工事で削除され全壊している事が判明した。そこでこの他に2か所トレンチを設定し、1区内の遺跡の遺存状況を確認したところ、1区内は遺跡が全壊している事が判明したので、土層堆積状況の記録と完掘写真を撮って調査終了とした。5月30日に埋め戻しを行った。

3) 2区① 前述のとおりトレンチ調査を実施し、層序の確認を行った。その後2区西側の調査を実施した。2区西側完掘後は写真を撮り、図面等の記録類の確認をして、2区東側の掘削残土で埋め戻した。

5月21日から31日にトレンチ調査を実施し、6月1日から表土除去を開始した。6月19日に完掘写真を撮り、21日に空撮した。25日には、亀田中学校向けに、遺跡紹介を含めた簡単な現地説明会を実施した。生徒25名、校長ほか教諭2名が参加し、発掘された遺跡を見学し、出土品に触れるなどの体験学習を行った。亀田中学校では平成17年にも総合学習で日本遺跡の発掘体験をしている。

4) 2区② 2区西側の調査終了後、東側(主にテニスコート部分)の調査に入った。6月26日から表土除去を開始した。7月28日に市民向けに現地説明会を実施し、107名の参加者があった。8月1日の午前中に高所作業車から完掘写真を撮り、午後から空撮を行った。8月2日に下層の有無を確認するためトレンチを1か所設定して試掘した。試掘の結果、下層は無いことが確認された。その後、記録類の確認を行い、仮設事務所の撤去など後始末を行って、8月10日に調査を終了した。

最終的な発掘調査面積は、1区は上端約100.6m²・下端約38.9m²、2区は上端約1,744.7m²・下端約1,703.7m²である。

5) 3区 調査は、年内に体育館を解体し、年明け直後から建設用重機が搬入されるという厳しいスケジュールの中で行うこととなった。11月5日から仮設事務所等の建て込みを行った。11月8日から表土除去を開始した。表土からはコンクリートくずなどが多く出土し、体育館のコンクリート基礎が露出するなど、遺構確認面

までの土層は自然堆積層とは考えられなかった。遺構と推測された痕跡も覆土はマーブル状に、あるいは掘り返されたような状況であった。11月11日から遺構掘削を開始した。3区は体育館の床と照明を取り除き、屋根と外壁を残したままで行った。雨天など悪天候の影響を受けずに進めることができたが、季節柄悪天候の日が多く、室内は暗く光量不足だったので、夜間工事などで使用するエンジン式のバルーンライトを3基導入した。遺構写真はライト有無の両条件で撮影したが、ライトが無いとほとんど撮影はできなかった。11月22日にローリングタワー上から完掘写真を撮影した。23日から25日は図面類のチェックと遺構個別写真撮影を行い、25日に調査を終了した。3区の調査面積は上端約410.7m²・下端約394.3m²である。

C 調査体制

【平成19年度 第4次調査（1区2区の調査）】

調査主体	新潟市教育委員会（教育長：佐藤満夫）
所管課	新潟市歴史文化課（課長：倉地一則　課長補佐：山田一雄　埋蔵文化財係長：渡邊朋和）
事務局	新潟市埋蔵文化財センター（所長：山田光行）
調査担当	新潟市埋蔵文化財センター　副主査　朝岡政康
調査員	新潟市埋蔵文化財センター　主査　立木宏明 新潟市埋蔵文化財センター　主事　潮田憲幸（5/21～5/24）

【平成20年度 第7次調査（3区の調査）】

調査主体	新潟市教育委員会（教育長：佐藤満夫）
所管課	新潟市歴史文化課（課長：倉地一則　課長補佐：山田一雄　埋蔵文化財係長：渡邊朋和）
事務局	新潟市埋蔵文化財センター（所長：山田光行）
調査担当	新潟市埋蔵文化財センター　主査　朝岡政康
調査員	新潟市埋蔵文化財センター　副主査　潮田憲幸

第3節 整理作業

A 整理方法

1) 遺物 第3次調査と第6次調査で出土した遺物はコンテナ（内径54.5×33.6×10.0cm）で0.5箱分、第4次調査は土器40箱・土壌洗浄後採取遺物（種実類）2箱・木製品5箱で、第7次調査は土器17箱・土壌洗浄後採取遺物（種実類）1箱・木製品5箱であった。この他金属製品が両調査合わせて1箱分出土している。

遺物のうち、土器の整理作業は、①洗浄→②注記→③グリッド別・種別の重量計測および遺構出土遺物の器種ごとの重量・個体数計測→④接合→⑤補修→⑥報告書掲載遺物の抽出→⑦実測図作成→⑧観察表作成の順で行った。第4次調査では発掘調査期間中に①・②を現場で行い、以降は市埋文センターで行った。第7次調査は全て市埋文センターで行った。

木製品は、①洗浄→②報告書掲載遺物の抽出→③実測図作成の順で進め、第4・7次調査で出土した曲物3点は実測図作成後、専門の業者へ委託し保存処理を施した。

井戸の覆土は下層を中心に採取し、水洗時にふるいを使用し種実類などの遺物を採取した。

2) 遺構 測量業者が作成した遺構平面図を1/20で出し、手取りによる1/20遺構断面図との整合作業を行った。

B 整理経過

出土遺物は種別・地点別に分類し、報告書作成のための重量・点数計測、接合・補修、実測図作成、写真撮影を行った。遺構測量図は、原図の確認作業後、平面図はデジタルデータで、断面図はその原図をデジタル化編集業者に渡し、校正作業を行った。並行して現場記録写真の整理やフィルム写真のデジタル化を行い、報告書掲載用写真を抽出した。図版レイアウト・執筆ほか報告書の編集は市埋文センターで行った。

C 整理体制

【平成 19 年度整理作業 第 4 次調査（1 区 2 区の調査）】

調査主体	新潟市教育委員会（教育長：佐藤満夫）
所管課	新潟市歴史文化課（課長：倉地一則　課長補佐：山田一雄　埋蔵文化財係長：渡邊朋和）
事務局	新潟市埋蔵文化財センター（所長：山田光行）
調査担当	新潟市埋蔵文化財センター　主査 朝岡政康
調査員	新潟市埋蔵文化財センター　主査 立木宏明

【平成 20 年度整理作業 第 7 次調査（3 区の調査）】

調査主体	新潟市教育委員会（教育長：佐藤満夫）
所管課	新潟市役所歴史文化課（課長：倉地一則　課長補佐：山田一雄　埋蔵文化財係長：渡邊朋和）
事務局	新潟市埋蔵文化財センター（所長：山田光行）
調査担当	新潟市埋蔵文化財センター　主査 朝岡政康

【平成 21 年度整理作業】

調査主体	新潟市教育委員会（教育長：佐藤満夫）
所管課	新潟市役所歴史文化課（課長：倉地一則　課長補佐：頓所洋一　埋蔵文化財係長：渡邊朋和）
事務局	新潟市埋蔵文化財センター（所長：山田光行）
調査担当	新潟市埋蔵文化財センター　主査 朝岡政康



亀田中学校生徒による遺跡見学会（6月25日）



現地説明会（7月28日）

第IV章 遺 跡

第1節 概 要

三王山遺跡は亀田砂丘の南斜面に位置し、砂丘縁辺に堆積した沖積層上に立地する。この場所は亀田中学校ができる以前（昭和25年以前）は、標高6mほどの小高い丘があり、「三王山」と呼ばれていたらしく、これが遺跡名の由来となっている（酒井1980）。遺構確認面の標高は、1・2区は1.2m～1.3m、3区は1.6m前後である。各調査区ともに北側にあるグラウンドに向かって標高が高くなる。2区の表土除去時には遺構確認面（IVa層もしくはIVb層）の上に、本来IVa層の下に堆積しているはずの黒褐色砂層が堆積していた。

1・2区の遺構確認面（IVa層）までの堆積状況は、一部に自然堆積層が認められたのみで、ほとんど全ての区域で削平を受け、IVa層上面もしくはそのものも広い範囲で削平されていた。3区では遺構確認面（III層）より上層は全て客土であり自然堆積層は全く残っていないかった。III層の上面部分も削平を受けている可能性が高い。3区の遺構確認面は西から東に向かって、粘性の強いシルト面（III層）→黒褐色砂（IV層 砂丘砂）の面→黄褐色砂（V層 砂丘砂）の面が広がっていた（図面図版17、写真図版4）。

発見された遺構は、井戸・土坑・性格不明遺構・溝・小土坑（Pit）などである。3区で発見された井戸以外の遺構は近世、あるいは近現代の耕作などに関わる痕跡である可能性が高い。遺物は、古代の須恵器・土師器、中世の珠洲焼や青磁などが出土しているが、量は少ない。木製品は井戸を中心曲物や井戸枠、井戸枠の部材などが出土している。金属製品では刀子と推測されるもの、鉄滓などが僅かながら出土している。

第2節 層 序

A 1・2区の層序

1・2区は前述したように相当な範囲で削平されている。層序は地表面から遺構確認面まで大きく3層に分かれる。

I 層 テニスコートやグラウンドの土。盛土層。テニスコート部分ではこの盛土層の下に砂利が敷かれている。

II 層 黒褐色～黄褐色砂またはシルト 盛土層。コンクリート建造物の残骸が多く混ざる。明らかに他所からもたらされており、グラウンドやテニスコートの造成に当たって転圧されているため、非常にしまっている。砂丘砂と考えられる黒色砂や黄褐色砂が大部分を占めることから、元々の「三王山」部分の削平土か周辺砂丘の削平土と考えられる。

III 層 褐灰色～黄褐色シルト さらにa～eに細分される。III b・III c層は古代の遺物包含層で、自然堆積層と考えられる。粘性ややあり。しまりややあり。径3mmの炭化物少量混入。2区西側のみに認められる。III d・III e層は削平後の盛土層と考えられる。

IV a層 灰黄色シルト 粘性ややあり。しまりややあり。古代～近世の遺構確認面。21L・22Lグリッド付近は上面が削平され、灰色が強い。

IV b層 灰オリーブ色シルト 粘性なし。しまりあり。砂質が非常に強い。2区東側の遺構確認面であるが、IV a層が完全に削平されているため、本来の遺構の形状は不明である。

V 層 暗灰黄色シルト 粘性ややあり。しまりあり。

VI 層 灰黄色～暗灰黄色シルト 粘性ややあり。しまりややあり。a～dに細分される。噴砂の影響を受け

砂とシルトが混ざり合っている。

VII 層 黄褐色砂 砂丘砂。ほとんどの井戸はVII層上面まで掘り込んでいて、VI層とVII層の間が透水層と考えられる。

B 3 区の層序

3区の遺構確認面までは大きく2層に分かれる。

- I 層 黄褐色シルト 遺構確認面であるIII層のシルトに類似する。II層と混ざり合いまだに存在する。耕作による天地換えなどで浮いてきたか、他所から運ばれたものと推測する。
- II 層 黒褐色シルト 粘性ややあり。しまりあり。砂質強い。I層のシルトブロックが多く混入する。コンクリート片などが入る。他所からもたらされたか、この地の黒砂層が掘り返された結果浮いたものと推測する。
- III 層 黄褐色～オリーブ褐色シルト 粘性あり。しまりややあり。1・2区のIV a層に相当する。既存体育館建設時のものと考えられるコンクリートの基礎やブロック列などがあり、部分的にかなり搅乱されている。
- IV 層 黒褐色～灰色砂 粘性なし。しまりあり。砂丘形成層。遺物は全く出土しなかった。1・2区では確認されなかった。
- V 層 灰黄色～暗灰黄色砂 粘性なし。しまりあり。砂丘形成層。1・2区のVII層に相当する。

第3節 遺構

遺構番号は第4次調査(1・2区)と第7次調査(3区)とで分けて付した。それぞれの調査区で遺構の種別に関係なく通し番号で付した。両調査を通して発見された遺構は、井戸(SE) 17基・土坑(SK) 82基・性格不明遺構(SX) 19基・溝(SD) 28条・小土坑(Pit) 386基である。主要遺構の計測値は別表1に示した。奈良・平安時代と推測される遺構は古代・鎌倉・室町時代と推測される遺構は中世と略記した。

A 1・2区の遺構

1区から遺構は発見されなかった。調査区の大半は上下水道工事や造庭工事などで掘り返され、遺跡はほとんど残っていないかった。一部に遺物包含層III層と遺構確認面IV a層が残っており、古代の須恵器や土師器が出土した(図版33 35～38)。IV a層の標高は1.00m前後で、2区と比べ標高差はほとんど無い。

2区の遺構確認面IV a層の標高は1.00m～1.35m、IV b層の標高は0.90m前後である。IV b層で発見された遺構は、最大0.45m前後削平されている。

2区で発見された遺構は、井戸(SE) 7基・土坑(SK) 12基・性格不明遺構(SX) 18基・溝(SD) 10基・小土坑(Pit) 44基である。以下に説明する。

1) 井戸(SE)

SE20(図版13、写真図版6)

18O21・19O1に位置する。遺構確認面はIV b層である。調査区北東端に位置し、一部調査区外へ広がる。上端の平面形は円形、断面形は漏斗状である。確認できた規模は上端で長軸1.52m、深さ0.46m、底面標高は0.5mである。覆土は4層に分かれる。底面から曲物が出土したが、腐食が進み覆土と一体化していたため取上げできなかった。調査の後半に大雨が降ったときに崩壊した。中世と推測される。

SE25(図版13、写真図版6)

19N11 に位置する。遺構確認面はIV b 層である。上端の平面形はほぼ円形、断面形は箱形である。規模は上端で長軸 0.84m・短軸 0.77m で、深さ 0.4m、底面標高は 0.58m である。覆土は 2 層に分かれる。遺物は出土していない。中世と推測される。

SE31 (図版 13、写真図版 6)

19M2・3 に位置する。遺構確認面はIV b 層である。上端の平面形は円形、断面形は漏斗状である。規模は上端で直径 0.94m、深さ 0.6m、底面標高は 0.38m である。覆土は 4 層に分かれる。1 層から珠洲焼甕・鉄滓が出土している。1 層ではあるが、IV a 層が削平されていることから考えると、覆土中位付近からの出土と捉えたい。底部には曲物が据えられていた。この底部は曲物の幅分だけ掘られており、井戸掘削に当たっては曲物を準備してから掘っている様子がうかがえる。中世と推測される。

SE38 (図版 13、写真図版 6)

19M13・14・18・19 に位置する。遺構確認面はIV b 層である。上端の平面形は梢円形、断面形は皿形である。規模は上端で長軸 2.44m、短軸 2.03m、深さ 0.55m、底面標高は 0.43m である。覆土は 7 層に分かれる。井戸枠が設置された井戸であるが、井戸側は腐食が進み、板の内側の表面部分だけが覆土に張り付くように残っていた。取上げは不可能であったため、覆土として掘り下げた。底部から土居枠が組んである状態で出土した。1 層から土師器無台椀細片が出土している。平安時代と推測される。

SE39 (図版 13、写真図版 7)

19M17・18・22・23 に位置する。遺構確認面はIV b 層である。上端の平面形はほぼ円形、断面形は箱形である。規模は上端で長軸 1.87m、短軸 1.79m、深さ 0.44m、底面標高は 0.51m である。覆土は 6 層に分かれる。3 層から繩文土器深鉢と推測される細片・土師器長甕部・礪が出土している。このほかに、いずれも細片であるが、3 層から土師器小甕、4 層から須恵器無台杯・土師器無台椀が出土している。平安時代と推測される。

SE41 (図版 14、写真図版 7)

19L10・19M6 に位置する。遺構確認面はIV b 層である。上端の平面形は円形、断面形は漏斗状である。規模は上端で直径 1.12m、深さ 0.75m、底面標高は 0.15m である。覆土は 5 層に分かれる。5 層から須恵器有台杯・須恵器無台杯の細片が出土している。底部には曲物が据えられていた。SE31 同様、曲物の幅分だけ掘られてあった。掘り形や、曲物の据え方・覆土の様相が SE31 と近似していること、距離が近いことなどから、中世と推測される。

SE42 (図版 13、写真図版 7)

19M11・16 に位置する。遺構確認面はIV b 層である。上端の平面形はほぼ円形、断面形は台形である。規模は上端で長軸 0.82m・短軸 0.77m、深さ 0.26m、底面標高は 0.71m である。覆土は 2 層に分かれる。遺物は出土していない。覆土の様相が SE31・SE41 と近似していることから、中世と推測する。

2) 土 坑 (SK)

SK13 (図版 14、写真図版 7・8)

21H10・21J6・11 に位置する。遺構確認面はIV a 層である。上端の平面形は梢円形、断面形は皿形である。遺構の西側 21J11 付近は後世の削平により一部失われている。規模は上端で長軸 2.67m・短軸 1.26m、深さ 0.16m、である。覆土は 3 層に分かれる。2 層から須恵器有台杯・須恵器無台杯・土師器小甕・土師器長甕が出土した。このほかに、2 層から須恵器無台杯細片・土師器小甕細片・土師器長甕細片・礪片・鍛冶関連遺物・炭化物 0.35g が出土している。奈良時代と推測する。遺構覆土および出土炭化物について自然科学分析を行った。詳細は第VI章に記した。

SK28 (図版 14、写真図版 8)

18N15 に位置する。遺構確認面はIV b 層である。調査区北辺に位置し、南側約半分について調査した。上端

の平面形は円形と推測される。断面形は半円形である。確認できた範囲での規模は、上端で長軸 1.14m、深さ 0.33m である。覆土は 2 層に分かれる。遺物は出土していない。遺構直上層が水田耕土と考えられることから遺構の所属時期は不明である。

SK30 (図版 14、写真図版 8)

22M16・17 に位置する。遺構確認面は IV a 層である。上端の平面形は梢円形、断面形は皿形である。規模は上端で長軸 0.60m・短軸 0.35m、深さ 0.13m である。覆土は 2 層である。遺物は出土していない。古代と推測される。

SK33 (図版 14、写真図版 8)

22K9 に位置する。遺構確認面は IV a 層である。遺構は調査区外へ広がっていると考えられる。上端の平面形は不整円形、断面形は半円形である。確認できた範囲で規模は、上端で長軸 1.14m・短軸 0.49m、深さ 0.25m である。覆土は 2 層に分かれる。1 層から土師器無台椀、土師器長甕、2 層から須恵器無台が出土している。このほかに 1 层から土師器無台椀細片、土師器長甕細片、土師器鍋細片が出土している。平安時代と推測される。

SK34 (図版 14、写真図版 8)

21L23 に位置する。遺構確認面は IV a 層であるが上面の大半は削平されている。上端の平面形は長方形、断面形は皿形である。規模は上端で長軸 1.18m・短軸 0.88m、深さ 0.16m である。覆土は 2 層に分かれる。1 层から土師器小甕細片が出土している。平安時代と推測される。

SK35 (図版 9、写真図版 9)

22K10・22L6 に位置する。遺構確認面は IV a 層であるが上面は削平されている。上端の平面形は長方形、断面形は皿形である。規模は上端で長軸 1.72m・短軸 1.56m、深さ 0.27m である。覆土は 1 层である。1 层から礫・軽石・須恵器無台杯細片・土師器小甕細片・土師器長甕細片・炭化物 2.41g・近世陶器すり鉢が出土している。近世の遺構と推測される。

SK37 (図版 14、写真図版 9)

19N6・7・12 に位置する。遺構確認面は IV b 層である。上端の平面形は不整円形、断面形は台形である。規模は上端で長軸 1.66m・短軸 1.57m、深さ 0.35m である。覆土は 2 層に分かれる。覆土の様相が SE25・SE31・SE41 と似ており、井戸の可能性もあるが底面の形状が平坦ではないことから、土坑と判断した。1 层下面から刀子と推測される鉄製品が出土している。中世と推測される。

SK40 (図版 15、写真図版 9)

20M4 に位置する。遺構確認面は IV b 層である。上端の平面形は円形、断面形は半円形である。規模は上端で長軸 0.61m・短軸 0.58m、深さ 0.25m である。覆土は 1 层である。遺物は出土していない。覆土の様相から中世と推測する。

SK44 (図版 14、写真図版 9)

19L12・13 に位置する。遺構確認面は IV b 層である。遺構は調査区外へ一部広がっている。上端の平面形は不整円形、断面形は皿形である。確認できた範囲での規模は、上端で長軸 1.47m・短軸 1.43m、深さ 0.11m である。覆土は 2 層に分かれる。遺物は出土していない。覆土の様相が SE41 と似ていることから、中世と推測する。

SK52 (図版 15、写真図版 10)

21M1 に位置する。遺構確認面は IV b 層である。SK53 と隣接する。上端の平面形は梢円形、断面形は皿形である。規模は上端で長軸 0.81m・短軸 0.61m、深さ 0.12m である。覆土は 1 层である。遺物は出土していない。覆土の様相から中世と推測するが近世の可能性もある。

SK53 (図版 15、写真図版 10)

21L5・10 に位置する。遺構確認面は IV b 層である。SK52 と隣接する。上端の平面形は梢円形、断面形は皿

形である。規模は上端で長軸 0.68m・短軸 0.49m、深さ 0.13m である。覆土は 1 層である。遺物は出土していない。SK52 同様、中世と推測するが近世の可能性もある。

SK57 (図版 15、写真図版 10)

20L17・22 に位置する。遺構確認面は IV b 層である。上端の平面形は不整円形、断面形は円形である。規模は上端で長軸 0.69m・短軸 0.58m、深さ 0.25m である。覆土は 2 層に分かれる。遺物は出土していない。覆土の様相から平安時代と推測する。

3) 性格不明 (SX)

SX5 (図版 15、写真図版 10)

21K7 に位置する。遺構確認面は IV a 層であるが上面は削平されている。上端の平面形は長方形、断面形は皿形である。規模は上端で長軸 0.62m・短軸 0.36m、深さ 0.10m である。覆土は 1 層である。1 層から土師器無台椀細片が出土している。平安時代と推測される。

SX6 (図版 15、写真図版 10)

21K6 に位置する。遺構確認面は IV a 層である。上端の平面形は円形、断面形は皿形である。規模は上端で長軸 0.50m・短軸 0.38m、深さ 0.06m である。覆土は 1 層である。遺物は出土していない。古代と推測する。

SX7 (図版 15、写真図版 11)

21J4・5・9・10 位置する。遺構確認面は IV a 層である。上端の平面形は長方形、断面形は台形である。規模は上端で長軸 3.40m・短軸 1.58m、深さ 0.71m である。覆土は 3 層に分かれる。いずれも細片であるが 1 層から須恵器無台杯・土師器無台椀・土師器長甕・碟・近世陶器鉢・近世陶器椀・器種不明近世陶器が出土し、2 層から須恵器無台杯・須恵器杯蓋・須恵器長頸瓶・土師器無台椀・黒色土器無台椀・土師器小甕・土師器長甕・碟・近世陶器皿・同椀、3 層から須恵器無台杯・土師器無台椀・近世陶器すり鉢・梅の種が出土している。3 層から近世陶器片が出土しているので近世以降である。

SX8 (図版 15、写真図版 11)

21J15・21K11 に位置する。遺構確認面は IV a 層である。上端の平面形は長方形、断面形は皿形である。規模は上端で長軸 1.37m・短軸 0.56m、深さ 0.07m である。覆土は 1 层である。遺物は出土していない。覆土の様相から古代と推測される。

SX16 (図版 15、写真図版 11)

21J12 に位置する。遺構確認面は IV a 層である。遺構の大半はコンクリート基礎や IV a 層上面の削平により失われている。上端の平面形は長方形と推測される。断面形は皿形と推測する。規模は不明である。深さ 0.09m である。1 層から土師器無台椀・土師器長甕が、2 層から炭化物 14.95g が出土している。平安時代と推測される。

SX17 (図版 15、写真図版 11)

21I5 に位置する。遺構確認面は IV b 層である。IV a 層が削平されているため、遺構上面は失われている。調査区縁辺に位置し、調査区外へ広がっている。排水路により一部切られる。上端の平面形は不整形、断面形は皿形である。規模は確認できた範囲で長軸 1.07m・短軸 0.69m、深さ 0.10m である。覆土は 1 層である。いずれも細片であるが 1 層から須恵器無台杯・土師器無台椀が出土している。平安時代と推測される。

SX18 (図版 15、写真図版 11)

21J3 に位置する。遺構確認面は IV a 層である。西端部はコンクリート基礎のため失われている。上端の平面形は梢円形と推測される。断面形は皿形である。規模は確認できた範囲で長軸 0.86m・短軸 0.80m、深さ 0.06m である。1 層から土師器鍋が出土している。このほかにいずれも細片であるが 1 層から須恵器無台杯・土師器無台椀・土師器長甕・土師器鍋が出土している。平安時代と推測される。

SX21 (図版 10、写真図版 12)

21N24・22N4 に位置する。遺構確認面はIV b 層である。調査区縁辺に位置し、遺構の大半は調査区外へ広がっていると推測される。上端の平面形は円形と推測される。断面形は台形である。規模は確認できた範囲で長軸 3.22m・短軸 0.50m、深さ 0.63m である。覆土は 2 層に分かれる。遺物は出土していない。遺構覆土が直上層と同質の擾乱土であることから、近現代と推測される。

SX22 (図版 10、写真図版 12)

22N22・23 に位置する。遺構確認面はIV a 層である。調査区縁辺に位置し、遺構の大半は断面調査区外へ広がっていると推測される。上端の平面形は不明、断面形は皿形と推測される。規模は確認できた範囲で長軸 0.88m・短軸 0.63m、深さ 0.20m である。覆土は 1 层である。遺物は出土していない。覆土の様相から古代と推測される。

SX24 (図版 10、写真図版 12)

22N2・6・7 に位置する。遺構確認面はIV b 層である。上端の平面形は不整形、断面形は箱形である。規模は上端で長軸 2.15m・短軸 2.07m、深さ 0.47m である。1 層からほぼ完形の近現代の香炉と推測される陶器と礫が出土している。近現代と推測する。

SX32 (図版 15、写真図版 12)

21M11 に位置する。遺構確認面はIV a 層である。SD1 より古い。SX46 に隣接する。上端の平面形は不整形、断面形は箱形である。規模は上端で長軸 1.37m・短軸 0.69m、深さ 0.19m である。覆土は 2 層に分かれる。遺物は出土していない。平安時代と推測される。

SX46 (図版 16、写真図版 12)

21M11・12 に位置する。遺構確認面はIV a 層である。上端の平面形は梢円形、断面形は台形である。規模は上端で長軸 1.07m・短軸 0.57m、深さ 0.42m である。遺物は出土していない。SX32 と近似することから平安時代と推測する。

SX47 (図版 16、写真図版 12)

21L8・12・13 に位置する。遺構確認面はIV a 層であるが、上面の大部分は削平されている。SD2 を切る。上端の平面形は不整形、断面形は半円形である。規模は上端で長軸 1.90m・短軸 1.49m、深さ 0.42m である。覆土は 1 层である。1 层から須恵器無台杯細片・土師器長甕細片が出土している。平安時代と推測される。

SX48 (図版 16、写真図版 13)

20N1・2・6 に位置する。遺構確認面はIV b 層である。上端の平面形は不整形、断面形は皿形である。規模は上端で長軸 2.91m・短軸 0.93m、深さ 0.08m である。覆土は 1 层である。銭貨が出土している。判読不能であった。覆土の様相から中世の可能性が高い。

SX51 (図版 16、写真図版 13)

21M7 に位置する。確認面はIV b 層である。南側はサブレンチ 5 により失われている。上端の平面形は不整形、断面形は台形である。規模は確認できる範囲で長軸 1.15m・短軸 0.53m、深さ 0.31m である。遺物は出土していない。覆土の様相から中世の可能性が高い。

SX55 (図版 16、写真図版 13)

21L2 に位置する。確認面はIV b 層である。南側はサブレンチ 5 により失われている。上端の平面形は円形と推測される。断面形は皿形である。規模は確認できる範囲で長軸 1.14m・短軸 0.49m、深さ 0.23m である。1 层から土師器無台碗細片・輕石細片が出土している。平安時代と推測される。

SX58 (図版 16、写真図版 14)

18M8 に位置する。遺構確認面はIV a 層である。SD29 に隣接する。上端の平面形は不整形、断面形は皿形である。規模は上端で長軸 0.76m・短軸 0.64m、深さ 0.12m である。遺物は出土していない。周辺は包含層(III b・

III c 層) の遺存状況が悪く、IV a 層上面も削平されている可能性が高いため特定できないが、覆土の様相から古代～中世の遺構と推測する。

4) 溝 (SD)

SD1 (図版 8・9・16、写真図版 13)

21J・21K・21L・21M に位置する。遺構確認面は IV a 層である。長軸方向はほぼ東西に延びる (N-85° -E)。断面形は皿形である。溝の南西端は調査区外へ延びている。北東端はサブレンチ 5 により失われているが、このトレンチより北側では検出できないことから、IV a 層が削平されたときに、既に壊されていた可能性が高い。確認できた規模は上端で長軸 27.37m・短軸 0.96m、深さ 0.19m である。覆土は 1 層である。1 層から須恵器無台杯・須恵器甕・土師器無台椀・黒色土器無台椀・土師器小甕・土師器長甕・近世陶器椀が出土している。平安時代と推測される。

SD2 (図版 8・9・16、写真図版 13)

21J・21K・21L に位置する。遺構確認面は IV a 層である。長軸方向はほぼ東西に延びる (N-83° -E)。断面形は台形である。溝の南西端、北東端の状況は SD1 と同様の状況で損壊している。確認できた規模は上端で長軸 23.87m・短軸 0.80m、深さ 0.14m である。SD1 と並行するようで、溝間の幅は 1m 前後でほぼ均一である。覆土は 1 层である。1 層から須恵器無台杯・須恵器甕・土師器器種不明品脚部が出土しているほか、細片であるが須恵器杯蓋・須恵器無台杯・須恵器甕・土師器無台椀・黒色土器無台椀・土師器小甕・土師器長甕・土師器鍋が出土している。平安時代と推測される。

SD3 (図版 8・9・16、写真図版 13)

21I・21J・21K・21L に位置する。遺構確認面は IV a 層である。長軸方向はほぼ東西に延びる (N-86° -E)。断面形は台形である。溝の南西端、北東端の状況は SD1 と同様の状況である。IV a 層が削平されたときに、既に壊されていた可能性が高い。確認できた規模は上端で長軸 50.76m・短軸 0.93m、深さ 0.21m である。覆土は 2 層に分かれる。1 層から須恵器有台杯・須恵器無台杯・須恵器甕・土師器小甕・土師器長甕・土師器鍋・炭化物 2.62g が出土している。平安時代と推測される。

SD4 (図版 8・9・16、写真図版 13・14)

21J・21K に位置する。遺構確認面は IV a 層である。長軸方向はほぼ東西に延びる (N-81° -E)、SD1 ~ 3 とはほぼ同じ方向である。断面形は皿形である。規模は上端で長軸 6.12m・短軸 0.73m、深さ 0.02m である。覆土は 1 层である。1 層から須恵器無台杯・黒色土器無台椀・土師器長甕の細片が出土している。平安時代と推測される。

SD11 (図版 8・16、写真図版 14)

21I・21J に位置する。遺構確認面は IV a 層である。長軸方向はほぼ東西に延びる (N-81° -W) が、SD1 ~ 4 と比較すると傾きが異なる。断面形は台形である。西端は搅乱により壊れていると推測される。確認できた規模は、上端で長軸 6.98m・短軸 1.07m、深さ 0.29m である。覆土は 2 層に分かれる。1 層から須恵器無台杯・須恵器長頸瓶・須恵器甕・土師器無台椀・土師器小甕・土師器長甕の細片が、2 層から土師器無台椀・土師器長甕の細片が出土している。平安時代と推測される。

SD23 (図版 10・16、写真図版 14)

22N に位置する。遺構確認面は IV a 層である。長軸方向はほぼ南北に延びる (N-2° -E)。断面形は皿形である。南端は調査区外へ延び、北端は削平により失われている。確認できた規模は、上端で長軸 4.80m・短軸 1.00m、深さ 0.10m である。覆土は 1 层である。1 層から須恵器甕・土師器無台椀・土師器長甕の細片が出土している。平安時代と推測される。

SD29 (図版 11・12・16、写真図版 14)

18Mに位置する。遺構確認面はIV a層である。長軸方面はほぼ東西に延びる(N-73°-E)。断面形は皿形である。北東端はコンクリート基礎により失われるが、調査区外へ延びていると推測される。確認できた規模は上端で長軸6.44m・短軸0.94m、深さ0.11mである。覆土は2層に分かれる。遺物は出土していない。周辺は包含層(III b・III c層)の遺存状況が悪く、IV a層上面も削平されている可能性が高いため特定できないが、覆土の様相から古代～中世と推測する。

SD49 (図版11・16、写真図版15)

19M・20Mに位置する。遺構確認面はIV b層である。長軸方向は北西～南東に延びる(N-22°-W)。断面形は半円形である。規模は上端で長軸5.92m・短軸0.58m、深さ0.12mである。覆土は1層である。遺物は出土していない。周辺の井戸が古代～中世であることから、この中に納まる時期の遺構と推測する。

SD50 (図版10・16、写真図版15)

21M・21Nに位置する。遺構確認面はIV b層である。長軸方向はほぼ東西に延びる(N-90°-W)。東端は調査区外へ延び、西端はサブトレンチ5により切られるが、IV a層が削平されているため、SD1～SD3との関係はつかめなかった。断面形は皿形である。確認できた規模は上端で、長軸12.14m・短軸1.59m、深さ0.10mである。覆土は1層である。遺物は出土していない。方向がSD1～SD3と近似していることなどから、平安時代の遺構と推測する。

SD54 (図版9・16、写真図版15)

20L・21Lに位置する。遺構確認面はIV b層である。長軸方向は北西～南東に延びる(N-18°-W)。北端は調査区外へ延びる。南端はサブトレンチ5により切られる。断面形は皿形である。確認できた規模は上端で、長軸7.90m・短軸0.74m、深さ0.11mである。覆土は1層である。遺物は出土していない。古代～中世の遺構と推測する。

5) 小 土 坑 (Pit)

P9 (図版8)

21J12・13に位置する。SD3を切る。上端の平面形は円形、断面形は筒形である。確認できた規模は上端で、長軸0.46m・短軸0.18mである。1層から土師器無台椀・土師器長甕の細片が出土している。平安時代と推測される。

P10 (図版8)

21J18に位置する。SD2を切る。南端は調査区外へ広がる。上端の平面形は円形、断面形は筒形である。確認できた規模は上端で、長軸0.52m・短軸0.20m、深さ0.30mである。1層から土師器長甕細片が出土している。平安時代と推測される。

P12 (図版8)

21J9・10に位置する。SX7に切られる。上端の平面形は円形、断面形は筒形である。確認できた規模は上端で、長軸0.44m・短軸0.28mである。1層から土師器無台椀・碟細片が出土している。平安時代と推測される。

P36 (図版9)

22K9に位置する。上端の平面形は円形、断面形は筒形である。規模は上端で長軸0.32m・短軸0.26mである。1層から土師器長甕細片が出土している。平安時代と推測される。

P45 (図版9)

22K14に位置する。上端の平面形は円形、断面形は筒形である。規模は上端で長軸0.29m・短軸0.28mである。1層から土師器長甕細片が出土している。平安時代と推測される。

B 3 区の遺構

3区では、井戸(SE) 10基・土坑(SK) 58基・性格不明遺構(SX) 7基・溝(SD) 13基・小土坑(Pit) 332基と畠状遺構が発見された。

後述するが、調査区は全域にわたり、耕作などによる掘り返しや土木工事など削平が行われており、遺構確認面(特にⅢ層上面)は全域にわたり上面が削平されていると推測される。従ってⅢ層より上層は自然堆積層が存在していない。このような事情から、井戸以外の遺構は、耕作痕などを遺構と誤認している可能性や、掘り返し・削平などで損壊している遺構である可能性が非常に高いので事実報告のみとする。

1) 井 戸 (SE)

SE9 (図版22、写真図版15)

13C1・6に位置する。西端部は基礎コンクリートによって失われている。上端の平面形は東西方向にやや膨らむ円形と推測される。断面形はすり鉢形である。確認できた規模は上端で長軸1.92m・短軸1.84m、深さ1.5m、底面標高-0.59mである。覆土は6層に分かれ。VI層まで掘り抜いている。V層は確認できなかった。黒褐色シルトと灰色シルトのブロックが混ざり合う土が堆積していることから、自然に埋没したのではなく、何らかの掘削土で埋めている様相を呈す。1層から土師器長甕細片が出土している。このほか2層から珠洲焼甕細片が、6層から須恵器甕細片が出土している。時期等詳細は不明であるが中世と推測される。

SE28 (図版22、写真図版15)

11C17・22に位置する。東側は土木工事によって失われている。上端の平面形は円形と推測される。断面形は台形である。確認できた規模は上端で直径0.44m、深さ1.34m、底面標高0.18mである。覆土は3層に分かれ。遺物は出土していない。古代～中世と推測する。

SE30 (図版22、写真図版15)

12C19・20・24・25に位置する。南側の一部をSE96に切られる。上端の平面形は隅丸の方形に近い楕円形で、断面形は逆凸形である。覆土は22層に分かれ。1～14層は井戸廃絶後堆積したもので、これら以外は井戸造成時に埋めた覆土と考える。掘り形はIV層を掘り抜きV層まで達している。規模は上端で、長軸2.45m・短軸2.01m、深さ1.44m、底面標高-0.60mである。1層から須恵器甕・珠洲甕(98 SE31他と接合)・珠洲焼すり鉢が出土している。2層からは珠洲すり鉢が出土している。このほかはいずれも細片であるが、1層から土師器長甕、2層から土師器無台椀・土師器小甕・土師器長甕、3層から須恵器無台杯、9層から土師器長甕、11層から須恵器杯蓋、13層から土師器無台椀・土師器長甕、14層から須恵器無台杯・土師器無台椀・土師器小甕・土師器長甕が出土している。

また井戸枠の部材と推測される木製品が出土し、底面から曲物が出土している。曲物の取上げは11層以下の湧水が激しく、十分な記録は取れなかった。また曲物取り上げ直後に井戸壁面が崩落した。時期の詳細は不明であるが出土遺物から、中世と推測される。

SE31 (図版24、写真図版17)

12D16・21に位置する。SE96の東側の一部を切り、SE193にほとんどを切られている。確認できた範囲で、平面形は不明、断面形はすり鉢形を呈すると推測する。規模は深さが0.88m、底面標高は0.58mである。覆土は7層に分かれ。1層から須恵器甕、2層から珠洲甕(98 SE30他と接合)・鉄滓が出土しているほか、いずれも細片であるが、2層から土師器無台椀・甕、7層から土師器無台椀・土師器長甕が出土している。出土遺物と切り合いで中世と推測され、SE30より新しい。

SE45 (図版23、写真図版16)

11C23・12C3・4に位置する。北側約半分は調査区外へ広がっている。SD51に切られる。遺構の上部は複

乱されている。上端の平面形は円形を呈すると推測される。断面形は台形である。規模は確認できた範囲で直径2.72m、深さ1.43m、底面標高0.28mである。覆土は24層に分かれる。1~10層は黒褐色シルトや黒褐色砂質シルトが主体的であるが、これ以外は黄褐色シルトに黒褐色シルトブロックが混ざり合う状態であった。掘り形はIV層を掘り抜き、V層に達している。1層から須恵器杯蓋・無台杯・須恵器・土師器無台椀・土師器長甕が、3層から土師器長甕が、4層から須恵器無台杯・土師器小甕が、5層から須恵器甕・土師器無台椀・土師器長甕が、20層から須恵器無台杯・土師器無台椀・土師器長甕が出土している。また20層から種別は不明であるが木製部材が出土している。出土遺物から平安時代と推測される。

SE95 (図版23、写真図版17)

12D1・2・6・7に位置する。北側の一部は調査区外へ広がるとともに、第6次調査時に設定したサブトレンドにより一部切られている。また北西部の一部はSX341により切られる。東側の一部はSE145に切られる。SE45同様北側の遺構上部は搅乱されている。平面形は不整円形を呈すると推測される。断面形は半円形である。確認できた範囲の規模は、上端で長軸2.60m・短軸2.38m、深さ0.93m、底面標高0.66mである。覆土は14層に分かれる。掘り形はIV層を掘り抜き、V層まで達する。1層から須恵器有台杯・須恵器無台杯・土師器無台椀・土師器長甕・土師器小甕・珠洲焼甕・近世陶器椀・碟が、2層から須恵器無台杯・須恵器甕・土師器無台椀・土師器長甕・土師器小甕が、3層から須恵器無台杯・土師器無台椀・土師器長甕・土師器小甕が、4層から須恵器無台杯・土師器無台椀・土師器長甕・土師器小甕が、5層から須恵器無台杯・土師器無台椀・土師器長甕が、6層から土師器無台椀・土師器長甕・土師器小甕が、10層から土師器小甕が、12層から須恵器甕・土師器長甕が出土している。珠洲焼甕と近世陶器椀の細片は混入と考えられることから、平安時代と推測される。

SE96 (図版24、写真図版17)

12C5に位置する。北側はSE30を切り、東側はSE31に切られる。南側の上部は搅乱されている。完掘後、湧水のため崩落した。平面形は円形と推測される。断面形は半円形である。規模は上端で長軸1.46m・短軸1.22m、深さ1.08m、底面標高0.42mである。覆土は11層に分かれる。掘り形はIV層を掘り抜き、V層まで達する。1層から須恵器無台杯・須恵器甕・土師器無台椀・土師器長甕・土師器小甕が、3層から土師器長甕・碟が出土している。切り合い関係から中世と推測される。SE30より新しく、SE31より古い。

SE145 (図版24、写真図版17)

12D6・7・11・12に位置する。SD250・SD268を切る。平面形は不整形であるが底面の掘り形を見ると、隅丸の方形のようである。断面形は台形である。規模は上端で長軸2.22m・短軸1.45m、深さ1.0m、底面標高0.58mである。覆土は7層に分かれる。掘り形はIV層を掘り抜き、V層まで達する。3層から珠洲すり鉢が出土している。このほかにいずれも細片であるが、1層から須恵器無台杯・土師器長甕が、3層から須恵器甕・土師器長甕・碟が、5層から須恵器甕・土師器長甕が出土している。中世と推測される。

SE193 (図版24、写真図版17・18)

12D16・21に位置する。SE193がSE31を切る。平面形は円形、断面形は台形である。確認できた範囲で規模は長軸1.88m・短軸1.62m、深さ1.04m、底面標高0.36mである。覆土は21層に分かれる。堆積状況から井戸枠が設置されていたものと考えられ、底部には曲物が据えられていた可能性もある。この井戸は、全体的に大きく掘り抜いてから井戸枠を設置し、その周りを残土で埋めて使用されていたとのと推測される。よって18~21層は井戸枠設置後埋め戻された土層で、1~16層は井戸廃絶後堆積した土層、17層は井戸枠が腐敗したことによって堆積した土層と考えられる。さらに、9~11層が12~15層を切っていることから、井戸が廃棄され16~12層まで埋没した後、何らかの掘削行為を行っている。1~8層はこの行為後、堆積したものと考えられる。あるいは井戸廃絶後は全て人為的に埋め戻されている可能性がある。掘り形はIV層を掘り抜き、V層まで達する。2層から砥石・碟、5層から須恵器無台杯・砥石に転用された須恵器甕細片・珠洲甕(98 SE30・31他と接合)、13層から珠洲焼広口甕、14層から軽石が出土している。これ以外にはいずれも細片で

あるが5層から珠洲焼甕、8層から礫、11層から土師器無台椀、12層から須恵器甕・土師器無台椀・土師器長甕、13層から須恵器無台杯・土師器無台椀・土師器長甕、14層から須恵器無台杯・須恵器甕・土師器無台椀・土師器長甕が出土している。また井戸枠の部材と推測される木製品が出土している。切り合い関係や出土遺物から中世と推測される。

SE283（図版24、写真図版18）

13C6・7・11・12に位置する。平面形は円形と推測される。断面形は半円形である。東側半分は搅乱により失われている。南側の一部は調査区外へ広がっている。確認できた範囲で規模は、上端で1.15m、深さ0.53m、底面標高0.80mである。覆土は7層に分かれ。掘り形はIV層を掘り抜き、V層まで達する。遺物は出土していない。覆土がSE9と近似し、位置も近いことから中世と推測される。

2 土 坑 (SK)

SK1（図版25、写真図版18）

13B9に位置する。平面形は梢円形と推測される。断面形は皿形である。遺構の東側は体育館基礎により失われている。規模は上端で長軸0.61m、深さ0.25mである。P2を切る。覆土は2層に分かれ。遺物は出土していない。

SK3（図版25、写真図版18）

13B9に位置する。平面形は不整形、断面形は箱形である。遺構の東側は体育館基礎により失われている。規模は上端で長軸1.00m、深さ0.22mである。P2に切られる。覆土は2層に分かれ。遺物は出土していない。

SK4（図版25、写真図版18）

13B4・9に位置する。平面形は円形と推測される。断面形は皿形である。東側は体育館基礎により失われている。規模は上端で長軸1.59m、深さ0.24mである。SK3を切る。覆土は2層である。1層から須恵器無台杯・土師器無台椀・土師器長甕・近世陶器椀が出土している。

SK5（図版25、写真図版18）

13B9・10に位置する。平面形は長方形、断面形は皿形である。規模は上端で長軸0.59m・短軸0.44m、深さ0.05mである。覆土は1層である。遺物は出土していない。

SK11（図版25、写真図版18）

12B24・25に位置する。平面形は不整形、断面形は皿形である。東側は体育館基礎により失われている。規模は上端で長軸0.67m・短軸0.30m、深さ0.17mである。覆土は2層に分かれ。遺物は出土していない。

SK12（図版25、写真図版18）

12B20に位置する。平面形は円形と推測される。断面形は半円形である。規模は上端で長軸0.42m・短軸0.27m、深さ0.31mである。SD21に切られる。覆土は2層に分かれ。遺物は出土していない。

SK13（図版25、写真図版19）

12B25に位置する。平面形は梢円形、断面形は半円形である。規模は上端で長軸0.49m・短軸0.41m、深さ0.20mである。覆土は6層に分かれ。1層から土師器長甕細片が出土している。

SK14（図版25、写真図版19）

12B25に位置する。平面形は不整形、断面形は半円形である。南東部はコンクリート基礎により失われている。また北西部はP15に切られる。規模は上端で短軸0.34m、深さは0.19mである。覆土は3層に分かれている。1層から土師器長甕の細片が出土している。

SK17（図版25、写真図版18）

12B20・25に位置する。平面形は梢円形、断面形は半円形である。規模は上端で長軸0.78m・短軸0.50m、深さ0.31mである。SK18を切る。覆土は3層に分かれ。1層から須恵器長頸瓶・土師器長甕細片が出土し

ている。

SK18 (図版 25、写真図版 18)

12B20 に位置する。平面形は不整形、断面形は箱形である。底面は凹凸に富んでいる。規模は上端で長軸 1.22m・短軸 0.48m、深さ 0.13m である。SK17・P19 に切られる。覆土は 1 層である。遺物は出土していない。

SK20 (図版 25、写真図版 18)

12B20 に位置する。平面形は不整形、断面形は台形である。規模は上端で長軸 0.72m・短軸 0.41m、深さ 0.20m である。SD21・P25 に切られる。覆土は 1 層である。遺物は出土していない。

SK22 (図版 25、写真図版 19)

12B20 に位置する。平面形は不整形、断面形は皿形である。規模は上端で短軸 0.32m、深さ 0.15m である。SK23 に切られる。覆土は 1 層である。遺物は出土していない。

SK23 (図版 25、写真図版 19)

12B15 に位置する。平面形は不整形、断面形は皿形である。規模は上端で短軸 0.40m、深さ 0.19m である。SK24 を切る。覆土は 2 層に分かれる。遺物は出土していない。

SK24 (図版 25、写真図版 19)

12B15 に位置する。平面形は不整形、断面形は半円形である。東側は体育館基礎により失われている。規模は上端で長軸 0.70m・短軸 0.67m・深さ 0.46m である。SK23 に切られる。覆土は 5 層に分かれる。遺物は出土していない。

SK26 (図版 25、写真図版 19)

12B20 に位置する。平面形は不整形、断面形は台形である。規模は上端で長軸 0.57m・短軸 0.43m、深さ 0.14m である。SK27・P34 に切られる。覆土は 2 層に分かれる。1 層から土師器長甕の細片・碟の細片が出土している。

SK27 (図版 25、写真図版 19)

12B20・12C16 に位置する。平面形は不整形、断面形は皿形である。規模は上端で長軸 2.12m・短軸 0.36m、深さ 0.14m である。SK26 を切り、P34 に切られる。覆土は 2 層に分かれる。遺物は出土していない。

SK35 (図版 25、写真図版 19)

12B10・15 に位置する。平面形は楕円形、断面形は半円形である。規模は上端で長軸 0.73m、深さ 0.32m である。P165 を切り、SK36 に切られる。覆土は 2 層に分かれる。遺物は出土していない。

SK36 (図版 25、写真図版 19)

12B15 に位置する。平面形は不整形、断面形は皿形である。規模は上端で長軸 0.52m・短軸 0.40m・深さ 0.19m である。SK35 を切る。覆土は 1 層である。遺物は出土していない。

SK37 (図版 25、写真図版 20)

12B5・10 に位置する。平面形は円形と推測される。断面形は皿形である。東側は体育館基礎により失われている。規模は上端で長軸 0.50m、短軸 0.20m、深さ 0.27m である。覆土は 3 層に分かれる。遺物は出土していない。

SK42 (図版 26、写真図版 19)

11C21 に位置する。平面形は長方形、断面形は半円形である。規模は上端で長軸 0.50m・短軸 0.37m、深さ 0.37m である。P173 を切る。覆土は 5 層に分かれる。遺物は出土していない。

SK43 (図版 26、写真図版 20)

11C16 に位置する。東側は調査区外へ広がる。平面形は円形と推測される。断面形は半円形である。規模は上端で短軸 0.36m、深さ 0.14m である。北西部は SK44 に切られる。覆土は 3 層に分かれる。遺物は出土していない。

SK44 (図版 22、写真図版 20)

11C16 に位置する。平面形は不整形と推測される。断面形は皿形である。SK43 を切る。規模は上端で長軸 1.00m、深さ 0.06m である。覆土は 1 層である。1 層から須恵器甕細片が出土している。

SK46 (図版 26、写真図版 20)

12C6 に位置する。平面形は長方形、断面形は台形である。西側は P64 に、北側は P195 に、南側は SK335 に、中心付近は P334 に切られる。遺構が複雑に絡み合い、原形は保っていないと推測される。確認できた規模は上端で長軸 0.95m、深さ 0.39m である。覆土は 1 層である。1 層から須恵器無台杯細片・土師器無台碗細片・土師器長甕細片が出土している。

SK47 (図版 26、写真図版 20)

12C1 に位置する。平面形は不整形、断面形は皿形である。SK48 を切り、P170 に切られる。規模は上端で長軸 1.17m、短軸 0.85m、深さ 0.12m である。覆土は 2 層に分かれる。1 層から土師器小甕・長甕が、4 層から瓶と推測される近世陶器片が出土している。

SK48 (図版 26、写真図版 20)

12B5・12C1 に位置する。平面形は不整形、断面形は半円形である。SK49 を切り、SK47・P216 に切られる。規模は上端で長軸 1.40m・短軸 0.65m、深さ 0.34m である。覆土は 3 層に分かれる。遺物は出土していない。

SK49 (図版 26、写真図版 20)

12B5・12C1 に位置する。平面形は不整形、断面形は半円形である。SK48・SD41 を切る。規模は上端で長軸 1.12m・短軸 0.58m、深さ 0.12m である。覆土は 2 層に分かれる。遺物は 1 層から須恵器甕細片・土師器長甕細片・土師器小甕細片が出土している。

SK50 (図版 26、写真図版 20)

12C1・2 に位置する。北側はコンクリート基礎により失われている。上部は擾乱される。平面形は不整形、断面形は台形である。P222・SD51 を切る。深さは 0.58m である。覆土は 5 層に分かれる。2 層から土師器無台碗細片・土師器鍋が出土している。

SK52 (図版 26、写真図版 21)

12C2・3 に位置する。平面形は不整形、断面は皿形である。P223 に切られる。底部には Pit 状の窪みが見られるが、覆土に差異は認められなかった。規模は上端で長軸 1.23m・短軸 1.10m、深さ 0.44m である。覆土は 5 層に分かれる。遺物はいずれも細片であるが、1 层から須恵器無台杯・土師器長甕・珠洲焼甕が、2 層から土師器無台碗・鉄滓が出土している。

SK53 (図版 26、写真図版 21)

12C7 に位置する。平面形は楕円形、断面形は半円形である。P54・P224 に切られる。底部に Pit 状の窪みが見られる。規模は上端で長軸 1.55m・短軸 0.88m、深さ 0.41m である。覆土は 2 層に分かれている。1 層から須恵器杯蓋・須恵器無台杯・須恵器甕・土師器無台碗・土師器長甕・碟が出土している。

SK55 (図版 26、写真図版 21)

12C7 に位置する。平面形は方形、断面形は台形である。SK56 に切られる。規模は上端で長軸 0.44m・短軸 0.44m、深さ 0.55m である。覆土は 4 層に分かれている。遺物は出土していない。

SK56 (図版 26、写真図版 21)

12C7 に位置する。平面形は不整形と推測される。断面形は皿形である。SK55 を切る。確認できた範囲で規模は、上端で長軸 0.80m・短軸 0.50m、深さ 0.04m である。覆土は 1 層である。遺物は出土していない。

SK57 (図版 26、写真図版 21)

12C7 に位置する。平面形は長方形、断面形は半円形である。P58 を切る。規模は上端で長軸 0.48m・短軸 0.42m、深さ 0.26m である。覆土は 3 層に分かれる。遺物は出土していない。

SK59 (図版 27、写真図版 22)

12C12 に位置する。平面形は不整橢円形、断面は皿形である。SK338・SD21・P339 を切る。規模は上端で長軸 1.02m・短軸 0.88m、深さ 0.31m である。覆土は 2 層に分かれる。2 層から珠洲甕 (98 SE30・31 他と接合)・珠洲焼すり鉢・青磁碗が出土しているほか、いざれも細片であるが 1 层から碟、2 層から須恵器無台杯・土師器無台碗・土師器小甕・碟・現代の瓦が出土している。近現代の遺構である。

SK61 (図版 27、写真図版 22)

12C16・17 に位置する。平面形は橢円形、断面形は皿形である。規模は上端で長軸 0.87m・短軸 0.32m、深さ 0.07m である。覆土は 4 層に分かれる。遺物は出土していない。

SK62 (図版 27、写真図版 22)

12C17 に位置する。東側は P63 に切られる。平面形は長方形、断面形は皿形である。規模は上端で長軸 0.61m・短軸 0.42m、深さ 0.18m である。覆土は 1 層である。1 层から青磁碗細片が出土している。

SK65 (図版 27、写真図版 22)

12C17 に位置する。南側は確認調査時のトレーニングにより失われている。平面形は橢円形、断面形は皿形である。SK66 を切る。規模は上端で長軸 0.61m・短軸 0.35m、深さ 0.08m である。覆土は 1 層である。遺物は出土していない。

SK66 (図版 27、写真図版 22)

12C17 に位置する。西側は SK65 に切られる。断面形は皿形である。規模は上端で長軸 0.32m・短軸 0.35m、深さは 0.16m である。覆土は 2 層に分かれる。1 层から須恵器無台杯細片と炭化物細片が出土している。

SK67 (図版 27、写真図版 23)

12C17・18 に位置する。平面形は不整形、断面形は皿形である。規模は上端で長軸 0.80m・短軸 0.74m、深さ 0.22m である。覆土は 2 層に分かれる。2 層から鉄滓細片・焼土塊細片が出土している。

SK68 (図版 27、写真図版 23)

12C18 に位置する。平面形は不整形、断面形は皿形である。南側は確認調査時のトレーニングにより一部失われている。確認できた規模は上端で長軸 0.57m・短軸 0.72m、深さ 0.16m である。覆土は 4 層に分かれる。遺物は出土していない。

SK69 (図版 27、写真図版 4)

12C13・18 に位置する。平面形は不整形、断面形は台形である。SK70 を一部切り、東側は P146 に切られる。規模は上端で長軸 1.35m・短軸 0.70m、深さ 0.19m である。覆土は 1 层である。1 层から須恵器甕細片・珠洲焼すり鉢細片・近世陶器片が出土している。

SK70 (図版 27、写真図版 23)

12C13 に位置する。平面形は不整形、断面形は皿形である。南側の一部を SK69 に切られる。規模は上端で長軸 0.98m・短軸 0.39m、深さ 0.09m である。覆土は 3 層に分かれる。遺物は出土していない。

SK77 (図版 27、写真図版 23)

12C14・15 に位置する。平面形は不整形、断面形は皿形である。一部 SD76 に切られる。確認できた規模は上端で長軸 0.78m・短軸 0.37m、深さ 0.07m である。覆土は 1 层である。遺物は出土していない。

SK80 (図版 27、写真図版 23)

12C8・13 に位置する。平面形は橢円形、断面形は皿形である。P144 を切る。規模は上端で長軸 0.62m・短軸 0.39m、深さ 0.07m である。覆土は 2 層に分かれる。遺物は出土していない。

SK83 (図版 27、写真図版 24)

12C7・8 に位置する。平面形は不整形、断面形は皿形である。西側は SK53 を切り、東側は SK84 に切られる。規模は上端で長軸 1.13m・短軸 1.01m、深さ 0.12m である。覆土は 3 層に分かれる。1 层から近世陶器碗細

片が出土している。

SK84 (図版 27、写真図版 24)

12C8に位置する。平面形は梢円形、断面形は台形である。底面はPitが2基並んだような窓みになっている。SD85を切り、SK337に東側を切られる。規模は上端で長軸0.98m、短軸0.71m、深さ0.59mである。覆土は7層に分かれる。遺物は出土していない。

SK86 (図版 28、写真図版 24)

12C8に位置する。平面形は梢円形、断面形は皿形である。SD85を切る。規模は上端で長軸0.44m・短軸0.36m、深さ0.11mである。覆土は2層に分かれる。1層から須恵器無台杯細片・土師器無台碗細片が出土している。

SK90 (図版 23、写真図版 4)

12C4に位置する。大半が調査区外へ広がっていると推測され、一部しか確認できない。SK97を切る。短軸0.56m、深さは0.14mである。覆土は2層に分かれる。遺物は出土していない。

SK97 (図版 23、写真図版 4)

12C4に位置する。北側は調査区外へ広がると推測される。SK90・SD92に切られる。深さは0.20mである。覆土は3層に分かれる。1層から土師器無台碗細片・土師器長甕細片が、3層から土師器長甕細片が出土している。

SK229 (図版 28、写真図版 24)

12C4・5・9・10に位置する。平面形は不整形、断面形は半円形である。SD92を切る。規模は上端で長軸0.66m・短軸0.28m、深さ0.29mである。覆土は2層に分かれる。遺物は出土していない。

SK251 (図版 28、写真図版 25)

12D12に位置する。平面形は不整形、断面形は皿形である。西端はSD250に、南東端はSK276に切られる。確認できた規模は上端で長軸0.93m・短軸0.74m、深さ0.07mである。覆土は1層である。1層から土師器無台碗細片が出土している。

SK253 (図版 28、写真図版 4)

12C4・9に位置する。平面形は不整形、断面形は半円形である。SD92を切る。規模は上端で長軸0.56m・短軸0.44m、深さ0.23mである。覆土は2層に分かれる。2層から土師器小甕細片・土師器長甕細片が出土している。

SK257 (図版 28、写真図版 25)

12D13に位置する。平面形は長方形、断面形は皿形である。規模は上端で長軸1.32m・短軸0.85m、深さ0.09mである。覆土は2層に分かれる。遺物は出土していない。

SK263 (図版 28、写真図版 25)

12D18に位置する。平面形は梢円形、断面形は皿形である。P363を切る。規模は上端で長軸0.81m・短軸0.44m、深さ0.09mである。覆土は2層に分かれる。1層から土師器長甕細片が出土している。

SK276 (図版 28、写真図版 25)

12D12に位置する。平面形は不整形、断面形は皿形である。SK251を一部切る。規模は上端で長軸0.61m・短軸0.51m、深さ0.05mである。覆土は1層である。遺物は出土していない。

SK317 (図版 20、写真図版 4)

13D6に位置する。平面形は梢円形、断面形は箱形である。南東部はP315に切られる。確認できた規模は上端で長軸0.82m・短軸0.57m、深さ0.29mである。覆土は1層である。礫が出土している。

SK335 (図版 26、写真図版 20)

12C6に位置する。平面形は梢円形を呈すると推測され、断面形は台形である。SK46を切り、P336に切られる。確認できた規模は短軸0.83m、深さ0.38mである。覆土は2層に分かれる。遺物は出土していない。

SK337 (図版 27、写真図版 24)

12C8に位置する。平面形は梢円形、断面形は皿形である。SD85・SK84を切る。規模は上端で長軸0.59m・短軸0.52m、深さ0.14mである。覆土は2層に分かれる。遺物は出土していない。

SK338 (図版 27、写真図版 22)

12C12に位置する。平面形は梢円形、断面形は台形である。中央部にP339が掘り込まれている。また直上にSK59が新たに掘り込まれている。深さは0.63mと推定される。覆土は3層に分かれる。1層から土師器長甕細片が出土している。

3) 不明遺構 (SX)**SX72** (図版 19、写真図版 4)

12C13に位置する。平面形は不整形、断面形は台形である。北西部はP213に切られる。規模は上端で長軸0.81m・短軸0.62m、深さ0.14mである。覆土は1層である。遺物は出土していない。

SX94 (図版 19、写真図版 4)

12C9・10に位置する。平面形は不整形、断面形は台形である。規模は上端で長軸0.97m・短軸0.67m、深さ0.09mである。覆土は1層である。土師器無台窓細片・土師器小甕細片が出土している。

SX243 (図版 21、写真図版 4)

12D7・8に位置する。平面形は不整形、断面形は皿形である。SX244を切る。規模は上端で長軸0.78m・短軸0.54m、深さ0.09mである。覆土は1層である。遺物は出土していない。

SX244 (図版 21、写真図版 4)

12D8に位置する。平面形は梢円形、断面形は皿形である。SX243に切られる。規模は上端で長軸0.94m・短軸0.80m、深さ0.10mである。覆土は1層である。炭化物細片が出土している。

SX341 (図版 19、写真図版 4)

12C5に位置する。北側は6次調査のトレンチに切られる。大半は調査区外へ広がっているものと推測される。平面形は不整形、断面形は皿形である。SE95を切る。確認できた規模は上端で短軸1.18m、深さ0.15mである。覆土は1層である。遺物は出土していない。

SX342 (図版 20、写真図版 4)

13D9・14に位置する。平面形は不整形、断面形は台形である。規模は上端で長軸1.05m・短軸0.68m、深さ0.20mである。覆土は1層である。遺物は出土していない。覆土の様相が近似していることから、隣接する畝状遺構の一部である可能性が高い。

SX343 (図版 20、写真図版 4)

3D9・10に位置する。平面形は円形、断面形は皿形である。規模は上端で長軸0.55m・短軸0.50m、深さ0.20mである。覆土は1層である。遺物は出土していない。覆土の様相が近似していることから、SX342同様、隣接する畝状遺構の一部である可能性が高い。

4) 溝 (SD)**SD7** (図版 18・28、写真図版 4)

12C・13B・13Cに位置する。長軸方向はほぼ東西(N-72°-E)に延びる。断面形は皿形であるが底面は凹凸に富んでおり平坦ではない。P116を切る。南西部はコンクリート基礎のため一部失われている。規模は上端で長軸5.67m・短軸0.51m、深さ0.15mである。覆土は1層である。珠洲焼甕細片が出土しているほか、いずれも細片であるが、土師器長甕・碟・炭化物が出土している。

SD8 (図版 18・28、写真図版 4)

12C・13B・13Cに位置する。長軸方向はSD7と並行するように、ほぼ東西(N-73°-E)に延びる。断面形は皿形であるが底面は凹凸に富んでおり平坦ではない。P113を切る。SD7同様南西部はコンクリート基礎のため一部失われている。規模は上端で長軸5.87m・短軸0.80m、深さ0.18mである。覆土は6層に分かれる。1層から須洲焼甕細片・礫・釘と推測される鉄製品の細片が出土している。

SD10 (図版18・28、写真図版4)

12C21・22に位置する。長軸方向はSD7・8と並行するように、ほぼ東西(N-67°-E)に延びる。断面形は半円形であるが底面は凹凸に富んでおり平坦ではない。SD102を切る。SD7・8同様南西部はコンクリート基礎のため一部失われている。確認できた規模は上端で長軸2.25m・短軸0.38m、深さ0.16mである。覆土は1層である。土師器長甕細片・繰細片が出土している。

SD16 (図版18・28、写真図版4)

12B・12Cに位置する。長軸方向はSD7・8・10と並行するように、ほぼ東西(N-72°-E)に延びる。断面形は皿形であるが底面は凹凸に富んでおり平坦ではない。SD7・8・10同様南西部はコンクリート基礎のため一部失われている。規模は上端で長軸2.22m・短軸0.36m、深さ0.17mである。覆土は2層に分かれる。2層から須恵器無台杯細片・礫が出土している。

SD21 (図版19・25、写真図版4)

12B・12Cに位置する。長軸方向はSD7・8・10・16同様ほぼ東西(N-70°-E)に延びる。断面形は台形である。SK12・P25・P259を切り、SK59に切られる。南東方向は調査区外へ延びるが、コンクリート基礎により失われている。規模は上端で長軸7.06m・短軸0.64m、深さ0.20mである。覆土は3層に分かれる。いずれも細片であるが、1層から須恵器無台杯・土師器無台碗・礫・炭化物が出土し、3層から礫・炭化物が出土している。表土と同質の土が覆土になっていることから、近現代のものである。

SD32 (図版19、写真図版4)

12Cに位置する。長軸方向は北西-南東(N-65°-W)に延びる。断面形は皿形である。規模は上端で長軸1.02m・短軸0.27m、深さ0.13mである。覆土は2層に分かれる。遺物は出土していない。

SD33 (図版19、写真図版4)

12C16・17に位置する。長軸方向はほぼ東西(N-73°-E)である。断面形は箱形である。南西端はP319に切られる。確認できた規模は上端で長軸1.31m・短軸0.26m、深さ0.13mである。覆土は2層に分かれる。遺物は出土していない。

SD40 (図版19、写真図版4)

11B・11C・12Bに位置する。長軸方向は、ほぼ東西(N-70°-E)に延びる。断面形は皿形である。SK49に切られ、P39・SD41を切る。南東方向・北東方向はそれぞれコンクリート基礎により失われている。確認できた規模は上端で、長軸2.14m・短軸0.27m、深さ0.06mである。覆土は2層に分かれている。2層から土師器小甕細片・鉄滓細片が出土している。SD21と覆土の堆積状況・主軸方向が近似することから、セット関係にある遺構と考えられる。SD21同様近現代のものと考える。

SD41 (図版19、写真図版4)

11C21・12C1に位置する。長軸方向は、ほぼ東西(N-70°-E)に延びる。断面形は皿形である。SK49・SD40・P38・P39・P215・P221に切られる。調査区外に延びるものと考えられるが南西端・北東端とともにコンクリート基礎により失われている。確認できた規模は上端で、長軸2.41m・短軸0.59m、深さは0.17mである。覆土は5層に分かれる。1層から土師器長甕細片と2層から土師器長甕細片・炭化物細片が出土している。

SD51 (図版19、写真図版4)

12Cに位置する。長軸方向は、ほぼ東西(N-73°-E)に延びる。断面形は箱形であるが底面は凹凸に富んでおり平坦ではない。SE45を切り、南東端はSK50に切られる。規模は上端で長軸2.06m・短軸0.45m、深さ

0.19m である。覆土は 1 層である。土師器無台椀細片が出土している。

SD76 (図版 19・27、写真図版 4)

12C14 に位置する。長軸方向は、ほぼ東西 (N-82° -W) に延びる。平面形は不整形、断面形は皿形である。SK77 を切る。規模は上端で長軸 2.03m・短軸 0.62m、深さ 0.14m である。覆土は 2 層に分かれる。1 層から土師器長甕細片が出土している。

SD85 (図版 19・28、写真図版 4)

12C3・8 に位置する。長軸方向は、ほぼ南北 (N-11° -W) に延びる。断面形は皿形である。SK86・SK84 に切られ、SE45 を切る。確認できた規模は上端で長軸 2.61m・短軸 0.55m、深さ 0.18m である。覆土は 2 層に分かれる。1 層から土師器長甕細片が、2 層から土師器長甕細片が出土している。

SD88 (図版 19・28、写真図版 4)

12C4 に位置する。長軸方向は東西からやや北 (N-52° -E) に延びる。断面形は半円形である。北東端は P91 に、南西端は P87・P225 に切られる。確認できた規模は上端で短軸 0.45m、深さ 0.27m である。覆土は 2 層に分かれる。1 層から土師器無台椀細片が出土している。

SD92 (図版 19・28、写真図版 4)

12C4・5 に位置する。長軸方向は、ほぼ南北方向 (N-1° -E) に一致する。断面形は皿形である。北側は調査区外へ延びているものと推測される。南端部は SK253・SK229 に切られているほか、P93・P227・P228 に切られる。確認できた規模は上端で長軸 2.10m・短軸 0.74m、深さ 0.19m である。覆土は 2 層に分かれる。遺物はいずれも細片であるが 1 层から須恵器無台杯・土師器無台椀・土師器長甕・罐が出土している。

SD102 (図版 18・28、写真図版 4)

12C17・21・22 に位置する。長軸方向は、ほぼ東西 (N-57° -E) に延びる。断面形は皿形であるが底面は凹凸に富んでおり平坦ではない。南部は SD10 に切られる。規模は上端で長軸 1.05m・短軸 0.40m、深さ 0.12m である。覆土は 3 層に分かれる。遺物は出土していない。

SD250 (図版 21・28、写真図版 4)

12D12・17 に位置する。長軸方向は、北西-南東 (N-8° -W) に延びる。断面形は皿形である。北端部は SE145 に切られ、南端部は第 6 次調査の確認トレンチにより失われている。確認できた規模は上端で長軸 2.98m・短軸 0.53m、深さ 0.08m である。覆土は 2 層に分かれる。1 層から裸細片が出土している。

SD268 (図版 21、写真図版 4)

12D7・8 に位置する。長軸方向は、ほぼ東西 (N-65° -E) に延びる。断面形は皿形であるが底面は凹凸に富んでおり平坦ではない。西端部は SE145 に、東端部は一部 SK244 に切られる。確認できた規模は上端で長軸 1.86m・短軸 0.75m、深さ 0.38m である。1 層から、土師器長甕細片・炭化物細片が出土している。

SD269 (図版 21、写真図版 4)

12C・12D に位置する。12C10 付近はほぼ南北方向で、12D11 グリッド交点付近で南東方向に緩やかに屈曲する。中央部と南部は搅乱により失われている。断面形は箱形である。確認できた規模は上端で長軸 2.92m・短軸 0.40m、深さ 0.21m である。覆土は 5 層に分かれる。遺物は出土していない。

鉢状遺構 (図版 20・28、写真図版 24)

13C・13D に位置する。ほぼ南北方向と一致する (N-85° -E) 軸で長軸 1.50m 前後・短軸 0.30m 前後の細長い溝が 25 条ほど連続する。東から 4 条目の 1 层から珠洲すり鉢細片が出土している。コンクリくずなども出土することから近現代の遺構である。

5) 小 土 坑 (Pit)

P64 (図版 17)

12C12 に位置する。平面形は不整形、断面形は筒形である。規模は上端で長軸 0.69m・短軸 0.42m、深さ 0.46m を測る。覆土は 1 層である。1 層から土師器長甕細片、焼土塊細片が出土している。底部から杭と推測される木製品が出土している。

P159 (図版 19)

12C24 に位置する。平面形は円形、断面形は皿形である。規模は上端で長軸 0.30m・短軸 0.26m、深さ 0.21m である。1 層から須恵器無台杯が出土している。

P170 (図版 17)

12C1 に位置する。平面形は方形、断面形は皿形である。SK47 を切る。規模は上端で長軸 0.38m・短軸 0.28m、深さ 0.52m である。1 層から土師器無台椀・土師器長甕細片が出土している。

P254 (図版 21)

12D8 に位置する。平面形は梢円形、断面形は半円形である。規模は上端で長軸 0.44m・短軸 0.38m、深さ 0.20m である。覆土は 3 層に分かれる。2 層から須恵器甕細片・土師器無台椀細片・炭化物細片が出土しているほか、3 層から土師器無台椀が出土している。

P272 (図版 21)

12D22 に位置する。平面形は円形、断面形は箱形である。規模は上端で長軸 0.27m・短軸 0.14m、深さ 0.15m である。1 層から種別不明の鉄製品が 1 点出土している。

P332 (図版 19)

12C20 に位置する。平面形は方形、断面形は箱形である。P331 を切る。規模は上端で長軸 0.28m・短軸 0.26m、深さ 0.06m である。1 層から珠洲甕が出土している。

第V章 遺物

1～3区から出土した遺物量は、コンテナ（内寸 54.5×33.6×10.0cm）にして 60 箱である。ほとんどが土器・陶器であるが、青磁・石製品・鉄製品も少量含んでいる。また、3基の井戸から 1点ずつ曲物が出土している。このほか井戸を中心に木製品がコンテナ 10 箱分出土している。

遺物は古代・中世・近世～近現代が認められる。古代は奈良～平安時代前期（9世紀頃）の須恵器・土師器が主体で、鍛冶関連遺物・砥石等の石製品が若干認められる。須恵器では食膳具（杯蓋・有台杯・無台杯）と貯蔵具（瓶壺類・甕）が出土した。土師器では食膳具（無台椀）と煮炊具（長甕・小甕・鍋）が出土した。

中世は鎌倉・室町時代の珠洲焼の甕・壺・すり鉢のほか青磁碗が少量出土している。このほか礫や砥石などの石製品、鉄滓などの鉄製品が少量出土し、井戸から曲物や井戸枠に用いられていたと推測される部材が出土している。木製品の遺存状態はあまり良くない。これは地下水位が変動したことにより、水漬の環境と乾燥した環境が繰り返されたためと推測される。

第1節 土器の分類と記述

古代の土器は、須恵器と土師器で大別し、次いで器種別に分類した。形態的な特徴による分類は行わなかった。鎌倉・室町時代については珠洲焼や青磁が確認できたが、出土量が少ないので、器種別の分類のみ行った。

土器の成形・調整技法の表現・名称は、山三賀Ⅱ遺跡〔坂井ほか 1989〕の所見を参考に以下のとおりとした。珠洲焼についても概ね踏襲できることから、同じ用語を使用することとする。

1. 「ロクロナデ」 - ロクロ・回転台使用、「ナデ」 - ロクロ・回転台未使用。
2. 「ロクロケズリ」 - ロクロ・回転台使用、「ケズリ」 - ロクロ・回転台未使用。
3. 「カキメ」 - ロクロ・回転台使用、「ハケメ」 - ロクロ・回転台未使用。
4. 「ロクロミガキ」 - ロクロ・回転台使用、「ミガキ」 - ロクロ・回転台未使用。
5. 「タタキメ」 - 外面、「あて具」 - 内面。
6. 底部切り離し技法の「ヘラ切り」「糸切り」はロクロの回転を利用したものである。「回転ヘラ切り」と称すべきであるが、「回転」は省略した。

須恵器の胎土については沖ノ羽遺跡〔春日 2003〕の成果を参考に、以下のとおり分類した。

A群：素地は粘土質が強く、石英・長石粒を定量含む。石英・長石粒の大きさは 1mm 前後のものが多いが、大きいものでは 7mm 前後のものが混入していることもある。触感としては軟質な感じを受ける。生産地は新津丘陵窯跡群の可能性が高い。なお、酸化炎焼成須恵器の胎土はこの群である。

B群：素地は砂質が強い。白色粒子を多量に含むが長石・石英などの混入物は少なく精良な胎土である。黒色で 1mm 程度の付着物が斑点状に付着しているものも見られる。生産地は佐渡小泊窯跡群の可能性が高い。

C群：素地は粘土質が強い。石英・長石粒を多く含み、粒径も 5mm～10mm 前後と大きなものが見られる。器面はざらついており、硬質な焼き上がりである。生産地は笛神丘陵などを中心とした阿賀北地域の窯跡群である可能性が高い。

D群：A～C 以外のものを一括した。

須恵器甕や横瓶などに見られるタタキメ・あて具痕については、第 4 図のとおり分類した。

A 古代の土器の分類

1) 須恵器

食膳具と貯蔵具がある。食膳具には杯蓋・有台杯・無台杯があり、貯蔵具には長頸瓶・短頸壺（あるいは広口壺）・横瓶・甕がある。

杯 蓋 有台杯に付く蓋。出土量は少ない。

有台杯 出土量は多くない。特徴としては、5のような扁平で大きな杯の底部外面中央部に高台の付く（無台杯に高台を付けて有台杯としているもの）と、41のように5と比較して深身で、当初から有台杯形として製作されたものとに大きく大別できる。後者は42のような小型品も見られる。

無台杯 SK13出土6～9のように口径・底径ともに大きく身の開きが小さく器壁が厚い一群と、21や46のようSK13出土のものより小型で身の開きが大きく、器壁が薄い一群が認められる。胎土B群のほとんどは後者である。また後者は焼成が良好でよく焼き締まっていることに対し、前者の焼成があまり良くなく、後者に比べ軟質な感じがある。

横 瓶 側端部が確認できる（52）。口縁部は出土していない。

長頸瓶 1例確認できた（50）。肩部内面の頸部接合部付近にしぼり痕があることから長頸瓶と判断した。口部は出土していない。

短頸壺 51は口頸部の開口部が広いことから短頸壺と推測する。広口壺の可能性もある。

甕 25のような大甕と16のようなこれより小型の甕が確認できる。

2) 土師器

食膳具と煮炊具がある。食膳具には無台椀があり、煮炊具には長甕・小甕・鍋がある。平安時代の遺跡で出土例の多い黒色土器は確認できない。また器種が不明な24が1点出土している。

無台椀 成形をロクロナデのみで行う一群と、62のように内外面に磨きを丁寧に行うものがある。後者の器面調整は黒色土器によく見られるものであるが、黒色処理は施されていない。後者は前者に比べ大型である。前者の底部の切り離し技法は、回転糸切りである。

長 甕 37・38のようなロクロを使用せず成形し、内外面ともハケメ調整により器面を整えるものと、69～73のようにロクロを使用して成形し、ロクロナデやカキメを施し器面を整えるものとがある。後者は口縁部が「く」の字状に屈曲し、口縁端部に面を持つものが多い。出土量は後者が多く、前者は図示したもの以外にはほとんど出土していない。

小 甕 口縁部と底部の細片資料しか確認できない。ロクロ成形のもののみ確認できる。

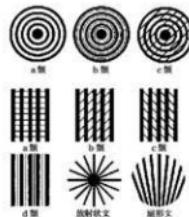
鍋 破片資料が多く、全体の器形が分かるものはない。口縁部はゆるく屈曲し、口縁端部に面を持つものが多い。器面はロクロナデもしくはカキメを施すものが確認できる。

B 中世陶磁器の分類

1) 珠洲焼

甕 口縁部（80）や1・98・100のような体部が確認できる。1は吉岡分類（吉岡1994）の壺T種である可能性もある。

壺 111・121や123が確認できる。121は吉岡分類の壺T種（叩打壺）、123は瓶頸か壺K種（研磨壺）の可能性がある。111は広口壺と推測する。



名前	記述	例
輪郭文	器表の輪郭部分に施す模様	a
斜め波形文	斜めに走る波形文	b
水平波形文	水平に走る波形文	c
波形文	波形文	d
波形文	波形文	e
波形文	波形文	f
波形文	波形文	g
波形文	波形文	h
波形文	波形文	i
波形文	波形文	j
波形文	波形文	k
波形文	波形文	l
波形文	波形文	m
波形文	波形文	n
波形文	波形文	o
波形文	波形文	p
波形文	波形文	q
波形文	波形文	r
波形文	波形文	s
波形文	波形文	t
波形文	波形文	u
波形文	波形文	v
波形文	波形文	w
波形文	波形文	x
波形文	波形文	y
波形文	波形文	z

第4図 タタキメ・あて具痕跡の
細分類図
((柿田2001) をもとに再トレース)

すり鉢 97・99・108・115など3区で出土している。

2) 青 磁

碗 出土例は114・116の2点のみである。3区で出土している。

C 出土土器等各説

1) 2区遺構出土土器

SE31 (図版31、写真図版26)

1は珠洲焼甕下半部の破片と推測するが壺の可能性もある。外面は叩き、内面は押圧痕の表面を撫でるように、下から上へ向かう指ナデが施される。胎土には砂粒や海面骨針が多く混じる。時期等詳細は不明である。1層から出土しているが、本来の遺構確認面であるIVa層が削平されているので、覆土中位の出土と捉えたい。

SE39 (図版31、写真図版26)

2は土師器長甕の体部である。外面は磨耗し、よく観察できない。内面は横位のハケメが施される。底部付近の破片であろうか。内面のみ拓本で表した。

SE41 (図版31、写真図版26)

3は須恵器有台杯である。外面はロクロナデ痕が明瞭に残る。4は須恵器無台杯である。底部外面はヘラ切り後ナデられており、底部から体部の立ち上がり部分に丸みを帯びる。3・4共に胎土B群で、佐渡小泊窓跡群産と推測される。

SK13 (図版31、写真図版26)

須恵器有台杯(5)・須恵器無台杯(6~9)・土師器小甕(10)・同長甕(11)のほか鐵滓と推測される細片が2点・炭化材(0.35g)が出土している。全て2層及び3層出土である。出土遺物はほとんど接合し一括性が高い。

5の底部内面には「三」状のヘラ記号が刻まれる。高台は杯部底部外面のやや内側に付く。高台の底部外面の中央部は沈線状に凹む。杯部の底部から体部への立ち上がりは柔らかく丸みを帯びる。口縁部はやや焼きゆがみが認められる。無台杯に高台を貼り付けたような器形である。胎土に径2~7mmの大白色礫を多量に含み、硬質な焼き上がりである。胎土C群に属し、阿賀北産と推測される。6の底部はほぼ平坦で、底部から体部の屈曲は明瞭である。質感は硬質な感じはあるが、焼き上がりはやや甘く、口縁部のみ青灰色を呈し、体部・底部とも灰白色を呈す。これは重ね焼きの際、中位付近に重ねられたためと推測する。胎土はC群に属すが、白色礫などの混入物は有台杯5に比し非常に少ない。7は口縁部外面に「サ」状のヘラ記号が刻まれる。筆跡は横・縱・縱の順である。記号の一部は欠損しているため詳細は不明である。底部外面の触感は滑らかで、これは使用に伴う磨耗と考えられる。体部に比べ底部の器壁は厚い。底部はほぼ平坦である。底部から体部の立ち上がりは丸みを帯びて立ち上がり、屈曲は柔らかい。全体に青灰色を呈し、焼成も良好で硬質である。径2~4mmの礫を多く含み胎土はA群と判断したが、C群とも近似する。8は底径の大きさに違いはあるものの器形・法量ともに7に似ている。硬質ではあるものの内外面・断面とともに灰白色を呈す。底部外面の外縁部は回転ヘラキリ後ナデられており、底部から体部への屈曲部が丸みを帯びている。9は口径12.4cmと他の無台杯の口径と比べ小さい。底部外面には「井」状のヘラ記号が刻まれる。底部はほぼ平坦で、底部から体部の屈曲は明瞭である。質感は硬質な感じではあるが、焼成はやや甘く、外面は青灰色を呈すが、断面は赤褐色を呈する。胎土はA群に属し、径1~2mmの礫や粒子が少量含まれるもの、全体的に精良な感じを受ける。10は土師器小甕の口縁部である。体部中位から底部にかけて欠損している。内外面ともに磨耗が著しく調整その他の観察は困難である。口縁部は「く」字状に屈曲し、内縫気味に開く。口縁端部外面に面を持つ。胎土には径1~3mmの小礫を多く含む。11は土師器長甕の底部である。底部は平坦であるが、丸底を意図していると推測される。外面は被熱と磨耗のため表面が剥離しているが、ハケメ調整であることが観察できる。内面はハケメ調整である。内面

の立ち上がり部にススが付着する。

SK33 (図版 31、写真図版 26)

12は須恵器無台杯の底部である。SK13出土須恵器無台杯に比し、底径が小さく、底部・体部とともに器壁が薄い。胎土はB群に属し、径1mm前後の白色粒子を多く含む。底部回転ヘラ切りの回転方向は左である。13は土師器無台椀の口縁部である。胎土には径1~2mmの礫を少量含む。14は土師器長甕の口縁部である。ロクロ成形の長甕である。口頸部は「く」字状に強く屈曲し、口縁端部外面は面を持つとともにやや上方へ摘み出される。内外面とも磨耗が進み、表面が剥離しているため詳細な観察はできなかった。

SX7 (図版 31、写真図版 26)

15は須恵器無台杯の底部である。径1mm前後の黒斑が散見する。胎土B群に属する。16は須恵器甕の口縁部である。口縁端部内面は下方に摘み出される。細片であるため口径は正確さを欠いている可能性が高い。胎土には1mm前後の白色粒子を多く含む。B類にも似るが判断できなかった。

SX16 (図版 31、写真図版 26)

17~19は土師器無台椀である。17は内外面とも磨耗し表面が剥離している。18・19も内外面とも磨耗が著しい。17の内面の立ち上がり方が底部から口縁部にかけてなだらかに湾曲しながら開いているのに対し、18は平坦な底部から強く屈曲し、外傾して聞く。19は17より大型と推測されるが、器形は17に似ると推測される。

SX18 (図版 31、写真図版 26)

20は土師器鍋口縁部である。口頸部は「く」字状にゆるく外反し、口縁端部は上方にやや摘み出される。内外面とも磨耗が著しい。口頸部はロクロナデ、体部外面はカキメが施されている。外面にはススが付着する。

SD1 (図版 32、写真図版 26)

21は須恵器無台杯である。体部は直線的に外傾し、身の開きは大きい。胎土はB群に属する。器形がSE41出土の4と似るが、器壁はこちらが薄い。22は須恵器甕の体部である。肩部付近と推測される。硬質であるが断面は赤褐色を呈する。胎土はA群に属し、1~2mmの白色粒子を多く含む。内面当て具痕はDc類である。

SD2 (図版 32、写真図版 26)

23は須恵器無台杯である。焼成は口縁部から体部にかけては良好であるが、底部は還元が進まず赤褐色を呈す。体部は直線的に聞くが、底部外面は回転ヘラ切り後外周をナデており、外面の底部から体部にかけての屈曲はやや丸みを帯びる。胎土は精良でB群である。ヘラ切り後底部外面の外周をナデる手法は8に似る。24は土師器の器種不明品である。口縁部とした場合、頸部の径が小さくなることから、脚部と判断した。口縁部である可能性も高い。25は須恵器甕の口縁部である。遺存状況がよくないため、口径は正確さを欠くが、大型甕の口縁部である。口縁端部の内側は上方に短く摘み出される。

SD3 (図版 32、写真図版 26)

26は須恵器有台杯である。SE41の3に比し、体部は直線的に開き、器壁も厚い。口径も小さく、身も浅くなるようである。胎土はB群である。27は須恵器無台杯である。胎土B群である。体部はやや内脇気味に聞く。底部外面の体部への立ち上がり部分にロクロケズリが施される。28は須恵器無台杯である。27に比し器壁が薄く、身の開きが大きい。口縁端部はやや外反する。器形的には23に似る。胎土はB群である。29は須恵器甕の体部である。胎土はD群である。小片のため判断できなかった。外面タタキメは平行線文、内面の当て具痕は同心円である。30は土師器小甕である。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部は内側へ摘まれ内屈する。31は土師器鍋である。口縁部端部は摘まれ、断面形が三角形状になる。体部外面は口縁部直下にカキメが施される。内面はロクロナデである。

SD11 (図版 32、写真図版 26)

32は土師器無台椀である。内外面ともに磨耗している。

P45 (図版 32、写真図版 27)

34 は土師器長甕である。口縁部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部外面に面を持つ。口縁端部外面の下端は下方に僅かに垂下する。内外面ともに磨耗している。

2) 1区遺構外出土遺物 (図版 32、写真図版 27)

35 は須恵器杯蓋である。口縁端部が僅かに欠損する。つまみの中央部はやや突出する。頂部外面はロクロケズリが施される。胎土は B 群である。36 は土師器小甕の底部である。内外面とも磨耗が著しい。37・38 は土師器長甕である。同一品と推定される。粘土紐の輪積み痕が明瞭に残る。外面は縱方向のハケメ、内面は横方向のハケメが施される。非ロクロ成形の長甕である。口縁部に向かってややすぼまる体部に、緩やかに外反する口縁部を持つ。胴部最大径は中位より下方にくると推定される。

3) 2区遺構外出土土器 (図版 33・34・35、写真図版 26・27)

39 は須恵器杯蓋である。35 に比し口径はやや小さく身は深い（器高が高い）。鉢は欠損している。重ね焼きの痕跡が明瞭で口縁部外面は灰色を呈し、体部～底部は内外面とも灰白色を呈す。胎土は D 群であるが、C 群に似る。

40～43 は有台杯である。40 の胎土は A 群である。41 の胎土には白色粒子が多く混ざる。B 群である。42 は断面形が三角形を呈す低い高台が付く。杯部の底部外面にロクロケズリを施す。胎土は B 群である。43 の底部内面は使用に伴うと推測される磨耗が顕著である。胎土は A 群である。

44～49 は須恵器無台杯である。44 は口縁部が一部欠損するがほぼ完存品である。平坦な底部にやや内彎気味に開く体部を持つ。器壁はやや厚い。ヘラ切りの回転方向は右回転である。口縁部の一部に焼成不良で灰白色を呈する部分があるが、全体に焼成は良好で灰色を呈す。胎土は B 群である。45 の胎土は B 群である。46 の器形は 44 に近似するが、44 に比し器壁が薄く法量も小さい。ヘラ切りの回転方向は左回転である。胎土は B 群である。47 は底部中央付近が内側にくぼみ、直線的に開く体部を持つ。ヘラ切りの回転方向は左回転である。胎土は B 群である。48 は底部外面に漢数字の「一」状の墨書きが見られる。ヘラ切りの回転方向は右回転である。胎土は A 群である。49 は底部中央付近が若干内側にくぼみ、直線的であり開かない体部を持つ。胎土は B 群と判断したが A 群にも近似する。

50 は須恵器長頸瓶の肩部～頸部付近の破片である。肩部は丸みを帯びる。頸部付近の内面に絞り痕が認められる。胎土は B 群である。

51 は須恵器短頸壺と判断した。広口壺の可能性もある。胎土は B 群である。

52 は須恵器横瓶の側端部である。内面の閉塞痕が明瞭である。閉塞面の外面は灰白色を呈し、それ以外には薄く自然釉がかかる。焼成時はこの部分を下に倒立していたと推測される。外面は平行文のタタキメ、内面は同心円文の縁辺を利用した当て具により整形される。

53～63 は土師器無台椀である。すべて破片資料である。55 は内外面ともにほぼ全面にわたって表面が剥離している。底部外面に僅かに糸切り痕が観察できる。62 は内外面ともに表面の剥離範囲が広いが、内外面全面にミガキが施されているようである。内面は、体部下部～底部にかけて棒状工具による縱方向のミガキが施される。外面は、横方向のミガキが施されるが、内面で使用された工具とは異なるものを使用しているようである。

64～68 は土師器小甕である。64 は内外面とも全面にわたり表面が剥離している。体部内面はハケメが施される。65 の口縁部は「く」字状に屈曲し、口縁端部は内側に短く摘み出される。66 は底部であるが、大きい。内外面ともに磨耗し調整にかかる痕跡は乏しい。内面には横方向のハケメが施され、外面は横方向のケズリによって整形される。底部に比し体部の器壁はかなり薄い。68 は口縁端部外面に面を持つ。65 や 30 のように口縁端部を内側に摘み出し屈曲させるものと本資料のようなものが確認できる。

69～73 は土師器長甕である。ロクロ整形で体部外面にカキメが観察できるものもある(69・70)。口縁部は「く」字状に屈曲し口縁端部に面を持つ。口縁端部を上方に摘むもの(69・70)も見られる。

74～79は土師器鍋である。口縁部付近の小破片のみで、全体の器形が分かる個体はない。口縁部はゆるく外傾し、口縁端部に面を持つものが多いが、口縁端部をさらに短く摘み上げるものが多い。

80は珠洲焼甕の口縁部である。口部は「く」字状に鋭く屈曲し肥厚する口縁端部を持つ。13世紀末～14世紀頃と推測する。

4) 2区遺構出土土製品・銭貨・鉄製品・石製品

a) 土製品

P36（図版32、写真図版26）

33は土管状の土製品である。外面は縱方向のケズリ調整が施されるが、粘土紐の輪積み痕が明瞭である。内面はナデにより内面の輪積み痕が消されている。奈良～平安時代初頭と推測する。

b) 銭貨

SX48（図版35、写真図版28）

81は銭貨である。「寶」のみ認識できる。時代は不明である。

c) 鉄製品等

SE31（図版35、写真図版28）

82は鉄滓で、重量は71.8gである。珠洲焼甕片が同遺構から出土していることから、鎌倉・室町時代と推測する。

SK37（図版35、写真図版28）

83はX線写真の結果、刀子と推測される。この他に出土した遺物が無いため時代の判定は難しいが、遺構覆土の様相がSE31やSE41に近似していることから、鎌倉・室町時代と推測する。

d) 石製品

SE39（図版35、写真図版28）

84は表面全体が磨耗し、特に下端部がよく磨耗していることから、摺り棒のような役割を果たした石製品と推測する。古代と推測する。

SK35（図版35、写真図版28）

85は軽石である。切断されたものが、若しくは砥石のような使用方法によると推測される平坦面を持つ。

86は下端部に僅かに擦痕が観察できる。緑色を呈す。SK35からは須恵器・土師器・近世陶器の細片も出土していることから、時代・時期ともに不明である。

5) 2区遺構出土木製品

SE31（図版35、写真図版29）

87は円形の盤である。小型の曲物の底板と推測する。木取りは柾目で鑑定はしていないが、杉の可能性が高い。88も円形の盤と推測される。欠損しているため、全形は不明である。左端には径6～8mm程の穿孔が上部に2か所、下部に1か所穿たれ、右端には径3mm前後の穿孔が上下に1ヶ所ずつ施される。87は1枚で円形を成しているが、88は複数枚で円形を成すものと推測される。穿孔は紐や木釘等を通すためのものと推測する。

89は曲物である。出土段階でかなり脆弱であったため、保存処理を先行して行い、処理後実測を行った。曲物の上部には一重の籠が、下部には二重の籠が施されている。側板・籠共に桜皮で止められている。側板の合わせ目は「キメカキ」が施され、重ね合わせの厚みが調整される。側板の内側は縱方向の「けびき」が施されている。水溜として用いられた。

SE38（図版36、写真図版29）

90～93は井戸底部に据えられた土居枠である。内径は概ね60～64cm前後で方形を呈し、正方形を意図していると推測する。90・91（出土時の南北）は5×4cm前後の角材に3cm前後角のはぞを切り、92・93（出

土時の東西)は板状部材の上下に2×4cm前後のほぞ穴が施される。土層の堆積状況から枠材が存在していたことが確認できるが、腐食し土と同化していたため、残っていない。須恵器・土師器片が出土したSE39と覆土の様相が近似することから、古代と推測する。

SE41 (図版36、写真図版29)

94は板状木製品である。1~3層にかけ横たわるように出土した。

95は曲物である。側板の外側上下にそれぞれ1重の縦が巻かれている。下の縦の合わせ目は下になる方に「キメかき」が施される。側板・縦共に桜皮で留められている。側板の内側は縦方向の「けびき」が施されている。側板の合わせ目は上にかぶさる方に「キメかき」が施され厚さが調整される。井戸内の水温として用いられた。井戸の掘り方や覆土がSE31と近似することから、鎌倉・室町時代と推測する。

6) 3区遺構出土土器

SE30 (図版37、写真図版28)

96は須恵器甕である。外面は格子目状のタタキメが内面は同心円文の当て具が施される。胎土は不明である。

97・99は珠洲焼すり鉢である。97は、外面ロクロナデ。内面はロクロナデの後卸し目が施される。胎土は海綿骨針を含む。99は外外面ともロクロナデのみ施され、内面に卸し目は施されない。底部外面はハケ状工具で不規則にナデて底部が平坦になるよう調整される。胎土は海綿骨針を含む。

98・100は珠洲焼甕である。98はSE30のほか、SE31・SK59・SE193出土破片と接合した。一番大きい破片であるSE30出土として報告する。外面にはタタキメが、内面には無文の当て具痕が残る。胎土は海綿骨針を含む。100の外面にはタタキメが、内面には無文の当て具痕が残る。胎土は海綿骨針を含む。98より大型の甕である。

SE31 (図版37、写真図版28)

101は須恵器甕である。外面は平行線文のタタキメが、内面は格子目文の当て具が施される。

SE45 (図版37、写真図版28)

102は須恵器無台杯である。胎土はB群である。

SE95 (図版37、写真図版28)

103は須恵器有台杯である。胎土はB群である。104・105は須恵器無台杯である。共に胎土B群である。106は須恵器甕である。肩部付近の破片と推測される。外面タタキ目はHa類、内面当て具はDc類である。外面はタタキメの後カキメが施される。細片のため胎土は判断できなかった。107は土師器無台椀の底部である。

SE145 (図版37、写真図版28)

108は珠洲焼すり鉢の口縁部である。胎土に海綿骨針を含む。

SE193 (図版37、写真図版28)

109は須恵器無台杯である。外面底部付近にヘラケズリが施される。胎土はB群である。110は須恵器甕である。外面および左側面は研磨具として転用され摩耗している。111は珠洲焼広口壺口縁部である。内面中位に輪積痕と推測される稜線が残る。

SK47 (図版38、写真図版28)

112は土師器小壺口縁部の細片である。

SK50 (図版38、写真図版28)

113は土師器鍋である。口縁部外面は外方向に強く摘み出され、かつ上方にも摘み出され断面形が三角形を呈する。体部は外面にカキメが施され、内面はロクロナデが施される。

SK59 (図版38、写真図版28)

114は青磁椀口縁部である。比較的細身の連弁文が描かれる。115は珠洲焼すり鉢である。内面に卸し目が

刻まれる。よく使用されており、内面は摩耗している。

SK62 (図版 38、写真図版 28)

116 は青磁碗体部細片である。

SD7 (図版 38、写真図版 28)

117 は珠洲焼壺の体部片である。外面に「×」状の線刻が刻まれる。外面はタタキメが、内面は無文當て具が施される。

P159 (図版 38、写真図版 28)

118 は須恵器無台杯の底部片である。胎土は B 群である。

P170 (図版 38、写真図版 28)

119 は土師器無台椀の底部片である。底部外面に回転糸切り痕が残る。

P254 (図版 38、写真図版 28)

120 は土師器無台椀の底部片である。底径 6cm で体部が大きく開くことから大型の無台椀と推測される。

P332 (図版 38、写真図版 28)

121 は珠洲焼壺の口縁部である。

鉢状遺構 (図版 38、写真図版 28)

122 は珠洲焼すり鉢の口縁部である。

7) 3 区遺構出土土器 (図版 38、写真図版 28)

123 は珠洲焼の小型壺の口縁部である。口縁端部の内側はやや上方に摘み出される。124 は近世陶器壺の口縁部である。

8) 3 区遺構出土鉄製品・石製品

P272 (図版 38、写真図版 28)

125 は器種不明鉄製品である。現代の可能性も高い。

SE95 (図版 38、写真図版 28)

126 の頂部付近に被熱痕が見られることから、表面の剥離痕はこれによる可能性がある。1 層から出土した。

SE96 (図版 38、写真図版 28)

127 は扁平な円形礫と推測される。表面及び縁辺は磨耗し滑らかである。3 层から出土した。

SE193 (図版 38、写真図版 28)

128 は面取りされ方形を呈すると推測される。2 层から出土した。残存部が少ないため用途は不明である。

129 は軽石で扁平な半円形を呈すると推測される。円形のものを半分に切断したようで、切断面が磨耗する。

14 层から出土した。130 は砥石である。方形を呈すると推測される。4 面全て使用されているが角部分と上下部分のほとんど、砥面の一部は損欠している。仕上げ砥石と推測される。2 层から出土した。

9) 3 区遺構出土木製品

SE30 (図版 39、写真図版 29)

出土した木製品は現位置を保っていると推測されるものと、井戸廃棄時に混入若しくは現位置を失ったと推測されるものがある。

135・141・133 は北西角に組まれた状態で出土した。135・141 はほぼ直角を成すように縦位で出土した。

135 が東西軸で、141 が南北軸で並んでいた。133 はこの直角部分の内側に接するように縦位で出土した。下端部はやや先細る程度に削られていることから、杭のように突き刺していたものと推測される。132 は北東角

に突き刺さるよう立った状態で出土した。損欠部分が多い。133と対を成すものと推測される。133の裏側直近から134が立った状態で出土している。出土位置と状況から同一品である可能性が高い。140は南東隅に突き刺さっている状態で出土した。先端部は尖って杭状になっている。131は南西角から出土した。突き刺さるよう立った状態で出土した。損欠部分が多いため詳細は不明である。137は140と131を結ぶライン上に出土している。137は131の外側で出土している。これらの出土状況から、131～133・140は隔柱で、135～137・141は枠板にあたると推測される。SE30は縦板組隅柱（横棟留めか）の井戸枠である可能性が高い。143は水溜用の曲物である。井戸最底部から出土した。曲物の下部は桜皮で留められていた。側板の内側は縱方向の「けびき」が施される。椎は無かった。欠損部が多いため詳細は不明である。覆土中から珠洲焼が出土していることから鎌倉・室町時代と推測される。

SE45（図版39、写真図版29）

144・145とも最下層からまとめて横位の状態で出土している。145は角材で先端部は削られやや杭状を呈す。

144・145は井戸枠部材と推測される。SE45は堆積状況から井戸枠が存在した可能性が考えられることから、この井戸に付随する遺物と考えられる。

SE193（図版39、写真図版29）

146～148は井桁状に出土した。146と148は平行関係ではほぼ同一標高で出土し、147はこれと直行するように出土した。147の出土標高は146・148より低位で出土している。出土状況から現位置を保っていないと推測される。146～148は井戸枠横樋と推測される。腐食が進み損欠部が多いため詳細は不明である。SE193は鎌倉・室町時代のSE30を切るSE96に切られている事から、鎌倉・室町時代と推測される。

P64（図版40、写真図版26）

149は底部に突き刺さった状況で出土した。杭と推測される。欠損部分が多い。時代・時期ともに不明。

第VI章 自然科学分析

第1節 樹種同定

A 試料と分析方法

試料は、2区SK13の2層から採取された炭化材片6点のうち、保存状況の良い3点（試料1～試料3）を分析試料とした。また、その他の3点についても同定を試みた。割折して新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目）、接線断面（板目）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

B 分析結果

第3表に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

クルミ属 *Juglans* クルミ科 第5図1・2

横断面：大型で丸い道管が単独あるいは2～数個放射方向に複合してまばらに散在する環孔材である。早材から晩材にかけて道管の径は徐々に減少する。軸方向柔細胞が多少波打ちながら短接線状に1列に並び、網状柔組織をつくる傾向がある。放射断面：道管の穿孔は單穿孔である。放射組織はほとんどすべて平伏細胞からなるが、ときおり上下の縁辺にいくぶん大きい方形細胞が見られる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で1～3細胞幅である。

以上の形質よりクルミ属に同定される。クルミ属にはオニグルミ、ヒメグルミがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15～30m、径70～90cmである。材は耐朽性、保存性は低いが、狂いが少なく韌性に富んでいて、建築、器具、彫刻など広く用いられる。

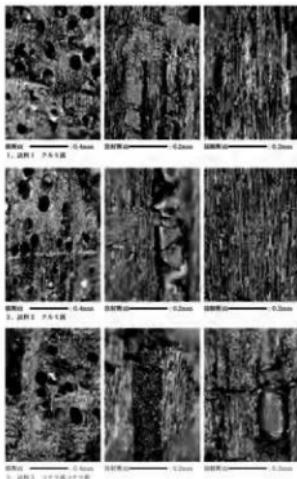
コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科 第5図3

横断面：年輪のはじめに大型の道管が1～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靭で弾力に富み、建築材などに用いられる。

第3表 SK13 2層出土炭化材樹種同定結果

試料	結果（学名／和名）
試料1 <i>Juglans</i>	クルミ属
試料2 <i>Juglans</i>	クルミ属
試料3 <i>Quercus sect. Prinus</i>	コナラ属コナラ節



第5図 SK13 出土炭化材の顕微鏡写真

C 所 見

樹種同定の結果、2 区 SK13 の 2 層から採取された炭化材のうち、試料 1 と試料 2 はクルミ属、試料 3 はコナラ属コナラ節と同定された。また、その他の 3 点についても同定を試みたところ、いずれもクルミ属と判断された。クルミ属は、温帯に広く分布する落葉高木で、やや涼冷で谷沿いなど湿润なところに生育する。コナラ属コナラ節は、温帯を中心に広く分布する落葉高木で、日当たりの良い山野に生育する。ミズナラなどの冷温帶落葉広葉樹林の主要構成要素や暖温帶性のナラガシワ、二次林要素であるコナラなどが含まれる。いずれも当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能な樹種であったと考えられる。

第2節 植物珪酸体(プラント・オパール)分析

A 分析試料と分析方法

1) 試 料

分析試料は、2区のサブトレーナー5の基本土層断面、西壁21J17グリッド、SK13覆土の3地点から採取された計7点である。試料採取か所を分析結果の柱状図に示す。

2) 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスピース法（藤原 1976）を用いて次の手順で行った。

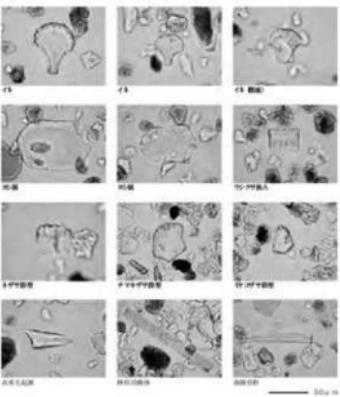
- (1) 試料を 105°C で 24 時間乾燥(絶乾)、(2) 試料約 1g に対し直径約 40 μm のガラスビーズを約 0.02g 添加(電子分析天秤により 0.1mg の精度で秤量)、(3) 電気炉灰化法(550°C・6 時間)による脱有機物処理、(4) 超音波水中照射(300W・42KHz・10 分間)による分散、(5) 沈底法による 20 μm 以下の微粒子除去、(6) 封入剤(オリキット)中に分散してプレパラート作成、(7) 検鏡・計数。

同定は400倍の偏光顯微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞起源の植物珪酸体を対象として行った。計数はガラスビーズ個数が400以上になるまで行った(ほぼプレパラート1枚分の精査に相当)。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけ試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個

第4表 三王山遺跡2区における植物珪酸体分析結果

分類群	学名	地點・試料		サブサンクス			西脇 21J17		ガリット		SK13 屋上	
		1	2	1	2	3	1	2	3	1	2	
イモムシ科	<i>Gemmone</i>											
イモムシ科	<i>Oryza sativa</i>	117	48	78			103	78				
ヨシ草科	<i>Phragmites</i>	21	7	7	7	7	7	14				
ウツクサ族	<i>Anthonomus</i> Atypica	7	7	7			7					
アマメ科	<i>Bambusoideae</i>											
ナガミゲラ科	<i>Pleotrichia</i> sect. <i>Nearosa</i>									7		
ナマコサギ科	<i>Sax. sec.</i> <i>Sax. etc.</i>	14	21	7	27	14	21	14				
ミヤコサギ科	<i>Sax. sec.</i> <i>Cassimoides</i>	69	21	28	34	55	69	21				
未分類等	Others	34	41	7	27	35	36	7				
その他のイモ科	Others											
真衣草科	<i>Husk hair origin</i>	14	14	21	7		28	14				
種状の植物	<i>Rod-shaped</i>	103	48	191	7	7	179	113				
茎葉科	<i>Stem origin</i>								7			
未分類等	Others	110	207	148	88	104	193	99				
(西脇部)	Sponge			14	14							
納付種別	Total	461	428	494	196	222	633	376				
おもな分類別の割合(生産量(単位：t) / t)：試料の割合を1.0と仮定して算出												
イモムシ科	<i>Oryza sativa</i>	3.44	1.42	2.28			3.03	2.29				
ヨシ草科	<i>Phragmites</i>	1.31	0.45		0.44	0.43	0.89					
ナガミゲラ科	<i>Pleotrichia</i> sect. <i>Nearosa</i>								0.03			
ナマコサギ科	<i>Sax. sec.</i> <i>Sax. etc.</i>	0.10	0.16	0.05	0.20	0.10	0.15	0.11				
ミヤコサギ科	<i>Sax. sec.</i> <i>Cassimoides</i>	0.21	0.06	0.08	0.10	0.17	0.21	0.06				
データの比率(%)												
ナガミゲラ科	<i>Pleotrichia</i> sect. <i>Nearosa</i>								17			
ナマコサギ科	<i>Sax. sec.</i> <i>Sax. etc.</i>	33	71	38	67	38	43	52				
ミヤコサギ科	<i>Sax. sec.</i> <i>Cassimoides</i>	62	62	33	57	57	31	31				



第6図 植物珪酸体（プラント・オパール）

あたりの植物体乾重、単位:10⁻³g)をかけ、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的に把握できる。イネの換算係数は2.94、ヨシ属(ヨシ)は6.31、ススキ属(ススキ)は1.24、ネザサ節は0.48、チマキザサ節・チシマザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である(杉山2000)。タケベ科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

B 分析結果

分析の結果を第4表および第7図に示した。また、主要な分類群について第6図に顕微鏡写真を示す。

C 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

1) 稲作跡の検討 水田跡(稻作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体(プラント・オパール)が試料1gあたり5,000個以上高い密度で検出された場合に、そこで稻作が行われていた可能性が高いと判断している(杉山2000)。なお、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

(1) サブトレレンチ5 基本上層断面

III d層(試料1)とIII e層(試料2)について分析を行った結果、両試料からイネが検出された。このうち、III d層(試料1)では密度が11,700個/gとかなり高い値で、III e層(試料2)でも4,800個/gと比較的高い値である。したがって、これらの各層では稻作が行われていた可能性が高いと考えられる。

(2) 西壁21J17グリッド

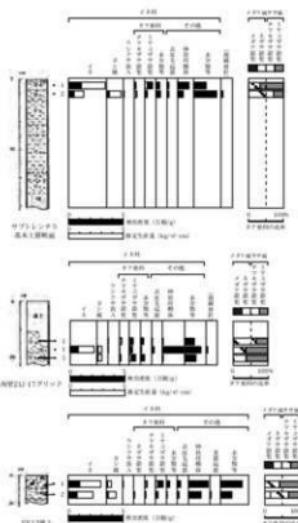
III b層(試料1)、IV a層(試料2)、IV b層(試料3)について分析を行った結果、III b層(試料1)からイネが検出された。密度は7,800個/gと高い値である。したがって、同層では稻作が行われていた可能性が高いと考えられる。

(3) SK13

遺構覆土の2層(試料1)と3層(試料2)について分析を行った結果、両試料からイネが検出された。このうち、2層(試料1)では密度が10,300個/gとかなり高い値で、3層(試料2)でも7,800個/gと高い値である。同遺構は上器捨て場とみられることから、イネの茎葉(稻葉)が何らかの形で集積されていたと考えられる。

2) イネ科栽培植物の検討 植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型(ヒエが含まれる)、エノコログサ属型(アワが含まれる)、キビ属型(キビが含まれる)、ジユズダマ属(ハトムギが含まれる)、オヒシバ属(シコクヒエが含まれる)、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

3) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境 ヨシ属、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型などが検出されたが、いずれも比較的少量である。おもな分類群の推定生産量によると、イネが検出された層ではイネが優勢となっている。以上の結果から、当時はおむね稻作が行われ、ササ属(チマキザサ節やミヤコザサ節)などが生育していたと推定される。



第7図 三王山遺跡2区における植物珪酸体分析結果

E ま と め

植物珪酸体（プランツ・オパール）分析の結果、平安時代と推定される各層準からイネが多量に検出され、稻作が行われていた可能性が高いと判断された。また、土器捨て場とみられるSK13では、イネの茎葉（稻藁）が集積されていた可能性が認められた。

第3節 花 粉 分 析

A 分析試料と分析方法

分析試料は、2区の西壁 21J17 グリッド、SK13 の2地点から採取された計5点である。分析結果を柱状図に示す。花粉の分離抽出は、中村〔中村1973〕の方法をもとに以下の手順で行った。

(1) 0.5% リン酸三ナトリウム(12水)溶液を加えて15分間湯煎、(2)水洗処理の後、0.5mmの篩で繰などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去、(3) 25% フッ化水素酸溶液を加えて30分放置、(4)水洗処理の後に水酢酸によって脱水し、アセトトリス処理(無水酢酸9:濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す、(5)再び水酢酸を加えて水洗処理、(6)沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成、(7)検鏡・計数。

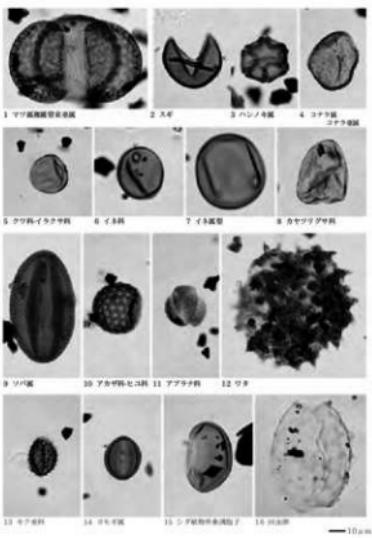
検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、鳥倉（鳥倉1973）および中村（中村1980）をアトラスとして所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。イネ属については、中村（中村1974・1977）を参考に、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属とした。

B 分析結果

1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉 19、樹木花粉と草本花粉を含むもの 3、草本花粉 17、シダ植物胞子 2 形態の計 41 である（第 5 表）。また寄生虫卵 1 分類群が認められた。花粉数が 100 個以上計数された試料については花粉総数を基準とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群については、第 8 図に顕微鏡写真で示した。

2) 花粉群集の特徴



される。IV a層(試料2)およびIV b層(試料3)では、花粉があまり検出されなかつた。

(2) SK13(第10回)

3層(試料2)では草本花粉の占める割合が高い。ヨモギ属が卓越し、カヤツリグサ科、イネ科、アブラナ科などが伴われる。樹木花粉ではハンノキ属やスギなどが検出され、樹木・草本花粉のクワ科ーイラクサ科も多く認められた。また、寄生虫卵の回虫卵がわずかに検出された。2層(試料1)の草本花粉ではイネ科(集塊あり)が増加し、ヨモギ属は減少している。また、樹木花粉のハンノキ属、樹木・草本花粉のクワ科ーイラクサ科も増加する。

C 花粉分析から推定される植生と環境

1) 西壁21J17グリッド

平安時代とされるIII c層の堆積当時には稲作のほか、周辺でソバ属、ワタ、アブラナ科植物などの畑作も行われていたと推定される。また、水田の周囲にカヤツリグサ科、サジオモダカ属などの水生植物、畑の周囲などにクワ科ーイラクサ科(カナムグラなど)が生育していたと考えられる。森林植生としては、周辺地域にスギ、マツ類(マツ属複数種東亞属)、ナラ類(コナラ属コナラ亞属)などが分布し、周辺の湿地などにハンノキ属が分布していたと推定される。

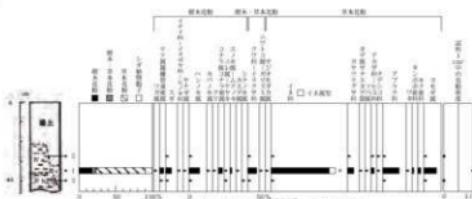
IV a層とIV b層では花粉があまり検出されなかつた。乾燥もしくは乾燥を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。

2) SK13

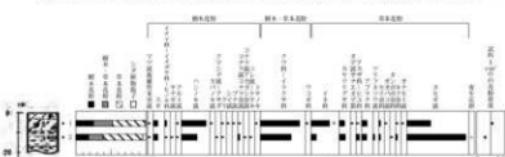
平安時代とされる3層と2層の堆積当時は、クワ科ーイラクサ科(カナムグラなど)やヨモギ属などが生育する開けた人里で、周辺ではアブラナ科植物などの畑作が行われていたと推定される。森林植生としては、周辺の湿地などにハンノキ属が

第5表 三王山遺跡における花粉分析結果

学名	分類群	現名	西壁21J17グリッド		SK13 覆土	
			1	2	3	1
Aristolochia pollen	根本花粉	ツバメ属	1			1
Tulip	ツバメ属	ツバメ属	13	2	1	1
Polygonum-Diphylleia	ツバメ属	ツバメ属	19	3	1	11
Crotonocarpus japonicus	イチゴ科	イチゴ科	1		5	2
Saxifrage	クマノミ属	クマノミ属	1			1
Alnus	ハンノキ属	ハンノキ属	34	2	6	60
Betula	カバノキ属	カバノキ属	2		1	38
Carpinus-Ostrya japonica	クワ科子葉	クワ科子葉	1			1
Cassiope crenata	クワ科	クワ科	1		1	2
Cirsium	シバ属	シバ属	1			1
Fagus	ツバメ属	ツバメ属	1			1
Quercus vulgaris-Liquidambar	コナラ属コナラ属	コナラ属コナラ属	13	1	1	5
Quercus subgen. Cyclobalanoides	コナラ属アガシ属	コナラ属アガシ属				1
Ostrya-Zelkova serrata	ニレ属 カエデ科	ニレ属 カエデ科	1		1	1
Celtis-Aphaneira aspera	ニレ属	ニレ属	5			1
Carpinus	カエデ属	カエデ属	1			1
Acacia nemorosa	トチノキ	トチノキ				1
Tilia	シナノキ属	シナノキ属				1
Artemisia-Nasturtium pollen	根本・草本花粉	アリゲルモ属	29	2	1	96
Morus-Ulmaceae	ウラジロモモ属	ウラジロモモ属				1
Artemisia	ウラジロモモ属	ウラジロモモ属				1
Scirpus-Schoenoplectus	ニワトリ属・ガズミ属	ニワトリ属・ガズミ属	2			
Nanophytum pollen	日本花粉					
Alnus	セジミモダカ属	セジミモダカ属	1			
Gramineae	イネ科	イネ科	168	7	1	45
Orchid type	イヌクモ科	イヌクモ科	20		1	1
Cyperaceae	カヤツリグサ科	カヤツリグサ科	20	3		15
Polygonum sect. Persicaria	タデ科サナエタケ属	タデ科サナエタケ属	1		1	
Fragaria	ソバ属	ソバ属	1			
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカバナ科	アカバナ科	10	2		8
Caryophyllaceae	アザミ科	アザミ科	3	1		12
Juncaceae	アブリ科	アブリ科	53	1	1	13
Grindelia indicum	ツツジ科	ツツジ科				4
Aspidiaceae	セリ科	セリ科			4	4
Plantago	オオバコ属	オオバコ属			1	
Labiatae	タガネ科	タガネ科	5			1
Antennaria	キク科	キク科	9		1	4
Xanthium	オナシモ属	オナシモ属			2	
Armenia	ヨモギ属	ヨモギ属	41	2	2	58
Fern spore	シダ植物孢子	シダ植物孢子				
Unknown type spore	未知孢子	未知孢子	47	11	10	17
Unknown type spore	未知孢子	未知孢子	3	2	1	1
Aristolochia pollen	根本花粉	ツバメ属	92	5	11	86
Aristolochia-Nasturtium pollen	根本・日本花粉	ツバメ属	31	2	1	97
Total pollen	日本花粉	ツバメ属	353	16	4	206
Pollen frequency of 1cm ²	試料 1cm ² 中の花粉密度		476	23	16	344
	$\times 10^3 \times 10^3 \times 10^3$		1.0	0.6	0.5	3.0
Unknown pollen	未同定花粉	シダ植物孢子	12	2	0	3
Fern spore	シダ植物孢子	シダ植物孢子	60	13	10	6
Helmith eggs (Ova of nematodes)	青虫虫卵	青虫虫卵				4
Helmith eggs frequency of 1cm ²	試料 1cm ² 中の青虫虫卵密度		0.0	0.0	0.0	0.0
	$\times 10^3$		0.0	0.0	0.0	2.4
Digested remains	明らかな消化物	不明	1	1	1	1
Charcoal fragments	燃焼灰物	不明	1	1	1	1



第9図 三王山遺跡2区西壁21J17グリッドにおける花粉ダイアグラム



第10図 三王山遺跡2区SK13覆土における花粉ダイアグラム

分布しており、周辺地域にスギ、ナラ類、クルミ属などが分布していたと考えられる。

3層では寄生虫卵の回虫卵が検出された。密度は低いものの、周囲に何らかの人為環境が存在したことが示唆される。回虫は中間宿主を必要とせず、虫卵の付着した野菜・野草の摂取や水系により経口感染する。

第4節 三王山遺跡における放射性炭素(¹⁴C)年代測定

A 測定試料と測定方法

2区SK13覆土の2層から採取された炭化物について、酸-アルカリ-酸洗浄を行って試料の処理・調整後、加速器質量分析(AMS)法により年代測定を行った(第6表)。測定実施機関は米国ベータ社である。

B 測定結果

測定結果は推定されている奈良・平安時代を若干遡るようにもみえる。これについては、今回の¹⁴C年代(補正¹⁴C年代)が測定対象部位の生育終了年代を示していることからさほど問題はないと思われるが、考古学側からの検討もお願いしたい。

なお、各用語の意味は次の通りである。

- (1) 未補正¹⁴C年代測定値 試料の¹⁴C/¹³C比から、単純に現在(AD1950年)から何年前かを計算した値。¹⁴Cの半減期は、国際的慣例によりリビー(Libby)の5,568年を用いた。
- (2) δ¹³C測定値 試料の測定¹⁴C/¹³C比を補正するための炭素安定同位体比(¹³C/¹²C)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(%)で表す。
- (3) 補正¹⁴C年代値 δ¹³C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、¹⁴C/¹³Cの測定値に補正值を加えた上で算出した年代。試料のδ¹³C値を-25(%)に標準化することによって得られる年代である。
- (4) 曆年代 過去の宇宙線強度の変動による大気中¹⁴C濃度の変動を補正することにより算出した年代(西曆)。補正には、年代既知の樹木年輪の¹⁴Cの詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と¹⁴C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。使用したデータセットは、INTCAL04: Calibration Issue of Radiocarbon, 46(3), 2004(海洋性試料については、Marine04)である。なお、較正曲線のスムース化には、下記の理論を用いた。

Talma, A.S. and Vogel, J.C. (1993) A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates. Radiocarbon, 35(2), p.317-322.

曆年代の交点とは、補正¹⁴C年代値と曆年代較正曲線との交点の曆年代値を意味する。1σ(68%確率)・2σ(95%確率)は、補正¹⁴C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した曆年代の幅を示す。

第6表 測定試料と処理・測定方法

地點・遺構	試料	種類	前処理・調整	測定法
2区SK13	¹⁴ C-1	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	加速器質量分析(AMS)法

第7表 放射性炭素(¹⁴C)年代測定結果

試料	未補正 ¹⁴ C年代 (年BP)	δ ¹³ C (‰)	補正 ¹⁴ C年代 (年BP)	曆年代(西曆)	測定 No. (Beta)
¹⁴ C-1	1340 ± 40	-25.4	1330 ± 40	2 σ: AD 640 ~ 770 2 σ: AD 640 ~ 770 交点: AD 670	232924

モダン・リファレンス・スタンダード下は、国際的慣例としてNBS Oxalic Acidの¹⁴C濃度の95%を使用した。

第VII章 まとめ

第1節 各調査区の状況

亀田中学校がこの地へ移転してきたのは昭和25年である。更正図によると、移転以前の土地の利用状況は、図版29に示したように、畑・水田・道・宅地・その他として利用されていた。発掘調査の結果、第V章で記したように、1～3区は遺構確認面の一部、あるいは大半が削平されており遺跡の遺存状況は悪かった。

1区は20Fグリッド付近に遺物包含層のIII b層・遺構確認面のIV a層が僅かに残っており、非ロクロの土師器長甕(37・38)が出土している。地震痕跡である噴砂痕も確認された。この噴砂痕が確認された場所は包含層相当のIII b層が残っていないかった。噴砂痕はIV a層を破っているが、III b層を破っているかまでは確認できなかつたので、地震の起きた時代は不明である。ほかは全て土木工事によりV層まで削平されていた。この工事は昭和54年に行われた鉄筋校舎への改築工事とこれ以降の下水道工事・造園工事などと考えられる。遺跡は、2区・3区の様子から1区にも広がっていたことが確実と考えられるが、現在は全壊していると推測される。

2区もIV a層は広範囲に削平されていたが、部分的に包含層・遺構確認面が残っていたので、遺跡の様相の一端を調査することができた。更正図(上図)と2区の遺構確認面の様相を示した下図を比較すると以下のことが見えてくる(図版29)。更正図の水田部分の形状と21・22Mグリッド付近、18L・Mグリッド付近、20L20・25グリッド付近の形状が近似している。包含層III層・遺構確認面IV a層が残っていた場所の形状は、更正図の「畠地」とされた場所の形状に近似している。調査には移転後の亀田中学校第1回卒業生であった五十嵐喜智平氏が作業員として参加下さっていた。五十嵐氏の記憶によれば、中学校建設以前には梨畠や畑・水田が広がっていたとのことである。これらのことから更正図は記載事項および縮尺など測量図としても概ね正しいものと解される。

一方、酒井和男氏の報告(酒井1980)にあるように、亀田中学校の敷地にあったとされる三王山と呼ばれていた砂丘の丘は、更正図には載っていない。しかし五十嵐氏の話ではこの砂丘上に畠があったとのことである。中学校移転に伴いこの砂丘を削し平地にしたとのことである。高さは現在より4～5mほど高かったと記憶されていた。

また同報告ではこの砂丘上には戦時中砲台が築かれ、遠く新潟の方まで見渡せた、という話を伝えるが、砲台は2区のやや南側、砂丘の下にあつたらしい。以上のことから、三王山と呼ばれた砂丘は亀田中学校移転間際まで存在し、移転工事に伴って崩されたと推測される。そして崩された砂を水田部分に盛って用地を平坦化したのである。2区基本層序の⑥⑦にあるIII e層は粘土質土壤で、これは水田耕土と推測される。そしてこの上の盛土は黒砂層と言つてよいほどであった。この黒砂は三王山が崩されたときのものであろう。III e層に古代や中世の遺物が入る要因はこのことに由来すると考えられる。

3区は図版17・写真図版4のとおり、この遺跡の立地条件を如実に示していた。すなわち砂丘の南側を選定し、砂丘上ではなく、その縁辺に堆積したシルト層上に立地している。3区遺構確認面は、西側から東側へ向かって、「黄褐色シルト層(III層)→黒色砂層(IV層)→黄灰～灰白色砂層(V層)」と堆積順を示すように土質が変化している。現在のグラウンド方面に砂丘が存在していたことを、このことからも傍證できよう。また第1次調査の基本層序は表土を除くII～V層は全て砂層を基調としており、遺跡の北東部が砂丘により標高が高かったことがうかがわれる。

なお、3区遺構確認面の黄褐色シルト層(III層、1・2区のIV a層に相当)の上面は削平されていることから、黒

色砂層（IV層）・黄灰色砂層（V層）も削平されている。黒色砂上にも遺構が存在した可能性は高いが畑などの営みによって埋滅していたと推測される。

3区の範囲内で更正図を見ると、道が東西南北に走っており、ほかは畠地となっている。3区13C・13Dグリッドおよび12C15・12D11付近には大きな擾乱が見られる。またSE45の東側・SE95周辺もⅢ層上面が乱れ、遺構検出が困難な状況であった。これらの状況はこの道となんらかの関係があると考えている。畠地を裏付ける遺構としては13D区に位置する鉢状遺構が考えられる。この鉢状遺構からは、珠洲焼すり鉢片も出土しているが、砂利や石、現代の茶碗片やゴム製品も出土し、近現代の遺構と推測される。五十嵐氏の記憶では梨畠は僅かで、ほとんどが野菜畠だったという。

以上のことと、遺構確認面まで自然堆積層が残っていなかったこと、遺構の乱れた形状および覆土の堆積様相を鑑みると、出土遺物や覆土の様相などから遺構を評価することは非常に困難であり、根拠に乏しいことが判明した。3区については井戸（SE）についてのみ検討の対象とし、その他の遺構については事実報告のみとする。

第2節 遺構

A 井戸について

2区・3区で検出された井戸は、2区で7基・3区で10基の計17基である。2区ではSE20・31・41から、3区ではSE30で曲物が出土した。全て底部で出土し、水溜用と推測される。SE20の曲物は腐食が進み土壤化が進行していたため取上げることができなかつた。3区SE30の曲物も破損劣化著しく、側板下部のみであった。

2区SE38では井戸枠が存在したことが確認できた。底面から井戸枠に組んだ状態で土居桁が出土した。

3区SE30とSE193で井戸枠部材と推測される木製品が出土し、SE45からは用途は不明であるが木製部材が出土している。

今次調査で検出された井戸には、木製品の出土状況や覆土の堆積状況からいくつか特徴的な部分が観察できたので、以下に所見を示す。なお井戸施設の名称は鍾方氏の所見（鍾方2003）に従って記述している。

1) 2区SE20・31・41 (図版13・14、写真図版6・7)

これら井戸に共通する条件・特徴が見受けられた。

①2区遺構確認面IVa層は削平されているため、遺構下部しか残っていなかつた。

②井戸はすり鉢状に掘られ、さらに幅・深さ共に曲物設置部分がさらに掘り込まれているため、遺構断面形状はいずれも漏斗形となっている。

③いずれの井戸も曲物設置部分の掘り下げは、砂層であるⅦ層上面から掘り下げられていた。

④③の状況から砂層上面が透水層と考えられる。

以上のことから、井戸掘削に当たっては、水溜用の曲物を予め用意し、最終作業を行う作業スペース分を考慮し大きく掘削した後、水が涌くことを確かめてから、曲物のサイズ分を掘っていたことが想定される。その後井戸枠を設置したのか、素掘りのままであったのかは、①の条件のため確認できなかつた。

いずれの井戸も曲物内の覆土は全てⅦ層と推測される砂層が充填していた。曲物内から遺物は出土していない。SE31からは曲物直上層から珠洲焼窯体部片(1)・鉄滓(83)が出土している。SE41からは須恵器の有台杯片(3)と無台杯(4)が出土している。これら井戸はいずれも②～④までの諸特徴が一致することから同時期に使用されていた可能性が高い。SE31を根拠に鎌倉～室町時代のものと推測する。

2) 2区SE38・39 (図版13・14、写真図版6・7)

この2つの井戸は上記の①のとおりIVa層が削平されていた。また、覆土の様相が良く似ていたことが特徴

として挙げられる。

覆土はIVa層と推測されるシルトと暗褐色のシルト層（おそらく本来の包含層に当たる層）が大きなブロック状になって入り乱れて堆積していた。覆土は人為的に埋めたものと推測する。

SE38では井戸枠を作ったものであった可能性が高い。SE39は素掘りの井戸であったと推測する。共にすり鉢状に大きく掘り下げ、透水層のⅦ層も一気に掘り抜いている。SE38では大きく掘り抜いた後、土居枠を設置し（水溜用曲物が据えられていた可能性もある）、井戸枠を構築しつつ、これを支持するため外側を残土で埋め、井戸を構築していた様子が想定できる。廃絶にあたっては井戸枠の上部を撤去し、一気に埋めたものと推測する。共に距離が近いことから水が湧くことを知っての構築作業であったと推測する。

SE38からは土師器無台片が出土し、SE39からは土師器長甕片（2）のほかいずれも細片であるが須恵器無台杯・土師器無台椀・土師器小甕が出土している。これらのこととSE31等と井戸の構築方法が異なることから、SE38・39は平安時代に属する可能性が高い。

3) 3区 SE30・SE193（図版22・24、写真図版16・17）

両井戸は井戸枠部材と推測される木製品が出土した。

SE30の断面形は逆凸状になっており、覆土が1～14層では暗褐色のシルトまたは砂質土を、15～23層ではⅢ層の黄褐色地山層を基調とし、色調・土質とも全く異なっていたので、構築（掘削と井戸側設置）→使用→廃絶に至るまで概ね以下の過程を経たものと考えられる。

①掘削 開口部（15～22層）を広く掘削する（井戸枠部材は全て準備されている状態）。

②井戸枠設置（aまたはb）

②a 挿入式（鍾方2003）曲物を据え、既成の井戸枠を設置し、井戸枠外縁を埋め戻す。

②b 組立て式（鍾方2003）曲物を据え予め用意された井戸枠部材で井戸枠を構築。その後井戸枠外縁を埋め戻す。

③使用

④廃絶後 井戸枠の上部構造は回収された可能性が高い。1～14層は崩落土も含まれるだろうが人為的な埋め戻しが行われた可能性が高い。2層は炭化物を非常に多く含む層で、火を用いた何らかの行為を直上で行ったか、意図的にそのような土を搬入して埋めた可能性が高い。

出土遺物は1・2層から珠洲焼甕（100）やすり鉢（97・99）が出土しており、細片だが須恵器蓋や無台杯、土師器食器類や煮炊具が11～14層で出土している。これらのことと上記埋め戻しの傍証と考え得る。このように考えた場合、SE30は鎌倉～室町時代の遺構と考えられる。

SE193の断面形は逆台形を呈する。横棟と推測される木製品（146～148）が出土していることと覆土の堆積状況から、井戸枠を伴う井戸であったと推測する。覆土の堆積状況には特徴があるのでSE30と同様に見て行くこととする。なお曲物が備わっていたかどうかは不明であった。

①掘削 作業スペースを含め広く一気に掘り下げる（井戸枠部材は全て準備されている状態）。

②井戸側設置

②a 3基の井戸が切り合っている。湧水深度が既知であった場合、上記挿入式で井戸枠を設置した可能性を考えられる。

②b 上記組立て式で井戸枠を組み立てつつ外縁を埋める。

③使用



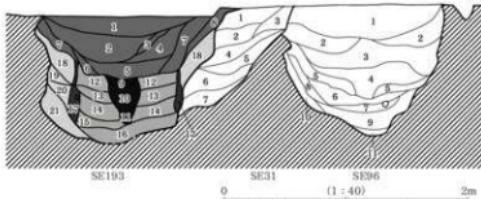
第11図 3区 SE30 土層断面

④廃絶後 廃棄にあたっては幾つかの 特徴が観察できた。

- ④-1 17層は棒の板痕と推測される。板が腐食し土壌化したものか、拔板後別の土が混入したもののかは明瞭でないが前者と推測する。

④-2 9～11層は12層上面から掘られている。

第12図 3区SE193 土壌断面図



- #### ④-3 上記の結果、12層～16

層は廃棄に伴う人為的な埋め戻しの可能性が高い。

- ④-4 12層から上部にも井戸柱が存在し、廃棄時に抜き取られている可能性が高い。

これらのことから、以下のことが想定される。

- a 廃棄に伴い12～16層を埋め戻す。
 - b 9～11層を掘り抜き何らかの行為を執り行う。この段階で井戸枠上部は既に取り外されている可能性が高い。
 - c 地表面まで埋め戻す

bについては、現在でも神社が行う「井戸祭祀」が参考になるかも知れない。これは埋井に伴う祓いで、祭祀は水波能充命である。井戸下部を埋め、そこに竹筒を刺し「息抜き」をする。祝詞を奏し竹は刺したまま残りを埋める。という祭式である。9～11層がこの「息抜き」痕と言い切ることはできないが、この井戸では埋井に伴い、広義の祭祀（世俗的行為）が行われたものと推測する。今後類例の増加を待ちたい。

遺物は、1～7層で珠洲焼灰や磁石(130)が出土している。このほか須恵器食膳具や貯蔵具、土師器食膳具・煮炊具の細片が出土しているが、12層以下では珠洲焼広口壺(111)のほか須恵器食膳具や貯蔵具、土師器食膳具・煮炊具の細片が出土している。18～21層からは遺物は出土しなかった。これらのことから、本井戸の最古年代は鎌倉～室町時代と推測する。

B 2区 SD1～3について（図版6）

本構造については以下の特徴が挙げられる。

- ① SD1 と SD2・3 は約 1.2m 前後の間隔で平行しており、深さはいずれも 10 ~ 20cm と浅い。
② IVa 層上面の標高は全体的には北から南に向かって、東から西に向かって低くなっている。

上記のことから以下のことが推測される。

- a 水を流す目的であれば東から西に向かって流れていたものと推測する。
 - b 溝と溝の間が道であったと仮定すると、当初はSD1-SD3の間がこれにあたり、後にSD2が設けられたのであろう。旧亀田町域では、荒木前遺跡第2次調査（川上 1996）で道幅 3.9 ~ 5m・側溝深度 0.65 ~ 0.89m の道路状遺構が検出されている。また中の山遺跡では溝間約 1m 前後に保ちながら平行に走る 2 号溝・3 号溝が検出されている。溝の規模は、2 号溝が幅員 1.0 ~ 1.2m、深さ 0.4 ~ 0.5m で、3 号溝は幅員 1.0 ~ 1.2m、深さ 0.5m であった。報告では溝間に何らかの目的があるのではないかと推測されている（川上 1982）。遺構の規模や位置関係などから、2 区 SD1 ~ SD3 は道路の側溝である可能性もある。

第3節 遺物の年代観について

A SK13出土遺物について

SK13からは須恵器有台杯・須恵器無台杯・土師器長甕・土師器小甕が出土している。細片のため掲載できなかった土器も上記器種であった。第V章で記したように出土遺物の一括性は高い。

本道構出土食膳具の構成比率は須恵器100%である。器種構成半表は第8表のとおりである。報告遺物のはかに無台杯もしくは有台杯の口縁部片が2点あり（無台杯としてカウントした）、これらを含めた上で須恵器食膳具の胎土を観察すると、5と6の胎土はC群で、残りの5点の胎土はA群であった。須恵器の産地別構成比率は、C群:A群=75%:25%であった。

須恵器有台杯・無台杯の器形と法量の特徴は山三賀II遺跡でIV1期〔新潟古代土器研究会2004〕と比定されるSI14出土遺物やIV2期〔同上〕に比定されるSI15出土遺物に近似する。しかしながら須恵器有台杯5の器形や法量はSI14により近いことから、SK13出土遺物はIV1期を中心とした時期と推測する。実年代では8世紀中葉頃と考えられている〔春日ほか2008〕。

なお、SK13の2層出土炭化物の放射性炭素年代測定の結果は、AD640～770。交点AD670と推測される時期よりも古い年代の結果が出ている。

第8表 2区SK13出土土器の器種構成率表

	食膳具		煮炊具			煮炊具計	総計							
	有台杯	無台杯	土器		小甕									
			長甕	小甕										
1) 総数 (N/36)	0.41	0.27%	0.66	180.44%	1.29	39.51%	0.13	11.99%	0.08	7.21%	0.21	19.19%	1.59	100.00%
2) 種類数 (N)	1	0.09%	7	63.64%	8.09	72.73%	1	9.09%	2	18.18%	3	27.27%	11.00	100.00%
3) 破片数 (N/36)	1	31.64%	1.33	42.10%	2.53	73.74%	0.83	26.26%	0	0.00%	0.83	26.26%	3.06	100.00%
4) 破部数 (N)	1	16.67%	4	66.66%	5.00	83.33%	1.00	16.67%	0	0.00%	1	16.67%	6.00	100.00%
5) 碎点数 (N)	1	2.86%	11	31.43%	12.00	34.26%	16	45.71%	7	20.00%	23	65.71%	35.00	100.00%
6) 総重量 (g)	216.0	26.71%	326.6	40.39%	452.60	67.10%	250.0	30.92%	16.0	1.98%	266	32.90%	808.60	100.00%

B その他出土土器について

擾乱土から出土している39や44、49はこれに近い時期と推測する。一方胎土B群、佐渡小泊窯跡群産と推測される須恵器も定量出土している。破片資料が多く詳細な時期の比定は困難である。これまでの研究成果から小泊窯跡群産須恵器が越後国に流通し始めるのはV1期以降、9世紀前半以降と考えられていることから、これを上限年代と考えておくこととする。土師器無台碗も破片資料が多く詳細については良く分からず、口径13cm前後で器高3cm前後のものが多いと考えられることから、VI期頃、9世紀末頃と考えておく。

以上のことから古代についてはSK13のIV1期を上限、VI期を下限として断続的に営まれていたと推測される。

C 鎌倉・室町時代

鎌倉・室町時代の遺物は、珠洲焼や青磁が少量出土した。しかし全て破片資料であるため詳細な時期については不明である。珠洲焼甕の口縁部80をみると、頸部で明瞭に括れ、口縁端部を角縁状に仕上げていることからIV期かV期頃と考えておく。実年代では14世紀～15世紀頃と推測される〔吉岡1994〕。第1次調査地出土遺物も鎌倉時代と推定される遺物も出土しているが、室町時代の遺物も多く出土している。

第4節 三王山遺跡の性格について

第1次調査～今次調査に至る中で主体的に出土している遺物は、奈良・平安時代の須恵器や土師器と鎌倉・室町時代の国内産陶器・青磁や白磁といった貿易陶磁である。このことから三王山遺跡は古代～中世に亘って断続的に人が暮らした場所であることが分かってきた。また各時代によって遺跡の性格も異なっていたことも分か

ってきた。ここでは周辺遺跡の様相も概観しながら三王山遺跡の性格について検討する。三王山遺跡周辺の遺跡については『上郷遺跡Ⅱ』(春日ほか1997c) (以下「上郷Ⅱ」という) で詳しく検討されているので、このことも踏まえて検討する。

A 奈良・平安時代の三王山遺跡

前節で見たように8世紀中葉頃に出現し9世紀末頃まで営まれていた。周辺遺跡の消長について上郷Ⅱを参考に第13図にまとめた。亀田砂丘上に位置する古代の遺跡は8世紀中葉頃から出現し9世紀の終わり頃まで営まれている例が多い。一方砂丘周辺の自然堤防上に位置する遺跡は9世紀後半頃出現し10世紀初頭頃まで営まれているようである。

奈良～平安時代の砂丘上の遺跡では茗荷谷遺跡から銅製の鈎帶金具が出土しており、当遺跡に律令官人が関与していた可能性がある(新潟市1994)。平安時代の砂丘上の遺跡では小丸山遺跡が上層農民の居宅城と考えられている(新潟市1994・小池ほか1995)。三王山遺跡からは階層性を示す遺物が出土していないことから、一般的な集落であったと推測される。また削平範囲が広いこともあり、出土遺物量も少なく明確な構造も把握しにくい状況であった。遺跡の性格まで考察できるような状況ではなかったが、三王山遺跡は8世紀中葉以降に一般的な集落として成立し、徐々に小規模になっていった集落と推測する。

一方で平安時代になると沖積地で展開する集落が活発化する。9世紀前葉から10世紀初頭の遺跡が多く、この時期が当地域の開発の発期になっていると考えられる(春日ほか1997)。上郷遺跡では水田跡が検出されている。牛道遺跡では畠作や稻作が行われていた可能性が高いと推定される(土橋ほか1999)。また則天文字が書かれた墨書き土器が18点出土していることも特徴的である。駒首湯遺跡でも水田耕作を基盤としていたことが推測され、吉祥句が書かれた墨書き土器が多く出土している。また仏教関連施設と考えられる四面庇付の2間×2間の掘立柱建物跡が検出されている(渡邊ほか2009)。これらの遺跡と比較すると、三王山遺跡では、活発な人の営みの様子はうかがえない。のことからも小規模な集落であった可能性が高い。

年代	上郷Ⅱ ツリヒケ	7世紀	8世紀	9世紀	10世紀	11世紀	主な文献
1. 阿賀野川中州A遺跡	1						新潟市1994
2. 乳戸谷遺跡	1						新潟市1995
3. 小丸山遺跡	1						新潟市1996
4. 出ノ家遺跡	1		---				川上1992・林越町2000
5. 三王山遺跡	1		---	---			酒井1980
6. 中ノ山遺跡	1		---	---			川上ほか1983
7. 荒木山遺跡	1		---	---			渡邊ほか1994
8. 上郷遺跡	2		---	---			春日ほか1997
9. 牛道遺跡	2b			---			上橋ほか1999
10. 西郷遺跡(上層)	2b			---			上橋ほか2009
11. 大藏遺跡	2b			---			上橋ほか2007
12. 日本遺跡	2b			---			今井ほか2007
13. 駒首田遺跡	2b			---			渡邊ほか2009

第13図 三王山遺跡周辺の遺跡の存続期間
(春日1997cを参考に作成。実年代の比定に当たっては春日2008を使用した)

B 鎌倉・室町時代の三王山遺跡

今次調査区での出土量は極端に少ないが、特に1次調査地(図版4・30)では国内産の陶器や青磁といった貿易磁器も定量出土していることから、かなり経済力があったものと推測される。同時代と考えられる周辺の遺跡と比較しても、量や器種構成共に優越している。第1次調査地の長方形堅穴遺構(図版30)から出土した青銅製の香炉や鉄鉢が共伴したとされる珠洲焼り鉢と同じ年代を考えてよいのならば、仏器がまとまって出土した好例となるが、現段階では判断しかねる。しかしながら国内陶器や貿易陶器が多いこと、今次調査区で曲物を有する井戸が多いことからも、活発な人の営みや経済力が高いことが推測される。これらのことから、三王山遺跡は階層性が高い集団により営まれた遺跡である可能性が高いと考えられる。このことは周辺の荒木前遺跡についても考えられることで、両者の関係については今後の課題として待ちたい。

引用・参考文献

- ア 荒川隆史ほか 2006 「一鶴道場 国道 4号 安田バイパス開闢免震報告書」 天理遺跡 新潟県教育委員会・財(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- イ 飯坂真喜ほか 2002 「一鶴道場 国道 12号 中条高瀬川バイパス開闢免震報告書 緑・坪井跡」 新潟県教育委員会・財(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 山崎龍也ほか 1996 「磐越自動車道開通免震調査報告書 沼内遺跡」 新潟県教育委員会・財(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 伊藤 健 1998 「松山古跡 新潟県佐渡郡黒川村大字塙坂遺跡における古代遺跡の削除調査報告書」 黒川村教育委員会
- 今谷さやか 2007 「日本遺跡 第3次調査—上越市大字塙坂遺跡調査に伴う日本遺跡免震調査報告書」 新潟市教育委員会
- ウ 植木直・速竹一郎ほか 2003 「第7回鳥海山開拓免震調査報告書」 新潟市教育委員会
- 上野一久・春日良実 1997 「燕市バイパス開闢免震調査報告書」 上野道跡1 新潟市教育委員会
- 湖田進平 2008 「諏訪御跡 第3次調査—人保保坂遺跡『御坂の郷』建設に伴う免震調査報告書」 新潟市教育委員会
- 湖田進平 2010 「上越A道跡 第14次調査—市道横堀6号より塗施設工事に伴う免震調査報告書」 新潟市教育委員会
- 宇野勝夫 1998 「考古資料に見る古のとて中世の歴史―社会」 真岡社
- 宇野勝夫 1992 「食農計画の意義と方法」 国立歴史民俗博物館研究報告 第40集 国立歴史民俗博物館
- 江口友子 2001 「谷根谷内宿所構造 国道 49号谷根谷バイパス開拓免震調査報告書」 新潟県教育委員会・財(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 岡田重雄 2004 「下北条古道跡、西面古戸谷付近の下北条古道跡開拓免震調査報告書」 新潟市教育委員会
- 岡安光史・大谷邦洋ほか 2005 「日本古の歩みと自動車道開拓免震調査報告書」 六斗森遺跡 新潟県教育委員会・財(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小山田美子・高橋和也 2002 「越後自転車道開拓免震調査報告書」 北陸中道古道(赤尾古道) 新潟県教育委員会・財(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- カ 桜田祐司 2001 「越後御跡の跡はいかで?「北庄古跡土器研究」 第9号 北庄古跡土器研究会
- 春日良実 1999 「古代住居の小原における地形的特徴と地盤」 「新潟考古学講会」 第8号 吉田町教育委員会
- 春日良実 1994 「第7章より」 第2章頃から後半の上原「中野白鳥車道 上越市春日・木舟地区免震調査報告書」 一ノ口道跡東地区(本文編) 新潟県教育委員会
- 春日良実 1995 「古代聚落の形成」 「歴史紀要」 第1号 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日良実 1997a 「城代・佐野における「9世紀の城代」」 「北陸古跡土器研究」 第6号 北陸古跡土器研究会
- 春日良実 1997b 「越後・佐野における10~11世紀の土器様相」 「北陸古跡土器研究」 第7号 北陸古跡土器研究会
- 春日良実 1997c 「越雲バイパス開拓免震調査報告書」 上越道跡1 新潟県教育委員会・財(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日良実 1998 「中絹遺跡出土の縄織物と縄織工房」 「土器研究 よした」 第2号 吉田町教育委員会
- 春日良実 1999 「第4章古代 第2章土器編成と地域性」 「新潟考古の考古学」 古河書院
- 春日良実 2000 「考古編 第5章 まとめて」 「古河町史 資料編」 考古・古代・中世 古河町
- 春日良実 2003a 「越後白鳥車道開拓免震調査報告書」 佐ノ羽根跡(C地区) 新潟県教育委員会・財(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日良実 2003b 「酒造跡出土古墳と泊道跡のクロスセクションによる後出土の遺物を基に」 「「歴史紀要」 「下ノ口編」、「山三賀編」」の検討を中心に「「新潟考古」 第16号 新潟県考古学会
- 春日良実 2005 「越後ににおける古代の遺族墓について」 「新潟考古」 第18号 新潟県考古学会
- 春日良実 2007 「越後における古代の遺族墓について」 「新潟考古」 第18号 新潟県考古学会
- 春日良実ほか 2004 「越後阿賀地域の古代土器様相」 新潟県古代土器研究会
- 春日良実ほか 2008 「一般国道8号・糸魚川東バイパス開拓免震調査報告書」 六反田古道跡・前波南遺跡 新潟県教育委員会・財(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日良実・荒澤正史 1999 「越後・佐野の様相」 「北陸古跡土器研究」 第8号 北陸古跡土器研究会
- 加藤 伸はるか 2003 「北陸新幹線開拓免震調査報告書」 仲条遺跡 新潟県教育委員会・財(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 伸はるか 2006 「北陸新幹線開拓免震調査報告書」 川原町鹿跡1 新潟県教育委員会・財(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 伸はるか 2007 「北陸新幹線開拓免震調査報告書」 用言寺遺跡2 新潟県教育委員会・財(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鍛波正樹 2003 「ものが語る歴史 古河の考古学」 同文社
- 亀田町史編さん委員会 1999 「亀田の歴史」 上巻・下巻 亀田町
- 亀田町史編さん委員会 1999 「亀田の歴史」 資料編 亀田町
- 川上良夫 1981 「山崎県懇親會」 50周年記念会議
- 川上良夫 1982 「中の山塙跡開拓免震調査報告書」 亀田町教育委員会
- 川上良夫 1995 「山ん家塙跡緊急免震調査報告書」 横越村教育委員会
- 川上良夫 1996 「荒木遺跡 第2章跡」 新潟県中越郡龟田町、荒木前遺跡免震調査報告書 亀田町教育委員会
- * 北野博司 1999 「「鬼遺跡」の見出しが分類され」 「北陸古跡土器研究」 第8号 北陸古跡土器研究会
- 北村 浩・芦池直一郎ほか 2004 「中条古道跡・宍道ノ跡・越後守室跡開拓免震調査報告書」 新潟市教育委員会
- 小池邦明 1999 「山木古道跡 第2章跡」 「新潟考古学講会」 新潟市教育委員会
- 小池邦明ほか 2003 「山木古道跡 第3章跡」 「新潟考古学講会」 新潟市教育委員会
- 小池邦明ほか 2007 「山木古道跡 第4章跡」 「新潟考古学講会」 新潟市教育委員会
- 小林正 2010 「古代越後の歴史」 遠野第一・四十石街道にて(他で)「平成21年春新潟道跡免震調査報道会」 最新調査成果が選ばれた新潟市の歴史」 新潟県埋蔵文化財センター
- 古山正忠・竹原信也 1967 「新潟標準土器」 豊林農土産会議事務所監修
- サ 渡井和男 1980 「「三王古道跡」開拓免震調査報告書」 亀田町教育委員会
- 渡井和男 2000a 「小丸山古道跡」(横越町) 資料編 横越町
- 渡井和男 2001b 「山家塙跡」(横越町) 資料編 横越町
- 坂井秀秀 1998a 「越後・佐野における古代の生活の生と死通し8~10世紀を中心として」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』報告編 石川県考古学研究会・北陸古跡土器研究会
- 坂井秀秀 1998b 「古代の「ほんまはした」と「森」森、平安時代の土器」『新潟バイパス開拓免震調査法技術』山三賀古道跡 新潟県教育委員会・建設者北陸地方建設局
- 坂井秀秀 1998a 「第7章より」 2章森、平安時代の土器』『新潟バイパス開拓免震調査法技術』山三賀古道跡 新潟県教育委員会・建設者北陸地方建設局
- 坂井秀秀 1998b 「北陸古跡土器長持形切妻法」『新潟考古学講会会報』第3号 新潟考古学講会
- 坂井秀秀 1999a 「山三賀古道跡ひもかけたみ野北地方の「式部」と源氏の間隔』『新潟考古学講会会報』第4号 新潟考古学講会
- 坂井秀秀 1999b 「古代ロカリティ跡群研究の「式部」と源氏の間隔』『新潟考古学講会会報』第5号 新潟考古学講会
- 坂井秀秀 1999c 「「宇」と「罫」。罫と「東」東夷古道における「宇」の形(「一」城と「罫」を組む)。筑む一代から中世へー』 山川出版社
- 坂井秀秀 1999d 「水辺の古代街並み跡—越後平野の水の街・舟運・漁業」『越と古代の北陸』 名著出版
- 坂井秀秀 1999e 「第4章古代 第1節総論」『新潟の考古学』 吉志出版
- 坂井秀秀 1994 「上新潟バイパス開拓免震調査報告書」 今治遺跡、下條遺跡、子安遺跡 新潟県教育委員会
- 坂井秀秀 1995 「北陸自動車道 上越市春日・木舟地区開拓免震調査報告書」 一ノ口道跡東地区 新潟県教育委員会
- 坂井秀秀 1996 「新潟バイパス開拓免震調査報告書」 山二賀遺跡 新潟県教育委員会・建設者北陸地方建設局新潟県国工事事務所
- 坂井秀秀 1997 「「鬼遺跡」の見出しが分類され」 「北陸古跡土器研究」 第9号 北陸古跡土器研究会
- 坂井秀秀 1998 「「鬼遺跡」の見出しが分類され」 「北陸古跡土器研究」 第9号 北陸古跡土器研究会
- 坂井秀秀 1999 「「鬼遺跡」の見出しが分類され」 「北陸古跡土器研究」 第9号 北陸古跡土器研究会
- 坂井秀秀 2000 「「鬼遺跡」の見出しが分類され」 「北陸古跡土器研究」 第9号 北陸古跡土器研究会
- 坂井秀秀 2001 「「鬼遺跡」の見出しが分類され」 「北陸古跡土器研究」 第9号 北陸古跡土器研究会
- 坂井秀秀 2007 「新潟市近年新潟道跡の調査について」 「新潟県考古学会第18回大会研究発表会要旨」 新潟県考古学会
- 佐藤友子 2008 「一般国道7号」 万代橋下橋脚開拓免震調査報告書 世波新潟町(広小路町地図) 新潟県教育委員会・財(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- シ 上越市 2003 「上越市」資料編2 考古 上越市
- ス 鈴木俊成 1994 「「YII章より」 1平安時代の土器」『北陸自転車道 上越市春日・木舟地区開拓免震調査報告書』 一ノ口道跡東地区(本文編) 新潟県教育委員会・財(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木俊成ほか 1998 「「京浜はね整備事業」(神林村)開拓埋蔵文化財調査報告書」 天王前遺跡、有明の塙遺跡、石川遺跡 新潟県教育委員会・財(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木俊成・春日良実・高橋一功 1994 「北陸自転車道 上越市春日・木舟地区開拓免震調査報告書」 一ノ口道跡東地区(本文編) 新潟県教育委員会・財(財)新潟県教育委員会

- 亞種植物群調査事業団
 タ 高橋保雄ほか 2006 「日本海沿岸北東部動植物群調査報告書又III「佐吉遺跡」」新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
 高野裕子・渡邊朋和 2003 「山口乙之遺跡発掘調査報告書」新潟県教育委員会
 国中一義・丹下久之ほか 2004 「粘土鳥居跡発掘調査報告書」新潟市教育委員会
 フ 木本宏明・渡邊朋和ほか 1998 「細泡土器発掘調査報告書」新潟市教育委員会
 木本宏明・渡邊朋和ほか 1999 「山谷内遺跡発掘調査報告書」新潟市教育委員会
 木本宏明・渡邊朋和ほか 2000 「川根遺跡発掘調査報告書」新潟市教育委員会
 木本宏明・高野裕子ほか 2002 「内野遺跡発掘調査報告書」新潟市教育委員会
 木本宏明・澤野俊介ほか 2003 「粘土鳥居跡発掘調査報告書」新潟市教育委員会
 木本宏明・澤野俊介ほか 2004 「愛宕洋瀬跡発掘調査報告書」新潟市教育委員会
 木本宏明・澤野俊介ほか 2004 「山王引瀬跡発掘調査報告書」新潟市教育委員会
 木本宏明・澤野俊介ほか 2005 「冲ノ引瀬跡発掘調査報告書」新潟市教育委員会
 木本宏明・澤野俊介ほか 2008 「舟ノ引瀬跡、第15回調査・私営園地整備事業(狙い手骨成型)浜田地区に伴う舟ノ引瀬跡第8次発掘調査報告書」新潟市教育委員会
 木本宏明・八幡裕人ほか 2009 「前川遺跡、第2次調査-它地域に伴う舟ノ引瀬跡第2次発掘調査報告書」新潟市教育委員会
 稲谷康志・若林知也ほか 2003 「舟ノ引瀬跡発掘調査報告書」新潟市教育委員会
 ト 柏山理子ほか 1999 「国道49号横瀬川ハイウェイ橋樋橋発掘調査報告書」舟ノ引瀬跡、新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
 柏山理子 2009 「一般国道49号船引田ババ駄橋発掘調査報告書」舟ノ引瀬跡、大蔵遺跡、新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
 ル 梅泽圭生ほか 2002 「無限通路発掘調査報告書」新潟市教育委員会
 ニ 長野豊 1986 「新潟史 史編」昭和・古代・近世編
 メ 長野豊 1987 「新潟史 史 通史編」昭和・古代・近世編
 新古代土器研究会 2004 「越後阿賀北地区の古墳土器群」新古代土器研究会
 新潟市考古学研究会 2007 「新潟市考古学」新潟市の歴史、新潟市
 新潟市史編さん始原始代の中世部分 1994 「新潟市史」資料編1「昭和古代中期」新潟市
 楠野耕造 1996 「石動遺跡(平成3年発掘調査報告書)」新潟市教育委員会
 楠野耕造 2000 「桑山町舟ノ引瀬跡、菅原さんがい跡水稲業に伴う発掘調査報告書」新潟市教育委員会
 楠野耕造・朝岡政典 1997 「大蔵遺跡、尼鬼遺跡発掘事業に伴う発掘調査報告書」新潟市教育委員会
 藤原・小池浩司・渡辺明和 1988 「新潟市小林山・道跡発掘調査報告書」新潟市教育委員会
 古庄透郎ほか 2003 「舟ノ引瀬跡発掘調査報告書II」新潟市教育委員会
 星守信明ほか 1998 「舟ノ引瀬跡(昭和中期)発掘調査報告書」舟ノ引瀬跡II(B地区)、新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
 萩野昌治ほか 2002 「舟ノ引瀬跡発掘調査報告書」新潟市教育委員会
 水沢幸一 1996a 「中条町埋蔵文化財発掘調査報告書」第1集 下巻・城崎遺跡・舟ノ引瀬跡ほか」中条町教育委員会
 水沢幸一 1996b 「中条町埋蔵文化財発掘調査報告書」第10集 下巻・江上館遺跡II」中条町教育委員会
 水沢幸一 1997 「中条町埋蔵文化財発掘調査報告書」第12集 下巻・舟ノ引瀬跡II」中条町教育委員会
 水沢幸一 1999b 「中条町埋蔵文化財発掘調査報告書」第18集 下巻・舟ノ引瀬跡II」中条町教育委員会
 水沢幸一 2000 「中条町埋蔵文化財発掘調査報告書」第20集 下巻・舟ノ引瀬跡II」中条町教育委員会
 水沢幸一 2001 「中条町埋蔵文化財発掘調査報告書」第21集 下巻・舟ノ引瀬跡II」中条町教育委員会
 水沢幸一 2005 「中条町埋蔵文化財発掘調査報告書」第33集 下巻・舟ノ引瀬跡II」中条町教育委員会
 水沢幸一 2005 「最後の世界土器」新潟考古学」第10号 舟ノ引瀬跡考古学
 ヤ 山崎忠良ほか 2006 「「上越三和遺跡開発発掘調査報告書」・「舟ノ引瀬跡」」同成社
 ジ 吉井雅彦ほか 1999 「元山宮跡(平成13年発掘調査報告書)」新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
 ジ 吉岡綱彌 1994 「珠洲城跡論」古川弘文
 ジ 吉岡綱彌 1995 「世界遺産論の研究」古川弘文
 米沢 康 1965 「大化前夜における越の史的定位」『伝説』17号・伝承史学会
 米沢 康 1980 「大化二年の越における舟ノ引瀬跡群をみて」『伝説』32号・伝承史学会
 ワ 渡邊照 1991 「舟ノ引瀬跡発掘調査報告書」新潟市教育委員会
 渡邊照 1992 「上浦遺跡発掘調査報告書」新潟市教育委員会
 渡邊照 1999 「第四章第4節第3項(製鐵)「新潟県の考古学」」新潟県考古学公
 渡邊照ほか 1997 「金津丘陵跡(舟ノ引瀬跡)発掘調査報告書II」舟ノ引瀬跡E・A・C地点、大入遺跡 A地点」新潟市教育委員会
 渡邊照ほか 2000 「舟ノ引瀬跡発掘調査報告書II」新潟市教育委員会
 渡邊照ほか 2001 「舟ノ引瀬跡発掘調査報告書II」新潟市教育委員会
 渡辺ますみ 1991 「荒木前跡」鬼田町教育委員会
 渡辺ますみ 1994 「精立C遺跡発掘調査報告書」鬼田町教育委員会
 渡辺ますみ 1998 「第2章 原始・古風・舟ノ引瀬跡-第3章出土物第3項奈良・平安時代の遺物1」荒木町史資料編I「原始・古代・中世」荒木町
 渡辺ますみ 2009 「舟ノ引瀬跡」鬼田町教育委員会
 渡邊亮太子・田中耕作 2001 「舟ノ引瀬跡 II(平安時代部分)」新潟市教育委員会

 第VI章 引用・参考文献
 カ 余原正明 1999 「寄生虫-考古学と動物学」『考古学と自然科学』2 p.151-158 同成社
 余原正明 1993 「花粉分析による古環境復原」『新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法』p.248-262 角川書店
 シ 尾島吉三 1973 「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学研究の方法』60p
 尾島 謙ほか 1988 「木の構造」200p. 文永堂出版
 尾島 謙・伊東達也 1988 「日本の遺跡出土木製器具組合」296p. 雄山社
 ス 杉山真二 2000 「植物(被子植物)」『アーバー』『考古学と植物学』p.189-213 同成社
 タ 只見川第四紀研究グループ 1966 「福島県磐梯盆地の浮石質砂層の基底より出土した木村の¹⁴C年代-日本の第四紀層の14C年代XXVI」『地球科学』82 p.9
 只見川第四紀研究グループ 1966 「只見川・阿賀野川流域の第四紀の編年-とくに沼沢浮石層の樹木層の諸問題について」『第四紀』8 p.76-79
 ナ 中村 稔 1973 「花粉分析」p.82-110 古今書院
 中村 稔 1974 「イネ科花粉について。とにイネ(Oryza sativa)を中心として」『第四紀研究』13 p.187-193
 中村 稔 1977 「稻作とイネ花粉」『考古学と自然科学』第10号 p.21-30
 中村 稔 1988 「日本花粉の樹木層」『新潟自然博物館叢書(緑系)』第13集 91p
 ツ 藤原宏志 1976 「プランツ・オーバル分析法の基礎的研究(1)一般種イネ科栽培植物の柱状体標本と定量分析法-」『考古学と自然科学』9, p.15-29
 藤原宏志・杉山真二 1984 「プランツ・オーバル分析法の基礎的研究(5)-プランツ・オーバル分析による水田址の検出-」『考古学と自然科学』17 p.73-85
 山田昌久 1993 「日本列島における本貫遺物出土遺跡文集」『歴史研究特別号I』242p. 歴史研究会

別 表

別表1 三王山遺跡 2区主要遺構計測表

開発 No.	遺構	グリッド	時代	確認面	主方位	規模 (m)				底面 高さ (m)	形態		遺物 の 有無	遺物 回収状況	備考		
						上階		下階			深度	上階		遺物 の 有無	遺物 回収状況	備考	
						長軸	短軸	長軸	短軸			平面	断面				
13	SE 20	18Q21 19Q1	中世	IV-a層		(1.52)	(0.86)	(1.26)	(0.92)	(0.46)	0.60	(内傾)	sondage	○	古墳上に(既に 落してから上部 不明)		
13	SE 25	19N11	中世	IV-a層		(0.84)	(0.77)	(0.50)	(0.55)	(0.40)	0.58	内傾	sondage				
13	SE 31	19M2-3	中世	IV-a層		(0.94)	(0.94)	(0.43)	(0.15)	(0.60)	0.38	内傾	sondage	○	31・36 史物出土		
13	SE 28	19M13-14・18-19	平安時代	IV-a層	N-S'2-E	(2.44)	(2.03)	(1.33)	(1.08)	(0.55)	0.43	横内傾	sondage	○	36 井戸出土		
13	SE 29	19M17-18・22-23	平安時代	IV-a層		(1.87)	(1.79)	(1.09)	(1.28)	(0.44)	0.51	内傾	sondage	○	31		
14	SE 41	19L10 19M6	中世	IV-a層		(1.12)	(1.22)	(0.52)	(0.21)	0.75	0.15	内傾	sondage	○	31・36 史物出土		
13	SE 42	19M11-16	中世	IV-a層		(0.82)	(0.77)	(0.54)	(0.51)	0.26	0.71	内傾	sondage		SH2E-P43		
14	SK 13	21H10 21Z6-11	奈良時代	IV-a層	N-63°-W	2.67	1.26	2.26	1.02	0.16	0.85	横内傾	sondage	○	31		
14	SK 28	18N15		IV-a層		(1.14)	(0.42)	(0.19)	(0.07)	0.33	0.67	(内傾)	sondage				
14	SK 30	22M16-17	古代か	IV-a層	N-10°-E	(0.60)	(0.36)	(0.40)	0.20	0.13	1.08	横内傾	sondage				
14	SK 33	22K9	平安時代か	IV-a層		(1.14)	(0.69)	(0.28)	(0.23)	0.25	0.95	不整内傾	sondage	○	31		
14	SK 34	21L12-23	平安時代か	IV-a層	N-82°-E	1.18	0.88	0.90	0.58	0.16	0.82	直方傾	sondage	○			
9	SK 35	22K10 22L6	近世以降	IV-a層	N-6°-W	1.72	1.56	0.94	1.34	0.27	0.75	直方傾	sondage	○	35		
14	SK 37	19N6-7・12	中世	IV-a層	N-6°-W	(1.66)	(1.57)	(0.54)	(0.62)	0.36	0.60	不整内傾	sondage	○	35 丹沢の可能性を ある		
55	SK 40	20M4	中世	IV-a層	N-5°-W	(0.61)	(0.58)	(0.35)	(0.28)	0.25	0.67	内傾	sondage				
14	SK 44	19L12-13	中世	IV-a層		(1.47)	(1.43)	(1.06)	(1.12)	0.13	0.79	横内傾	sondage				
55	SK 62	21M1	中世	IV-a層	N-28°-E	(0.81)	(0.61)	(0.41)	(0.35)	0.12	0.83	横内傾	sondage				
55	SK 53	21L8-10	中世	IV-a層	N-13°-E	(0.68)	(0.49)	(0.39)	(0.21)	0.13	0.83	横内傾	sondage				
55	SK 57	20L17-22	平安時代か	IV-a層	N-12°-E	(0.69)	(0.58)	(0.51)	(0.47)	0.25	0.72	不整内傾	sondage				
55	SK 5	21K7	平安時代か	IV-a層	N-5°-E	(0.62)	(0.36)	(0.32)	(0.13)	0.10	0.86	直方傾	sondage	○			
55	SK 6	21K8	古代か	IV-a層	N-83°-E	0.50	0.38	0.38	0.19	0.06	0.98	内傾	sondage				
55	SK 7	21J4-5・9-10	近世以降	IV-a層	N-86°-W	3.40	1.58	1.28	0.38	0.73	0.32	直方傾	sondage	○	31		
55	SK 8	21J15 21K11	古代か	IV-a層	N-74°-E	1.37	0.56	1.21	0.41	0.07	0.94	直方傾	sondage	○			
55	SK 16	21J12	平安時代か	IV-a層							(0.09)	1.40	(直方傾)	(直方傾)	○	31	
55	SK 17	21J5	平安時代か	IV-a層		(1.07)	(0.69)	(0.67)	(0.56)	0.10	0.86	(不整形)	sondage	○			
55	SK 18	21J5	平安時代か	IV-a層	N-4°-E	(0.86)	(0.80)	(0.74)	(0.70)	(0.06)	1.10	(横内傾)	sondage	○	31		
55	SK 21	21N24 22N4	近現代	IV-a層		(3.22)	(0.50)	(0.95)	(0.31)	0.63	0.39	(内傾)	sondage				
55	SK 22	22N22-23	古代か	IV-a層		(0.88)	(0.83)	(0.29)	(0.20)	0.20	0.98	不整	(直方傾)				
55	SK 24	22N2-6・7	近現代	IV-a層	N-16°-E	2.15	2.09	0.81	1.19	(0.47)	0.39	不整形	sondage	○			
55	SK 32	21M11	平安時代か	IV-a層		(1.37)	(0.69)	(0.99)	(0.61)	0.19	0.80	不整形	sondage				
55	SK 46	21M11-12	平安時代か	IV-a層	N-84°-E	1.07	0.57	0.62	0.34	(0.42)	0.53	横内傾	sondage				
55	SK 47	21M12-13	平安時代か	IV-a層	N-86S-E	(1.90)	(1.49)	(1.09)	(0.83)	0.42	0.53	不整内傾	sondage		SN47-SIDE		
55	SK 48	20N1-2・6	中世	IV-a層	N-67°-E	(2.91)	(0.93)	(0.57)	0.02	0.08	0.86	不整形	sondage	○	35		
55	SK 51	21M7	中世	IV-a層		(1.15)	(0.80)	(0.80)	(0.31)	0.31	0.62	不整形	sondage				
55	SK 66	21L2	平安時代	IV-a層		(1.44)	(0.49)	(0.95)	(0.41)	(0.23)	0.73	(内傾)	sondage	○			
55	SK 58	18M8	古代～中世	IV-a層	N-21°-W	0.76	0.64	0.53	0.41	0.12	1.25	不整形	sondage	○			
8-9	SD 1	21J2 21K 21L 21M	平安時代	IV-a層	N-85°-E	(2.37)	0.96	(27.37)	0.50	0.19	1.00	直方傾	sondage	○	32		
8-9	SD 2	21J2 21L	平安時代	IV-a層	N-82°-E	(2.83)	0.87	(28.27)	0.56	0.14	0.86	直方傾	sondage	○	32		
8-9	SD 3	21J2 21L 21K 21L	平安時代	IV-a層	N-86°-E	(19.76)	0.98	(50.76)	0.65	0.21	0.83	直方傾	sondage	○	32		
9-16	SD 4	21J10 21K8-8	平安時代	IV-a層	N-81°-E	0.74	0.73	0.60	0.68	0.02	1.01	直方傾	sondage	○			
8-16	SD 11	21J15-16 21L6-8	平安時代	IV-a層	N-18°-W	0.98	1.07	0.69	0.60	0.29	0.90	直方傾	sondage	○	32		
10-16	SD 23	22N11-12・16-17-21-22	平安時代	IV-a層	N-2°-E	(4.80)	(1.90)	(4.80)	(0.87)	0.10	1.03	直方傾	sondage	○			
II-12	SD 29	19M8-10・12-14	古代	IV-a層	N-73°-E	(6.44)	(0.94)	(6.34)	(0.83)	0.13	1.25	直方傾	sondage				
11-16	SD 30	19M18-23 20M4-9	古代	IV-a層	N-22°-E	(5.92)	(0.58)	(5.70)	(0.36)	0.12	1.28	不整内傾	sondage				
10-16	SD 50	21M 21N	平安時代か	IV-a層	N-90°-E	(12.14)	(1.59)	(12.14)	(1.41)	0.10	0.84	直方傾	sondage				
9-16	SD 54	20L 21L	古代～中世	IV-a層	N-18°-W	(7.90)	(0.74)	(7.90)	(0.45)	0.11	0.84	直方傾	sondage				
8	F 9	21J12-13	平安時代	IV-a層	N-2°-E	0.46	0.18	0.46	0.15	0.32	0.78	内傾	sondage	○	P9+SD3 加古 川-横		
8	F 10	21J18	平安時代	IV-a層		(0.52)	(0.20)	(0.14)	(0.12)	0.20	0.68	内傾	sondage	○	P10+SD2 加 賀		
8	F 12	21J9-10	平安時代か	IV-a層		(0.44)	(0.28)	(0.22)	(0.18)	0.16	0.90	内傾	sondage	○	無古墳・難		
9	F 36	22K9	平安時代か	IV-a層		0.32	0.26	0.09	0.09	0.33	0.83	内傾	sondage	○	32 長塗		
9	F 45	22K14	平安時代	IV-a層		0.29	0.26	0.09	0.11	0.25	0.92	内傾	sondage	○	32 長塗		

別表2 三王山遺跡 3区主要遺構計測表

開発 No.	遺構	グリッド	時代	確認面	主方位	規模 (m)				底面 高さ (m)	形態		遺物 の 有無	遺物 回収状況	備考	
						上階		下階			上階		遺物 の 有無	遺物 回収状況	備考	
						長軸	短軸	長軸	短軸		平面	断面				
22	SE 9	13C1-6	中世	Ⅳ層		(1.92)	(1.84)	1.50	-0.59	(内傾)	sondage					
22	SE 28	11C17-22	古代～中世	Ⅳ層		0.44		1.34	0.18	(内傾)	sondage					
22	SE 30	12C19-20・24-25	中世	Ⅳ層	N-22°-W	(2.45)	2.01	1.44	-0.60	(横内傾)	sondage	○	38-40 史物は主に製品河上 SH20-SH36			
24	SE 31	12D16-21	中世	Ⅳ層												
23	SE 45	11C23 12C3-4	平安時代か	Ⅳ層		(2.72)		1.43	0.28	(内傾)	sondage	○	38-40 大網河上 SE45-SD51			
23	SE 95	12D1-6	平安時代	Ⅳ層	N-3°-E	2.60	(2.39)	1.93	0.66	(不整内傾)	sondage	○	38-39 SH35-SH45-SX341			
24	SE 96	12C25	中世	Ⅳ層		(1.46)	(1.22)	1.08	0.42	(内傾)	sondage	○	39 SH36-SH31			
24	SE 145	12D16-7-11-12	中世	Ⅳ層	N-18°-E	2.22	1.45	1.00	0.58	不整形	sondage	○	38 SH145-SH250-SD268			
24	SE 193	12D16-21	中世	Ⅳ層		(1.88)	(1.62)	1.04	0.36	(内傾)	sondage	○	38-39 SH193-SH31 SH193-SH31			
24	SE 283	13C6-7-11-12	中世	Ⅳ層	N-12°-E	(1.15)	0.53	0.80	0.00	(内傾)	sondage	○	38-39 SH193-SH31 SH193-SH31			

回路 No.	通過 路線	グリッド	時代	確認面	主導方位	規格 (m)		形状		適合 有無	適合 回路R	備考			
						上端		底面							
						長軸	短軸	深さ	(内形)						
25	SK 1	13B9		直線		(0.61)		(0.25)	(1.34) (斜側面) (直形)			SK1-P2			
25	SK 3	13B9		直線	N-21°-W	(1.00)		(0.23)	(1.38) (不整形) (直形)			SK3-P2			
25	SK 4	13B4 - 9		直線		(1.59)		(0.24)	(1.35) (内形) (直形)	○		SK4-SK3			
25	SK 5	13B9 - 10		直線	N-57°-E	0.59	0.44	0.05	1.45 (方形容) (直形)						
25	SK 11	12B24 - 25		直線		(0.61)	(0.26)	(0.17)	(1.44) (不整形) (直形)						
25	SK 12	12B20		直線		(0.42)	(0.27)	(0.31)	(1.39) (内形) (半内形)			SK12-SD21			
25	SK 13	12B25		直線	N-22°-W	0.49	0.41	0.20	1.30 (内形) (半内形)	○					
25	SK 14	12B25		直線				0.24	0.19	1.29 (不整形) (半内形)	○	SK14-P15			
25	SK 17	12B20 - 25		直線	N-72°-E	0.78	0.50	0.31	1.25 (内形) (半内形)	○		SK17-SK18			
25	SK 18	12B20		直線	N-71°-E	1.22	0.48	0.13	1.39 (不整形) (直形)			SK18-SK17 - P19			
25	SK 20	12B20		直線	N-74°-E	0.72	(0.41)	0.20	1.35 (不整形) (直形)			SK20-SD21 - P25			
25	SK 22	12B20		直線			(0.32)	(0.15)	(1.50) (不整形) (直形)			SK22-SK23			
25	SK 23	12C15		直線				0.40	(0.19)	(1.50) (不整形) (直形)			SK23-SK24		
25	SK 24	12B15		直線	N-80°-E	(0.70)	(0.67)	(0.46)	(1.21) (不整形) (半内形)			SK24-SK23			
25	SK 26	12B20		直線		(0.57)	(0.43)	0.14	1.38 (不整形) (直形)	○		SK26-SK27 - P24			
25	SK 27	12B20 12C16		直線	N-04°-E	(2.12)	(0.36)	0.14	1.38 (不整形) (直形)			SK27-SK26 12C27-P94			
25	SK 35	12B10 - 15		直線	N-25°-W	0.73		0.32	1.34 (内形) (半内形)			SK35-P165 SK35-SK36			
25	SK 36	12B15		直線	N-25°-W	0.52	0.40	0.19	1.34 (不整形) (直形)			SK36-SK35			
25	SK 37	11B9 - 10		直線		0.50	(0.20)	(0.27)	(1.41) (内形) (直形)						
26	SK 42	11C21		直線	N-9°-W	0.50	0.37	0.37	1.18 (直形容) (半内形)			SK42-P173			
26	SK 43	11C16		直線				0.36	0.14	1.15 (内形) (半内形)			SK43-SK44		
22	SK 44	11C16		直線		1.00		0.06	1.46 (不整形) (直形)	○		SK44-SK43			
26	SK 46	12C26		直線			(0.95)	0.39	1.13 (直形容) (直形)			SK46-SK34 - P64 - P195 - P234			
26	SK 47	12C1		直線	N-68°-E	1.17	0.85	0.12	1.42 (不整形) (直形)	○	39	SK47-SK48 SK47-P170			
26	SK 48	12B9 12C1		直線	N-48°-E	1.40	0.65	0.34	1.12 (不整形) (直形)			SK48-SK49 SK48-SK47-P126			
26	SK 49	12B9 12C1		直線	N-22°-W	1.12	0.58	0.12	1.43 (不整形) (半内形)	○		SK49-SK48 SD41			
26	SK 50	12C1 - 2		直線		1.48		0.58	0.94 (不整形) (直形)	○	39	SK50-P222 SD51			
26	SK 52	12C2 - 3		直線	N-72°-E	1.23	1.10	0.44	1.11 (不整形) (直形)			SK52-P223			
26	SK 53	12C7		直線	N-75°-W	1.55	0.86	0.41	1.12 (内形) (半内形)	○		SK53-P94 - P224			
26	SK 55	12C7		直線	N-82°-E	(0.44)	0.44	0.55	1.02 (方形容) (直形)			SK55-SK56			
26	SK 56	12C7		直線	N-82°-E	0.80	0.50	0.04	1.52 (不整形) (直形)			SK56-SK55			
26	SK 57	12C7		直線	N-71°-W	0.48	0.42	0.29	1.31 (方形容) (半内形)			SK57-P98			
27	SK 59	12C12	現代	直線	N-16°-W	1.02	0.88	0.31	1.26 (不整形) (直形)	○	39	SK59-P539 SK59-SK338 - SD21			
27	SK 61	12C16 - 17		直線	N-73°-E	0.87	0.32	0.07	1.43 (内形) (直形)						
27	SK 62	12C17		直線	N-77°-E	0.61	0.42	0.18	1.26 (方形容) (直形)	○	39	SK62-P603			
27	SK 65	12C17		直線		0.61	0.35	0.08	1.48 (内形) (直形)			SK65-SK66			
27	SK 66	12C17		直線		(0.32)	0.38	0.16	1.41 (直形) (直形)	○		SK66-SK65			
27	SK 67	12C17 - 18		直線	N-89°-W	0.80	0.74	0.22	1.26 (不整形) (直形)	○					
27	SK 68	12C18		直線	N-83°-W	0.57	(0.72)	0.16	1.42 (不整形) (直形)						
27	SK 69	12C13 - 18		直線	N-82°-E	(1.35)	(0.70)	0.19	1.36 (不整形) (直形)	○		SK69-SK70 SK69-P148			
27	SK 70	12C13		直線	N-84°-E	0.98	0.39	0.09	1.46 (不整形) (直形)			SK70-SK69			
27	SK 77	12C14 - 15		直線	N-58°-E	0.78	0.37	0.07	1.50 (不整形) (直形)			SK77-P576			
27	SK 80	12C8 - 13		直線	N-18°-W	0.62	0.39	0.07	1.50 (内形) (直形)			SK80-P144			
27	SK 83	12C7 - 8		直線	N-17°-W	1.13	1.01	0.12	1.48 (不整形) (直形)	○		SK83-SK83.5 SK83-SK84			
27	SK 84	12C8		直線	N-71°-E	0.98	(0.71)	0.59	0.96 (内形) (直形)			SK84-SK337 SK84-SK85			
27	SK 86	12C8		直線		(0.44)	0.36	0.11	1.48 (内形) (直形)	○		SK86-SK85			
33	SK 90	12C4		直線		0.56	(0.14)	(1.47)	(不整形) (直形)			SK90-SK97			
33	SK 97	12C4		直線			(0.56)	(0.20)	(1.44) (不整形) (直形)	○		SK97-SK92			
28	SK 229	12C4 - 5 - 9 - 10		直線	N-42°-E	0.66	0.29	0.29	1.30 (不整形) (半内形)			SK229-SK229			
28	SK 251	12D12		直線	N-9°-W	(0.93)	(0.74)	0.07	1.55 (不整形) (直形)	○		SK251-SK250 - SK276			
28	SK 253	12C12		直線	N-16°-W	0.56	0.44	0.23	1.39 (不整形) (半内形)	○		SK253-SK252			
28	SK 257	12D13		直線	N-11°-W	1.32	0.85	0.09	1.50 (方形容) (直形)						
28	SK 263	12D18		直線	N-54°-E	0.81	0.44	0.09	1.50 (内形) (直形)	○		SK263-P563			
28	SK 276	12D12		直線	N-35°-E	0.61	0.51	0.05	1.61 (不整形) (直形)			SK276-SK251			
30	SK 317	13B6		直線	N-54°-E	0.82	(0.57)	0.29	1.21 (内形) (直形)	○		SK317-P115			
26	SK 335	12C6		直線				0.38	0.38	1.16 (内形) (直形)			SK335-SK46 SK335-P336		
27	SK 337	12C8		直線	N-71°-E	0.59	0.52	0.14	1.44 (内形) (直形)			SK337-SK385			
27	SK 338	12C12		直線		(0.88)	(0.82)	0.63	0.94 (内形) (直形)	○		SK338-SK59 - P239			
19	SK 72	12C13		直線		(0.81)	(0.62)	0.14	1.44 (不整形) (直形)			SK72-P723			
19	SK 94	12C8 - 10		直線	N-77°-W	0.97	0.67	0.09	1.50 (不整形) (直形)	○					
19	SK 243	12D7 - 8		直線		0.78	0.64	0.09	1.54 (不整形) (直形)			SK243-SK244			
19	SK 244	12D8		直線		(0.94)	0.89	0.10	1.70 (内形) (直形)	○		SK244-SK243			
19	SK 341	12C5		直線				1.16	0.15	1.46 (不整形) (直形)			SK341-SK355		
20	SK 342	12D9 - 14		直線		(1.05)	0.66	0.20	1.25 (不整形) (直形)						
20	SK 343	12D9 - 10		直線				0.55	0.50	0.20	1.25 (内形) (直形)				
18 - 28	SD 7	12C22 - 23 13B5 13C1 - 2	現代	直線	N-72°-E	(5.67)	0.51	0.15	1.26 (直形)	○	39	SD7-P116			
18 - 28	SD 8	12C21 - 22 - 23 13B5 13C1		直線	N-72°-E	(5.87)	0.80	0.18	1.24 (直形)	○		SD8-113			
18 - 28	SD 10	12C21 - 22		直線	N-67°-E	(2.25)	(0.88)	0.16	1.27 (直形)			SD10-SD102			
18 - 28	SD 16	12B25 12C21		直線	N-72°-E	(2.22)	(0.86)	0.17	1.26 (直形)	○					
19 - 25	SD 21	12B15 - 20 12C11 - 12 - 13	現代	直線	N-70°-E	(7.06)	0.64	0.20	1.35 (直形)	○		SD21-SK12 - P255 SD21-SK59			
19	SD 32	12C16		直線	N-65°-W	1.02	0.27	0.13	1.35 (直形)	○					

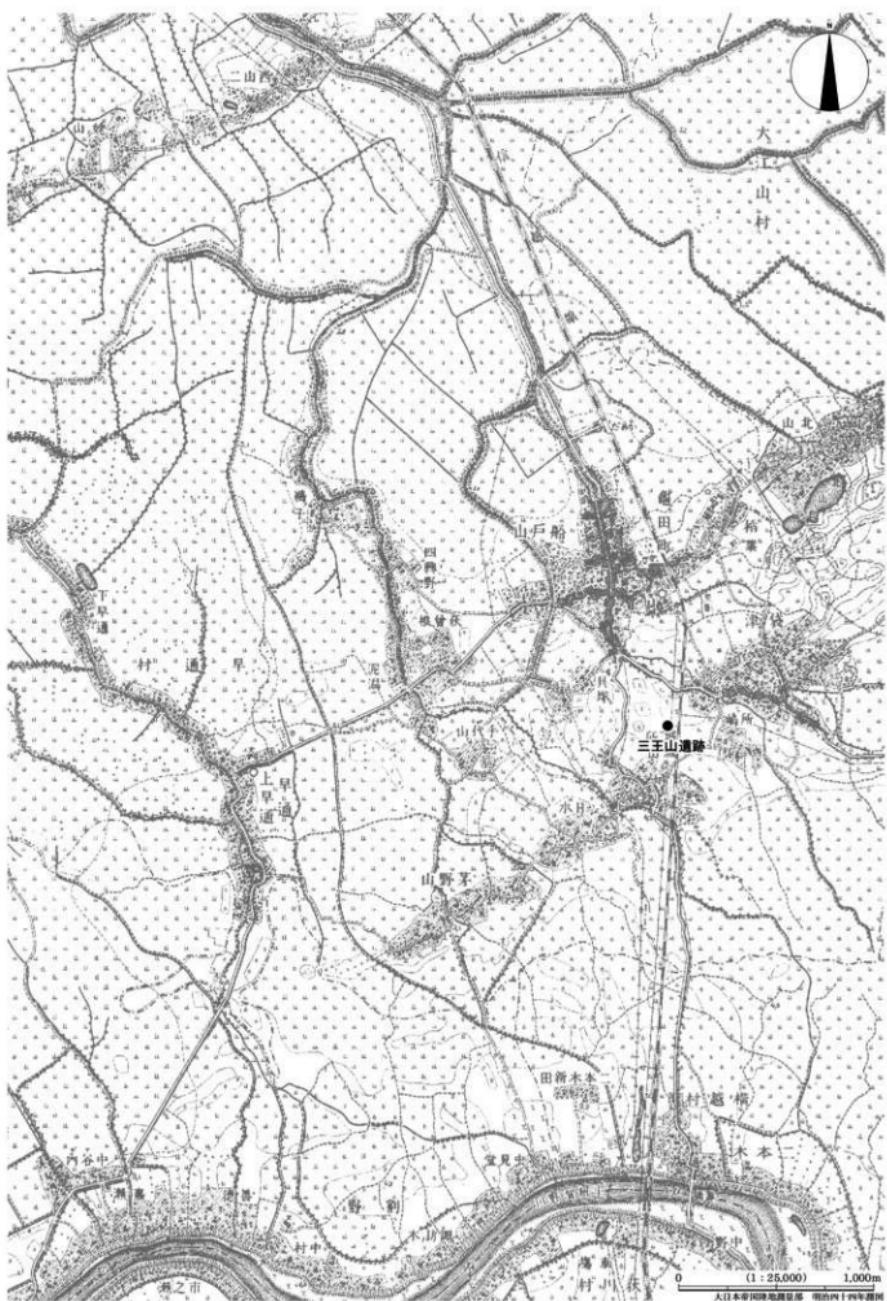
別 表

固有 No.	通称	グリッド	時代	確認面	主軸方位	規模 (m)		底面 標高 (m)	形態		植物 有無	遺物 回収R	備考
						上端	下端		上端	下端			
19	SD 33	12C16 - 17		直壁	N-73° - E (1.31)	0.26	0.13	1.21	-	直形	○	SD33-P319	
19	SD 40	11B25 11C2 11B25	近現代	直壁	N-70° - E (2.14)	0.27	0.08	1.48	-	直形	○	SD41-SK49 SD40-P29 + SD41	
19	SD 41	11C21 12C1		直壁	N-70° - E (2.41)	0.59	0.17	1.39	-	直形	○	SD41-SK49 SD40-P38 - P29 - P2 15 - P221	
19 - 26	SD 51	12C3 - 3		直壁	N-73° - E (2.06)	0.45	0.19	1.26	-	直形	○	SD51-SK51 SD51-SK50	
19 - 27	SD 76	12C14		直壁	N-82° - W (2.03)	0.62	0.14	1.43	-	不整形	○	SD76-SK77	
19 - 28	SD 85	12C3 - 8		直壁	N-11° - W (2.61)	0.55	0.18	1.42	-	直形	○	SD85-SK85 SK84 SD85-SE45	
19 - 28	SD 88	12C4		直壁	N-02° - E (2.45)	0.45	0.27	1.22	-	半円形	○	SD88-P97 - P99 - P225	
19 - 28	SD 92	12C4 - 5		直壁	N-1° - E (2.10)	0.74	0.19	1.40	-	直形	○	SD00-490 P227 - P228 - SK229 - B K253	
19 - 28	SD 102	12C 17 - 21 - 22		直壁	N-57° - E (1.05)	0.40	0.12	1.30	-	直形	○	SD102-SD10	
21 - 28	SD 250	12D12 - 17		直壁	N-8° - W (2.98)	0.53	0.08	1.55	-	直形	○	SD250-SE145	
21	SD 268	12D17 - 8		直壁	N-45° - E (1.86)	0.75	0.38	1.25	-	直形	○	SD268-SK145 + SK244	
21	SD 269	12D26 - 11 - 12C10 - 15		直壁	(2.92)	0.40	0.21	1.46	-	(直形)			
20 - 28	帆状遺構	13C10-11 13D06 - 9 11 ~ 14	近現代	直壁	N-65° - E (1.50)	0.201	0.15	1.40	-	直形	○	39	
18	P 19	12B26		直壁	0.25	0.22	0.15	1.38	-	(残形)	○	P19-SK18 近世陶器	
19	P 29	12B10 12C6		直壁	0.32	0.30	0.14	1.41	内円形	直形	○	PS4-SK26 無白陶	
19	P 34	12B26		直壁	0.60	0.36	0.66	1.08	(内円形)	残状	○	PS4-SK26 無白陶	
19	P 64	12C12		直壁	0.69	0.42	0.46	1.10	不整形	残状	○	40 長便・盤上窓	
19	P 74	12C13		直壁	0.39	0.35	0.28	1.29	方形容	直形	○	P74-P73 無白陶	
19	P 75	12C13		直壁	0.48	0.22	0.14	1.42	不整形	直形	○	長便	
19	P 91	12C4		直壁	N-0° (0.43)	0.09	0.30	1.29	方形容	(半円形容)	○	P91-S108 無白陶・小便	
18	P 111	13C2		直壁	0.31	0.28	0.38	1.03	円形容	直形	○	長便	
19	P 119	12C22 - 23		直壁	0.41 (0.20)	0.31	1.12	(方形容)	(方形容)	○	P119-SK26 近世陶器・礪		
19	P 116	12C22		直壁	(0.26)	0.28	0.10	1.22	(内円形)	直形	○	礪	
19	P 130	12C16		直壁	0.38	0.34	0.15	1.37	方形容	直形	○	長便・礪	
19	P 144	12C6		直壁	0.24	0.19	0.29	1.30	(円形容)	直形	○	P144-SK30 長便	
19	P 150	12C14		直壁	0.21	0.20	0.10	1.48	方形容	直形	○	P150-P149 無白杯	
19	P 159	12C24		直壁	0.30	0.25	0.21	1.08	円形容	直形	○	39 無白杯	
19	P 170	12C1		直壁	0.38	0.28	0.52	1.04	(方形容)	(方形容)	○	39 P170-SK47 無白陶・長便	
19	P 176	12C14		直壁	0.40	0.28	0.43	1.13	内円形容	直形	○	近世陶器	
19	P 194	12D16		直壁	0.58	0.43	0.68	1.52	不整形	直形	○	無白陶	
19	P 195	12C6		直壁	0.49	0.38	0.56	0.97	内円形容	直形	○	P195-SK45 無白杯・無白筒	
21	P 203	12D22		直壁	0.28	0.27	0.08	1.45	不整形	直形	○	近世陶器	
19	P 222	12C1		直壁	0.36	0.28	0.40	0.66	方形容	偏多孔	○	SK222-SK350 箱蓋・無白陶・長便・礪	
19	P 225	12C3 - 4		直壁	0.34 (0.43)	0.19	1.43	(残形)	直形	○	P225-SK37 近現代陶器		
19	P 230	12C10		直壁	0.35	0.33	0.08	1.51	不整形	直形	○	P230-P231 無白陶	
21	P 249	12D12		直壁	0.37	0.39	0.34	1.26	内円形容	直形	○	P249-P231 近世陶器	
21	P 248	12D14		直壁	0.58	0.31	0.32	1.22	内円形容	半円形容	○	P248-SK343 近現代陶器	
21	P 254	12D18		直壁	0.44	0.38	0.29	1.26	内円形容	半円形容	○	39 黒志呂甕・無白陶・屋形物	
21	P 264	12D18		直壁	0.48	0.34	0.10	1.51	内円形容	直形	○	無白陶	
21	P 270	12D11		直壁	0.28	0.28	0.11	1.48	不整形	直形	○	無白陶	
21	P 272	12D22		直壁	0.27 (0.14)	0.16	1.41	(円形容)	直形	○	39 レンシキにより一部少 漆器品		
19	P 280	12B26		直壁	0.26	0.25	0.27	1.29	内円形容	直形	○	P280-SO21 長便	
20	P 285	12D17		直壁	0.34	0.30	0.26	1.24	円形容	直形	○	長便・珠洲焼・枝石	
20	P 311	13C10.15	近現代陶	直壁	0.32	0.23	0.12	1.27	円形容	直形	○	近現代陶器	
20	P 318	13D2		直壁	0.34	0.23	0.18	1.33	方形容	直形	○	近現代陶器	
19	P 331	12C20		直壁	0.28	0.26	0.06	1.52	(方形容)	(方形容)	○	39 P331-P331 球泡燒	
19	P 336	12C6		直壁	(0.44)	0.422	0.79	0.78	(残形容)	(残形容)	○	P336-SK335 無白陶・長便	

図 版

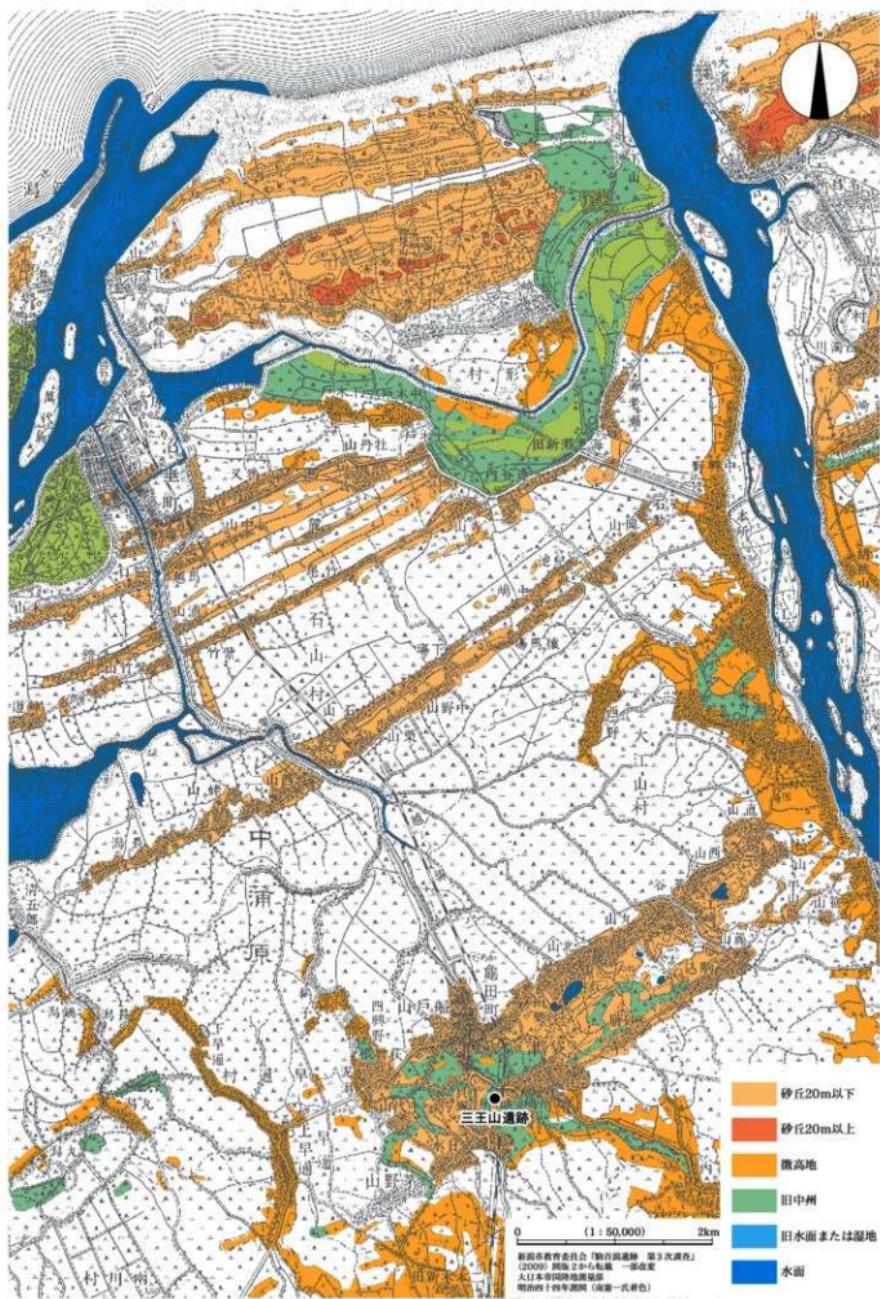
周辺の旧地形図 (1/25,000)

図版 1



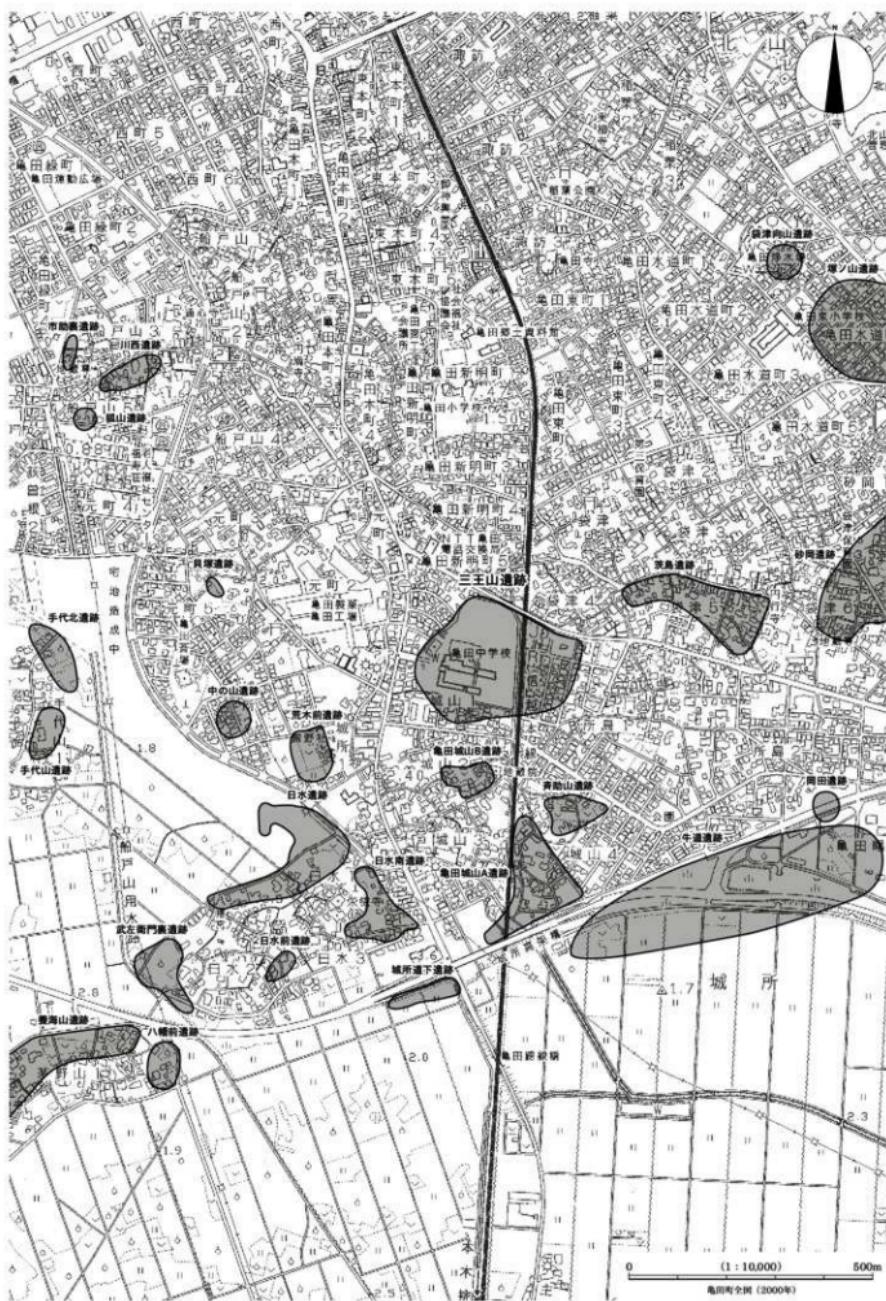
图版 2

周辺の旧地形図（1/50,000）



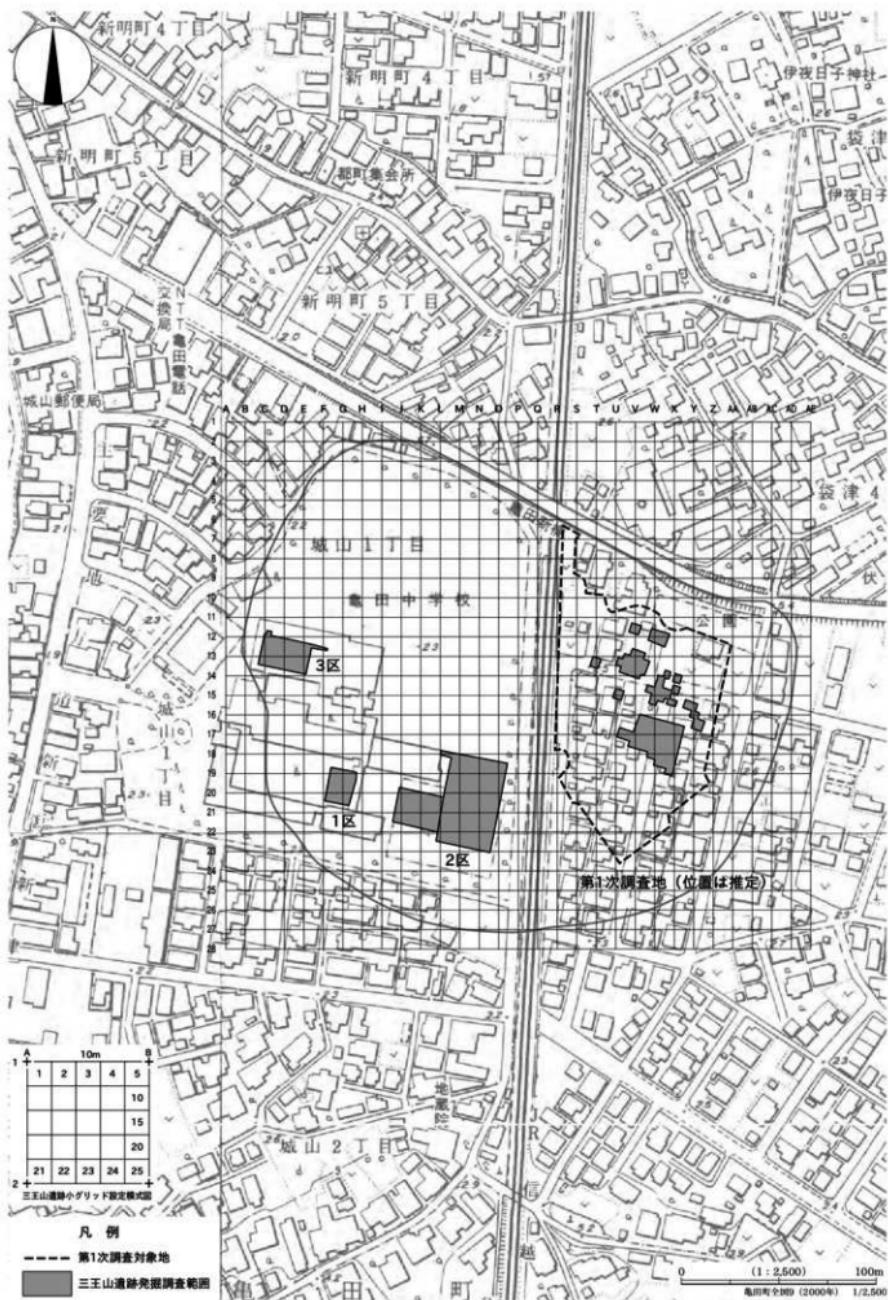
遺跡周辺図

图版 3



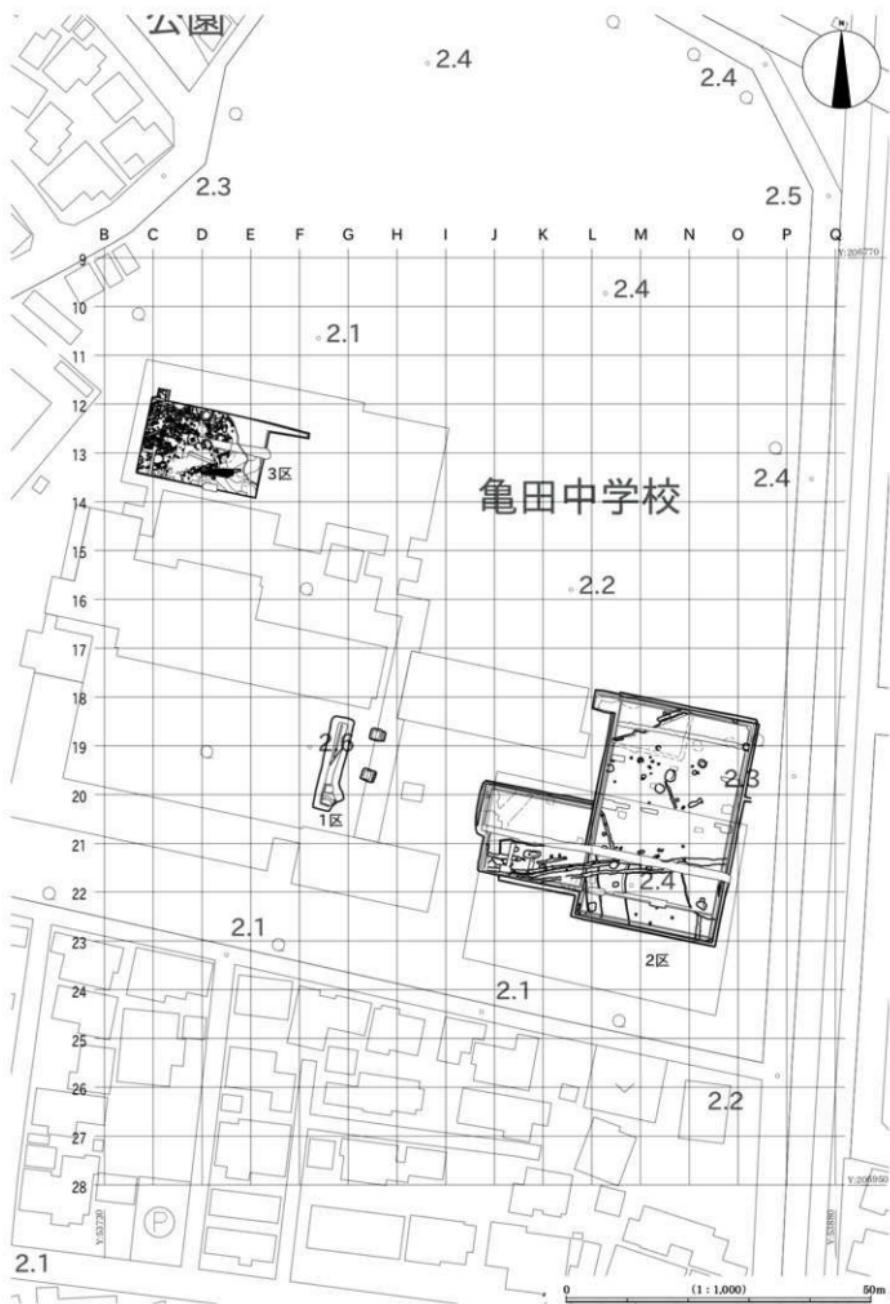
圖版 4

グリッド設定図 (1/2,500)



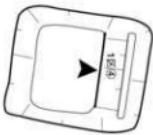
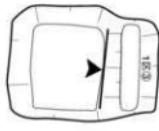
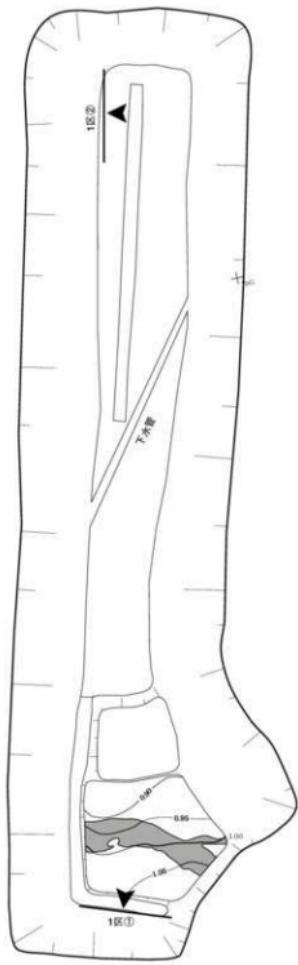
1~3区遺構平面図 (1/1,000)

圖版 5



N
X:200000
Y:311710
Z:150

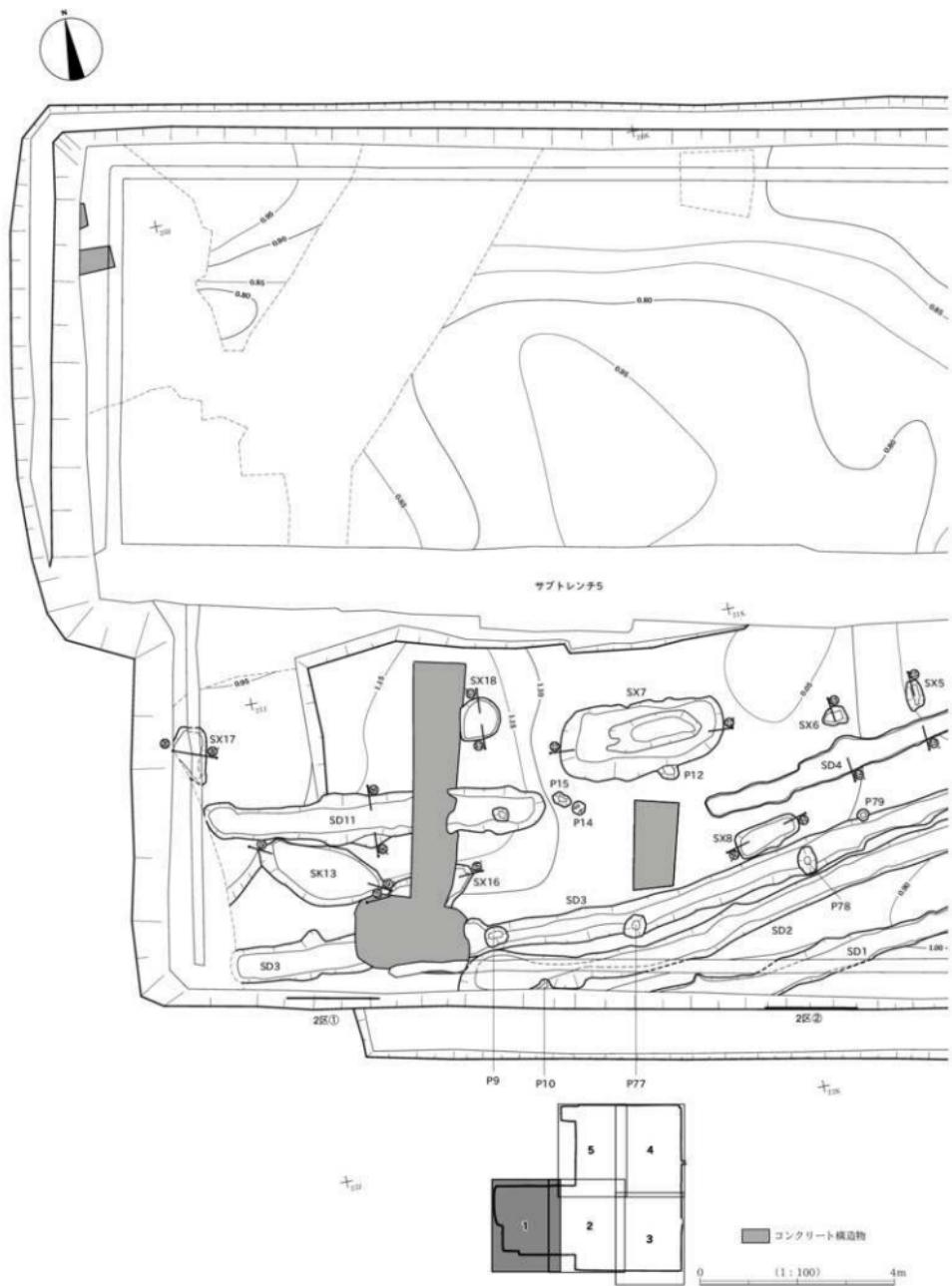
N
X:200000
Y:311710
Z:150



+
100

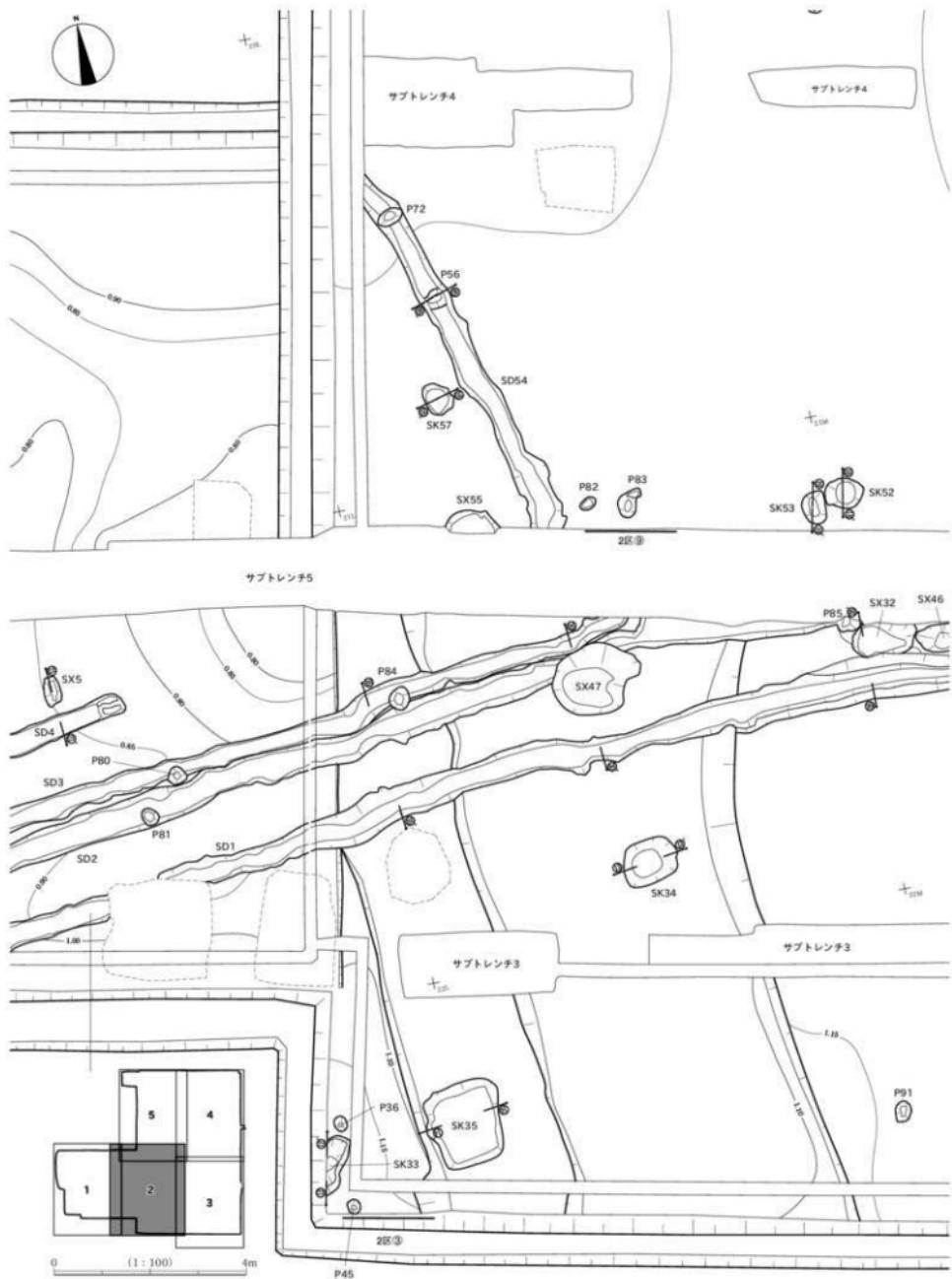
+
100

■ 噴砂痕
0 (1 : 100) 4m
N
X:200000
Y:311710
Z:150



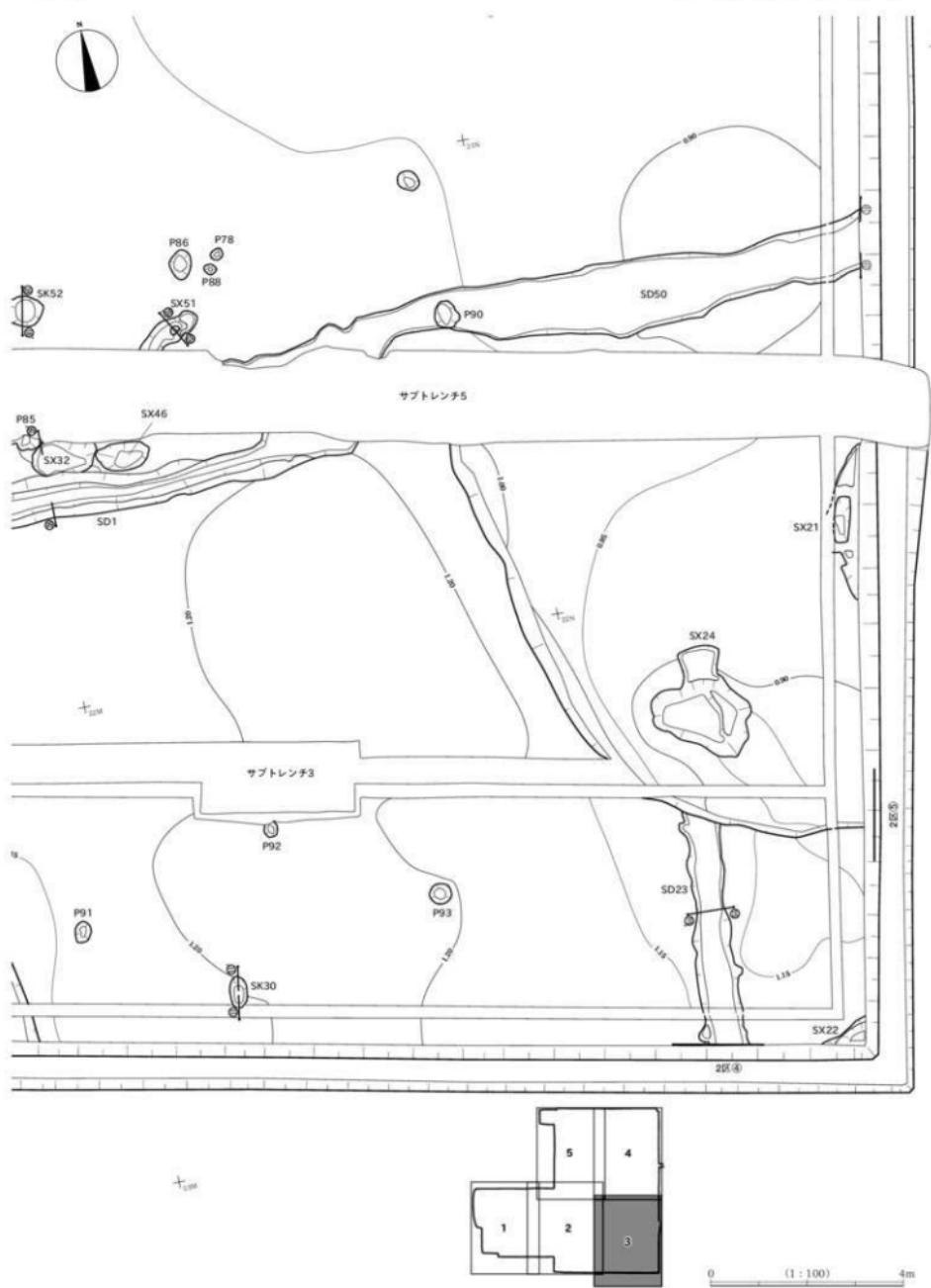
2区 遺構平面部分図2 (1/100)

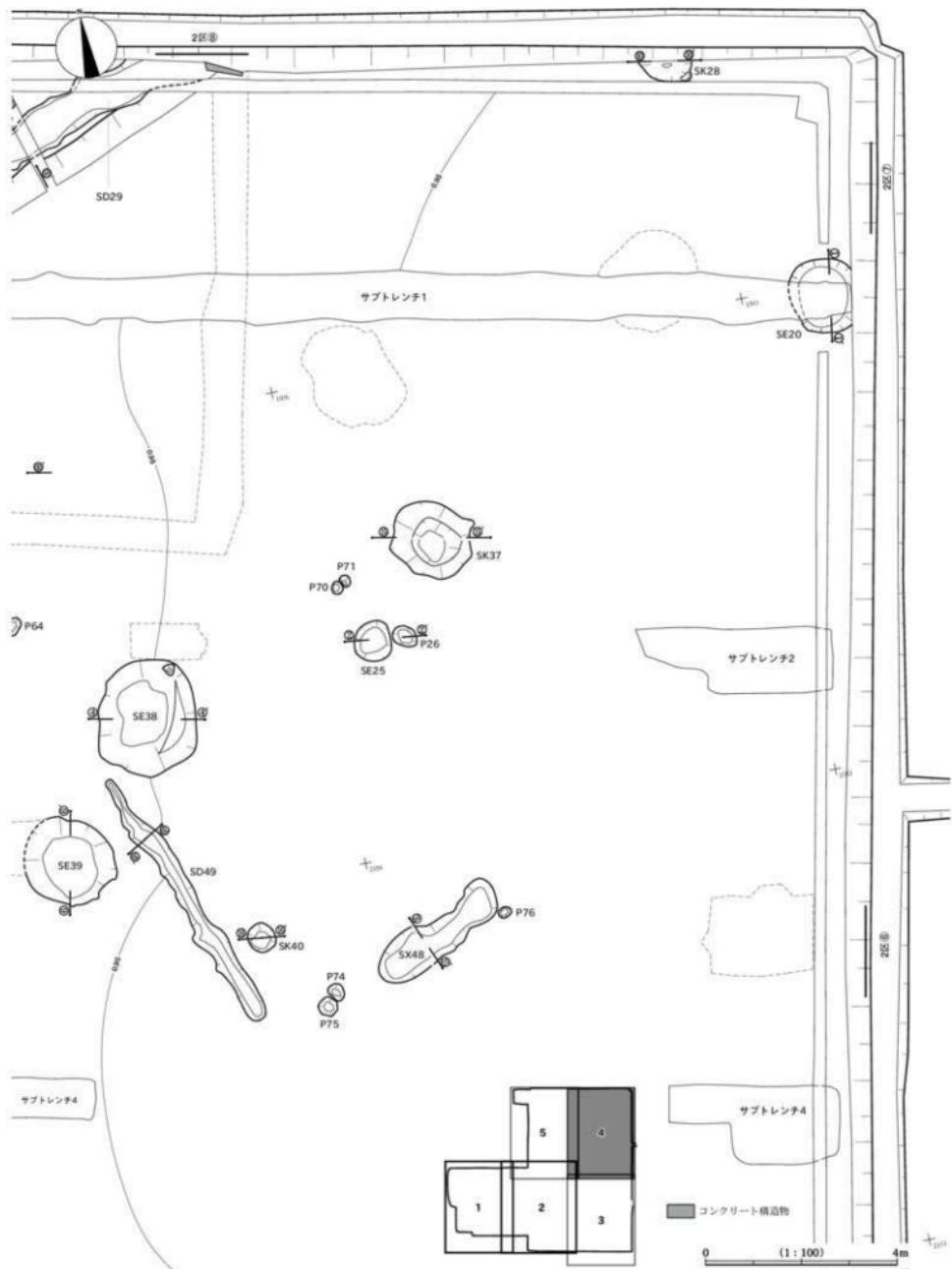
図版9



図版 10

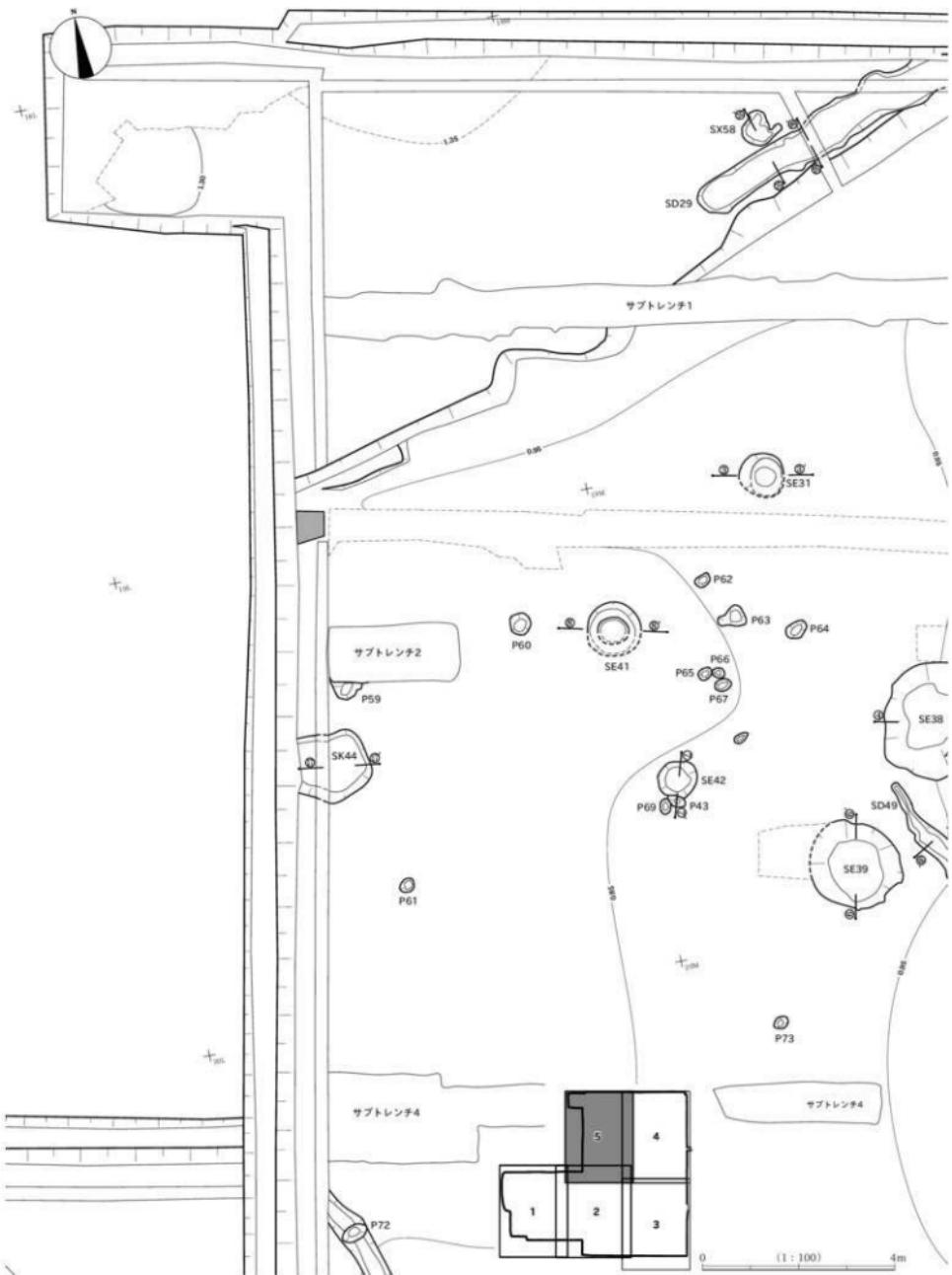
2 区 遺構平面部分図 3 (1/100)

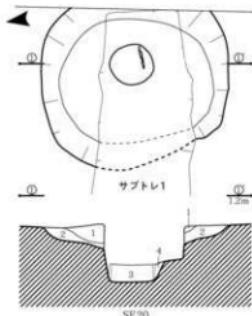




図版 12

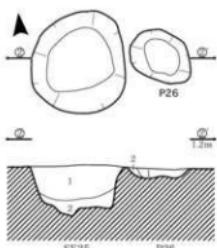
2 区 遺構平面部分図 5 (1/100)



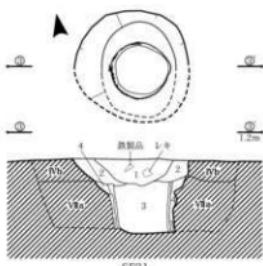


SE20

- 1.周辺シルト：(10)85(1) 軟性わざがめあり。しまりややあり。マーブル状に黑色磨合土層が含まれる。
- 2.周辺シルト：(10)86(1) 軟性わざがめあり。しまりややあり。化物層が少量含まれる。
- 3.灰質灰色砂岩：(10)86(2) 軟性なし。しまりわざがめあり。
- 4.灰質灰色砂岩：(10)86(3) 軟性なし。しまりややあり。堅質土が少量入る。



SE25
1.暗赤黄色シルト (E55Y5/2) 細粒わざかにあり、しまりややあり。黒色斑点がマーブル状に入る。
2.暗赤色シルト (E55Y5/2) 細粒わざかにあり、しまりややあり。黒色斑点がマーブル状に入る。



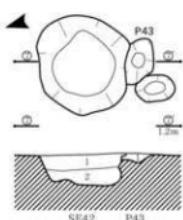
SE31

1.蒸留炭シルト (10YR3/2) 鮎性ややあり。しまりややあり。微生物が少入る。

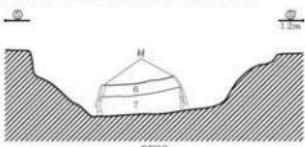
2.蒸留炭シルト (10YY4/7) 鮎性かざかにあり。しまりややあり。極少菌微生物が入る。

3.蒸留炭シルト (10YY5/3) 鮎性ややあり。しまりややあり。

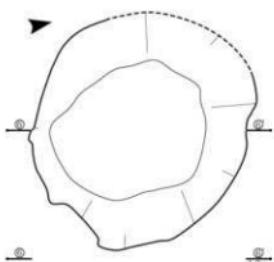
4.粗開発炭シルト (10YY5/1) 鮎性ややあり。しまりややあり。VGA評議会と健太郎が入る。



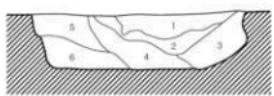
SE38	SE38
1.素地色シート [TOYV5/6]	粘性なし。しまりややあり。薄茶色地紙 [TOYHA/1] 上彩色紙 [T-38/6] が糊紙に入る。
2.黒刷毛筆紙 [TOYV2/2]	粘性あり。中身あり。
3.白刷毛筆紙 [TOYV3/1]	粘性あり。しまりややあり。
4.黒刷毛筆紙 [TOYV4/1]	粘性あり。しまりややあり。
5.黒刷毛筆紙 [TOYV4/2]	粘性あり。しまりややあり。黑色地紙上プロック入る。
6.朱刷毛筆紙 [TOYV1/1]	粘性なし。しまりなし。新土丸上。
6.オリジン黒刷毛筆紙 [TOYV1/2]	粘性なし。しまりなし。
7.オリジン黒刷毛筆紙 [TOYV2/2]	粘性なし。しまりややあり。6巻に比べて刷毛質が少し異なる。



SERS



	SE39
SE39	
1.用語面影シルト (10V006/6)	粘性なし。しまりややあり。2層の粘性シルトブロック层。砂。
2.砂質粘土 (10V007/6)	粘性やあり。しまりややあり。2層の砂質シルトブロック层。
3.砂質粘土 (10V007/2)	粘性やあり。しまりややあり。2層と3層 (底質粘土)。底質粘土のラミ状構造。
4.	
5.山に沿う砂質面影シルト (10V007/3)	粘性やあり。しまりややあり。風景シルト (10V007/3)。粘性ややあり。しまりややあり。



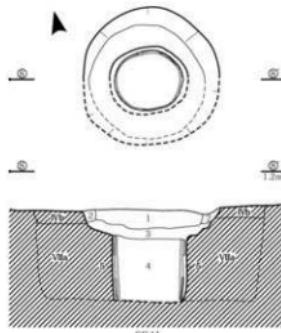
5E42 1.油細色シルト (10YR2/2)	粘性あり。しまりややあり。
5E43 2.油褐色シルト (2.5YR6/3)	粘性あり。しまりあり。底泥色暗褐 (2.5YR6/3) シルトブロック30%弱。



P43
3. 面接色シート (10YR8/2) 柔性あり。しまりあり。面接色シートブロックを組み立てる。

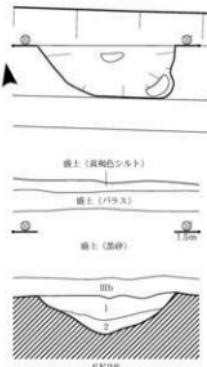
圖版 14

2区 遺構実測図 2 (1/40)



2641

- 黒斑シキト (BOVY1/1) 黒色や少し白い、しまりやありあり。マーブル状にVb6斑青斑白斑が入る。
2.黒斑糞斑土墨 (BOVHT/3) 黒色や少し白い、しまりやありあり。Vb6斑青斑白斑が入る。
3.黒斑糞斑シロ (BOVHS/1) 黒色あり、しまりやありあり。Vb6斑青斑白斑が入る。
4.黒糞斑青脚土墨 (BOVZB/2) 黒色あり、しまりやありあり。Vb6斑青斑白斑が入る。
5.黒糞青黄シキト (BOVY4/2) 黒色や少し白い、しまりやありあり。マーブル状にVb6斑青斑白斑が入る。



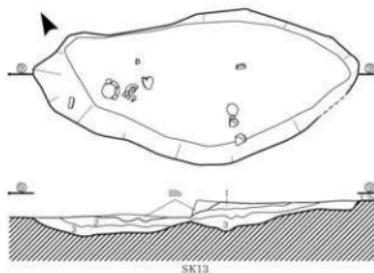
6429

- エコリーブシート（GV6/2） 肌触りややあり。しまりややあり。黒色
底色も黒がツバキ模様に入る。
エコリーブ裏シート（GV6/1） 肌触りわざかにあり。しまりややあり。
底色はツバキ模様に入る。



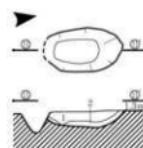
1032

- 上塗用色シート (D10V1C/2)
三塗用色シート (D3YH4/2)



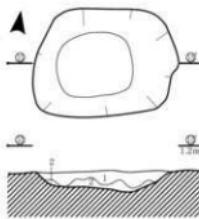
3312

- | | | |
|---------|----------------------|--|
| 3.8.1.2 | ■黒青色シルト (10YR5/2) | 鮮やかさがあり。しまりあり。褪化物が少進る。 |
| | ■黒褐色シルト (10YR5/2) | 鮮やかさにあり。しまりややあり。褪化物を多く含む。遺物（古用）が進化される。 |
| | ■にやけ黒褐色シルト (10YR5/2) | 鮮やかさにあり。しまりあり。褪化物が少進る。 |



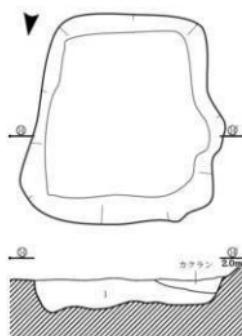
303

- SK30
主眼黒色シート (228Y4/2) 精性むずか
やうあり。
多く見る。
2番白色シート (537/2) 精性あり。

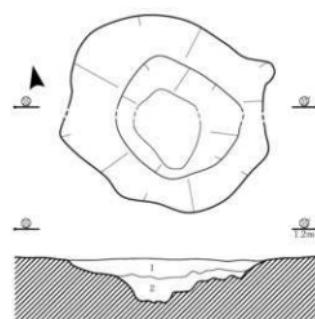


SAC34

- 上:オリーブ墨シルト (BY3/1)
下:琥珀オリーブシルト (BY6/2)

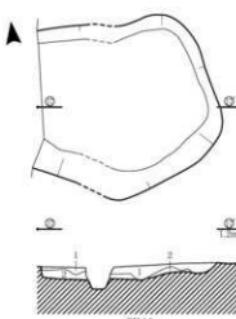


- SK35
上に深い黒褐色シート(10Y9R4/3) 着脱がかなりあり。しまりあり。
左側縫合部膨らみ。



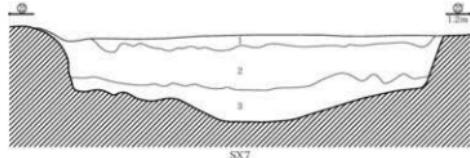
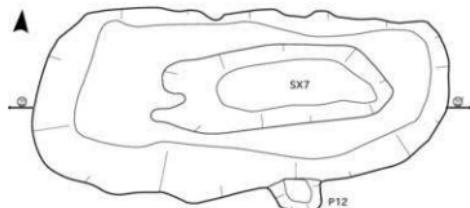
100

- SK37
1.底灰黄色シルト (2.5Y5/2) 著然わざかにあり。しまりややあり。黑色縮糸層がマーブル状に入る。
2.灰(黄色縮糸土層 (2.5Y5/2) 著然なし。しまりややあり。Viva層上に若干の黒縞模様)

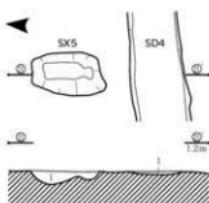


104

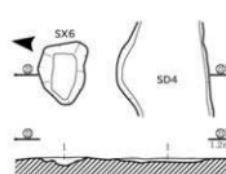
- SK-64**
1.玉頭色粘土 (10V3/2)
2.玉頭黃色砂 (2.5V3/2)



SX7
1.黒褐色シルト (10YR3/3) 粘性中やあり。しまりややあり。固形物が少量含まれる。左壁土がブロック状に入る。
2.黒褐色シルト (10YR3/3) 粘性ややあり。しまりややあり。固形物が少量含まれる。右壁土がブロック状に入る。
3.黒褐色シルト (10YR3/3) 粘性ややややあり。しまりややあり。固形物がマーブル状に入る。

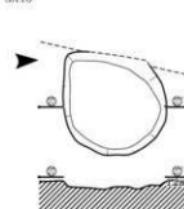
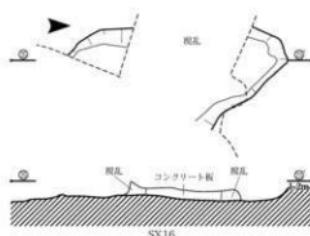


SX5
1.灰青褐色シルト (10YB4/2) 粘性わずかにあり。しまりややあり。
2.緑色シルト (10YB4/2) 粘性わずかにあり。しまりややあり。

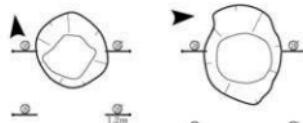


SX6
1.灰青褐色シルト (10YB4/2) 粘性わずかにあり。しまりややあり。
2.緑色シルト (10YB4/2) 粘性わずかにあり。しまりややあり。V面土がマーブル状に入する。

SD4
1.灰青褐色シルト (10YB4/1) 粘性わずかにあり。しまりややあり。
2.緑色シルト (10YB4/1) 粘性わずかにあり。しまりややあり。

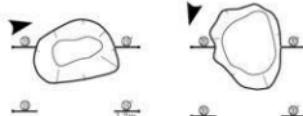


SX17
1.黄褐色シルト (25Y4/1) 粘性中やあり。しまりややあり。固形物が少量入る。



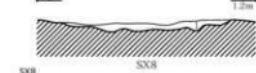
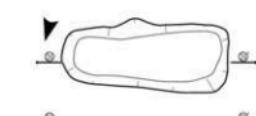
SK40
1.灰青褐色シルト (2.5Y5/2) 粘性ややあり。しまりややあり。右壁土がマーブル状に入る。

SK52
1.黒色シルト (10YR2/1) 粘性ややあり。しまりあり。右壁土 (2.5Y5/1) ブロック多量。マーブル状。

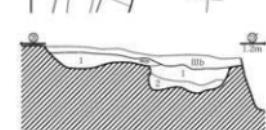
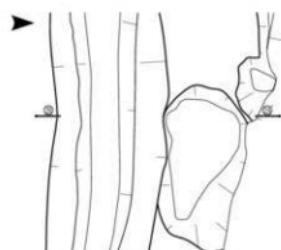


SK53
1.黒色シルト (10YR2/1) 粘性ややあり。しまりややあり。

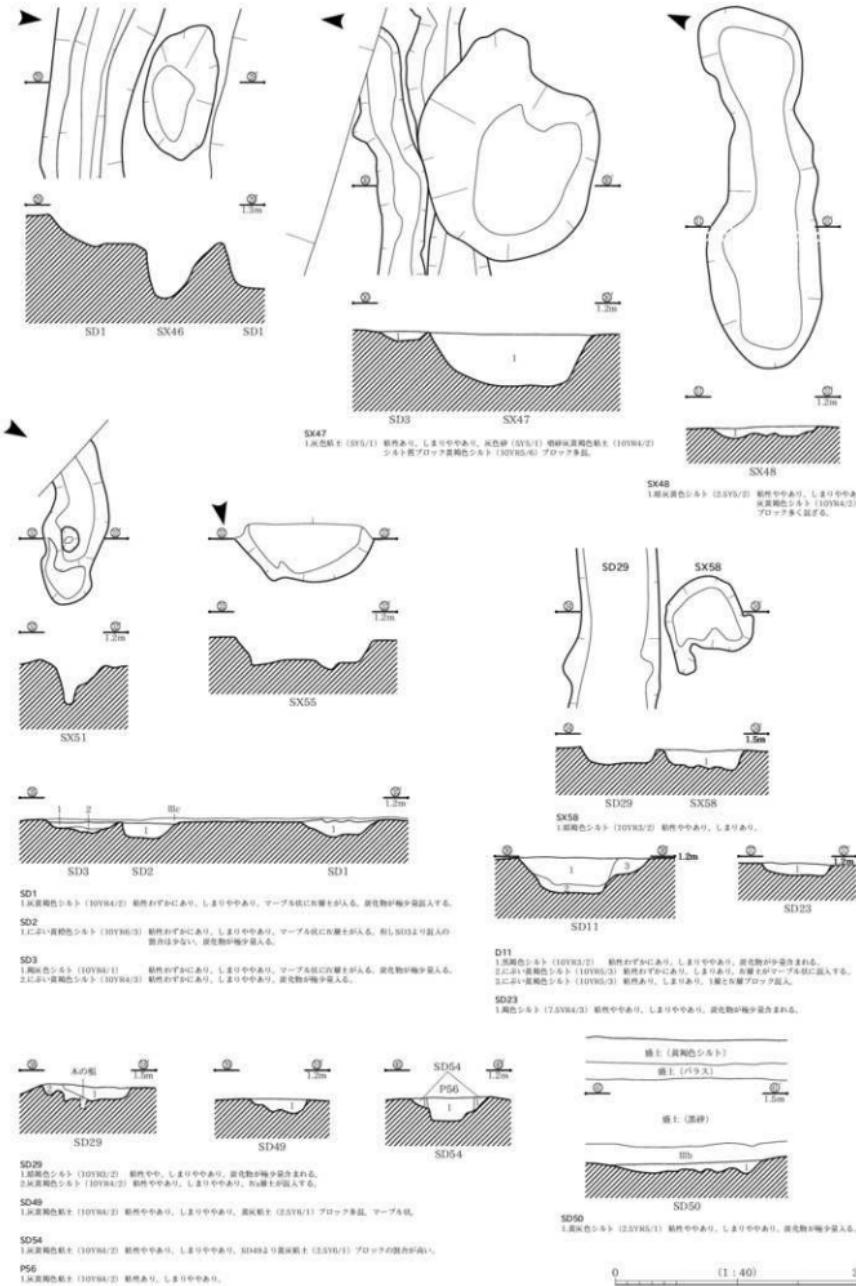
SK57
1.灰青褐色シルト (2.5Y4/2) 粘性ややあり。しまり中やあり。固形物が少量含まれる。
2.黒色シルト (2Y4/1) 粘性ややあり。しまりややあり。



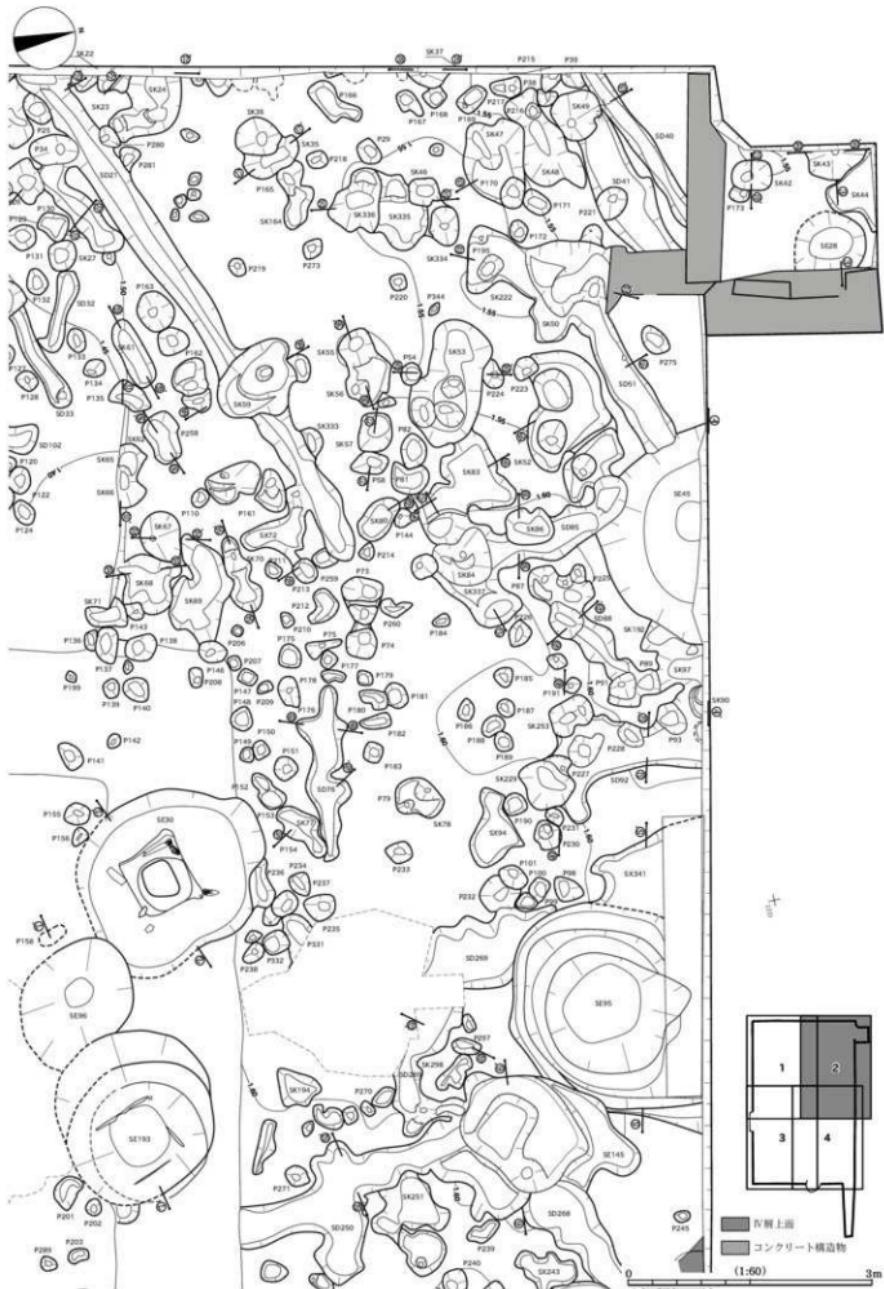
SK8
1.灰青褐色シルト (10YB4/3) 粘性わずかにあり。しまりややあり。
2.緑色シルト (10YB4/3) 粘性わずかにあり。しまりややあり。#5mmが多く含まれる。左壁土が盛入する。



SK32
1.灰青褐色シルト (10YB4/2) 粘性ややあり。しまりややあり。黄色高光土層が目立る。
2.黒褐色シルト (10YH3/1) 粘性ややあり。しまりややあり。粘性質が高い。







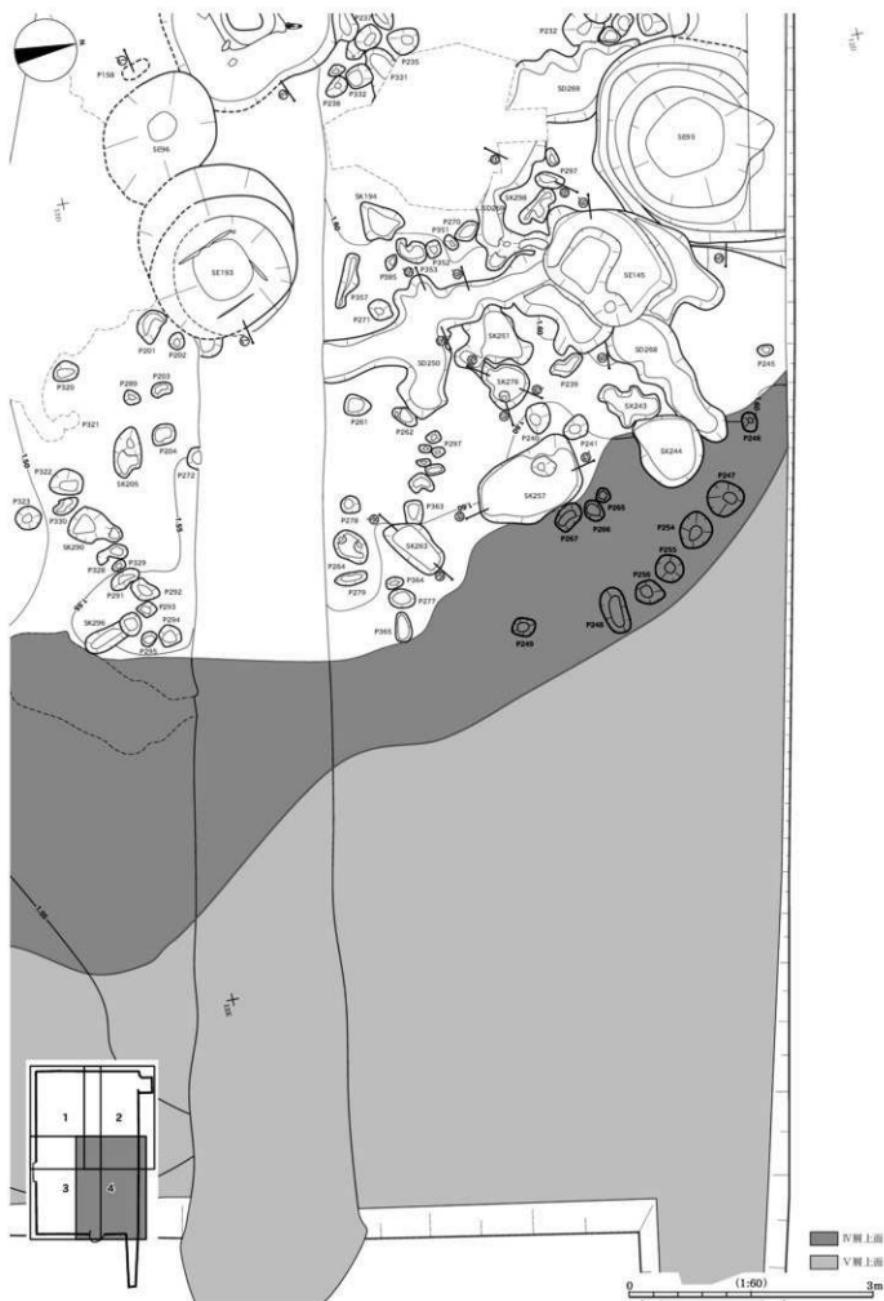
3区 遺構平面部分図3 (1/60)

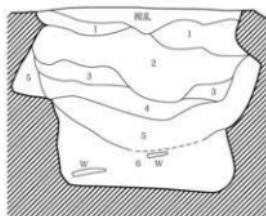
図版 20



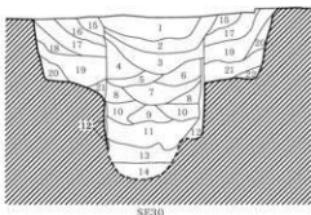
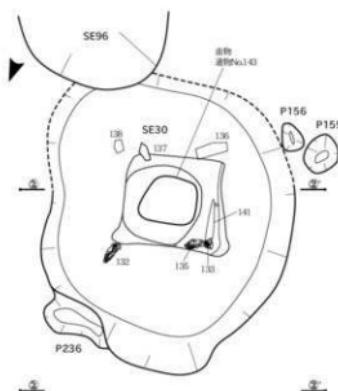
図版 21

3区 造構平面部分図4(1/60)

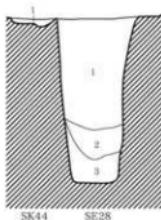
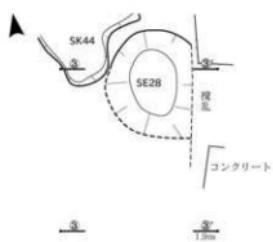




SE9
1. 塗装セメント (7.5V3/1) 軟性あり。しまり非常にあり。耐候性良好。(3.5V3/1) シートプロック20%混。
2. 黒色セメント (7.5V3/1) 軟性あり。しまり非常にあり。耐候性良好。(2.5V3/2) シートプロック50%混。
3. 黑色セメント (7.5V3/1) 軟性あり。しまり非常にあり。耐候性良好。(2.5V3/2) シートプロック50%混。
4. 黄色セメント (7.5V3/1) 軟性あり。しまり非常にあり。耐候性良好。(3.5V3/1) シートプロック30%混。
5. 磨光黑色セメント (2.5V3/2) 軟性あり。しまり非常にあり。耐候性良好。(7.5V3/1) 10%BL
6. 黄色セメント (7.5V4/1) 軟性非常にあり。しまりあり。耐候性極めて良。(1~3cm) ガラスチ化に入る。黒鉛木入る。



SE30
1. オーバーフローセメント (7.5V3/1) 軟性あり。しまりあり。地盤プロックわずかに入る。
2. 黒色セメント (10V2/1) 軟性あり。しまりあり。地盤混入。
3. 黄色セメント (3V4/1) 軟性ややあり。しまりあり。地盤プロックアラミダ混入。
4. 黑色セメント (3V4/1) 軟性ややあり。しまりあり。地盤セメント化のせいで入る。
5. 黑色セメント (3V4/2) 軟性ややあり。しまりあり。地盤セメント化のせいで入る。
6. 黄色セメント (7.5V4/1) 軟性ややあり。しまりあり。地盤混入。地盤プロックに入れる。
7. オーバーフローセメント (3V7/1) 軟性ややあり。しまりあり。地盤セメント化のせいで入る。
8. 黑色セメント (3V7/1) 軟性ややあり。しまりあり。地盤セメント化のせいで入る。
9. 黄色セメント (3V7/3) 軟性なし。しまりややあり。地盤プロックに入る。
10. 黑色セメント (3V3/1) 軟性ややあり。しまりややあり。地盤セメント化のせいで入る。
11. オーバーフローセメント (3V3/1) 軟性ややあり。しまりややあり。地盤セメント化のせいで入る。
12. オーバーフローセメントセメント (3V7/2) 軟性ややあり。しまりなし。井戸枠を被覆して井戸が作成。
13. 黑色セメント (3V7/2) 軟性ややあり。しまりなし。井戸枠を被覆して井戸が作成。
14. 黄色セメント (3V7/1) 軟性なし。しまりややあり。地盤の壁、地盤あり。地盤混入。
15. 黄色セメント (3.5V7/2) 軟性あり。しまりあり。地山砂ブロックに入る。土質は同じ。地山砂
2. 黄色セメント (3.5V3/1) 軟性ややあり。しまりあり。
3. 黑色セメント (2.5V3/2) 軟性あり。しまりあり。
4. 黑色セメント (2.5V3/2) 軟性あり。しまりあり。
5. 黑色セメント (2.5V3/2) 軟性あり。しまりあり。
6. 黑色セメント (2.5V3/2) 軟性あり。しまりあり。
7. 黑色セメント (2.5V3/2) 軟性あり。しまりあり。
8. 黑色セメント (2.5V3/2) 軟性あり。しまりあり。
9. 黑色セメント (2.5V3/2) 軟性あり。しまりあり。
10. 黑色セメント (2.5V3/2) 軟性あり。しまりあり。
11. 黑色セメント (2.5V3/2) 軟性あり。しまりあり。
12. 黑色セメント (2.5V3/2) 軟性あり。しまりあり。
13. 黑色セメント (2.5V3/2) 軟性あり。しまりあり。
14. 黑色セメント (2.5V3/2) 軟性あり。しまりあり。
15. 黑色セメント (2.5V3/2) 軟性あり。しまりあり。



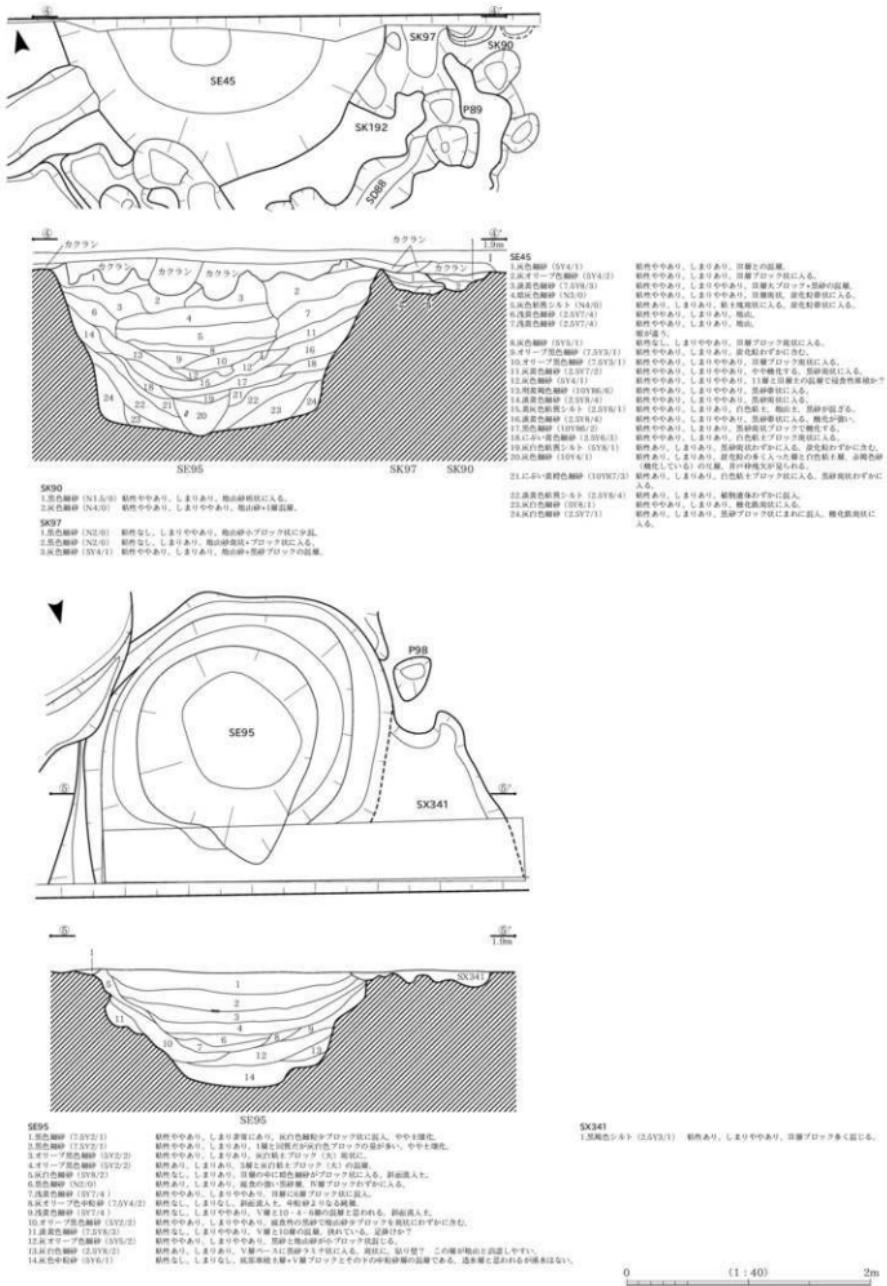
SK44
1. オーバーフローセメント (2.5V3/3) 軟性ややあり。しまりあり。シート底。SK43を切る。

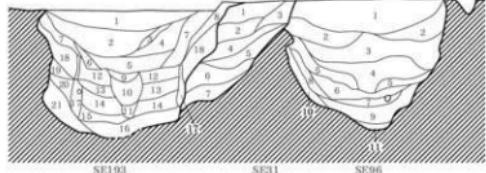
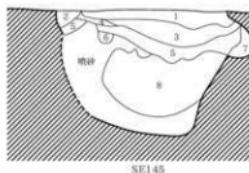
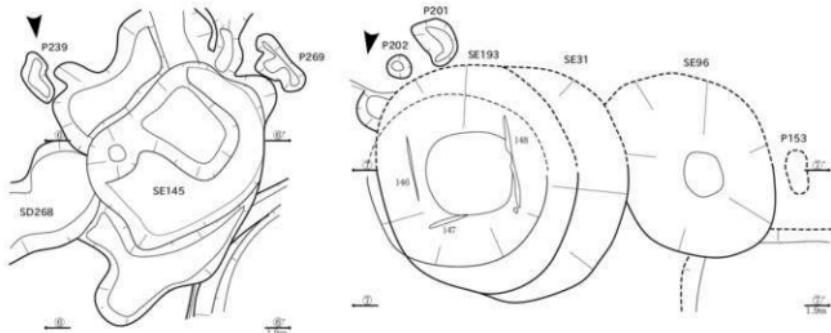
SE28

1. 黑色セメント (2.5V4/2) 軟性あり。しまりあり。地盤シルトプロック40%
2. 黑色セメント (2.5V2/1) 軟性非常にあり。しまりあり。しまり(1層)より良い。
3. 黑色セメント (3V4/1) 軟性非常にあり。しまりややあり。黒鉛色が目立つ

図版 23

3 区 遺構実測図 2



**SE145**

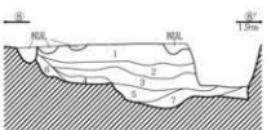
- 1.左側面骨頭 (2.0V/3) 頸動脈やがあり、しまりあり。左側頭筋がブロック状で見入る。
- 2.右側面骨頭 (2.0V/2) 頸動脈なし。しまりやあり。右側頭筋がブロック状を含む。
- 3.左耳介筋 (2.0V/3) 頸動脈やあり。右側頭筋と左側頭筋が少しある。
- 4.左舌骨筋 (2.0V/1) 頸動脈なし。しまりやあり。斜角筋と上位斜角筋がトトナ化を含む。
- 5.左オーバー舌骨筋 (2.0V/2) 頸動脈やあり、しまりやあり。左側頭筋と斜角筋がV型で見入る。斜角筋をまれに含む。
- 6.左胸鎖乳突筋 (2.0V/1) 頸動脈やあり。しまりやあり。左側頭筋と斜角筋がV型で見入る。斜角筋により縦隔化されている。
- 7.オーバー舌骨筋 (2.0V/2) 頸動脈なし。しまりやあり。V型・横筋・腹筋が見入る。
- 8.左胸鎖乳突筋 (2.0V/2) 頸動脈なし。しまりやあり。V型・横筋・腹筋が見入る。

SE96

- 1.左側面骨頭 (2.0V/3) 頸動脈やあり。しまりあり。V型・ブロック状に見入る。SE96を短くSE193に切られる。
- 2.左胸鎖乳突筋 (2.0V/2) 頸動脈やあり。しまりあり。V型・ブロック状で見入る。
- 3.左舌骨筋 (2.0V/2) 頸動脈やあり。しまりあり。V型・ブロック状で見入る。
- 4.左斜角筋 (2.0V/1) 頸動脈やあり。しまりあり。斜角筋が斜角筋に入る。
- 5.左風嚢筋 (2.0V/1) 頸動脈やあり。しまりあり。V型で斜角筋に入る。斜角筋が斜角筋に入れる。
- 6.左オーバー舌骨筋 (2.0V/3) 頸動脈やあり。しまりやあり。V型・斜角筋が見入る。
- 7.左胸鎖乳突筋 (2.0V/2) 頸動脈やあり。しまりやあり。V型・斜角筋が見入る。
- 8.左斜角筋 (2.0V/1) 頸動脈やあり。しまりやあり。V型・斜角筋が見入る。
- 9.左胸鎖乳突筋 (2.0V/1) 頸動脈やあり。しまりやあり。V型・斜角筋が見入る。

SE193

- 1.左側面骨頭 (2.0V/2) 頸動脈あり。しまりあり。シントラム・遮光物が頭部。SE31を短く。
- 2.左舌骨筋 (2.0V/2) 頸動脈あり。しまりあり。シントラム・遮光物が頭部。斜角筋が斜角筋に入る。木棧橋している?
- 3.左胸鎖乳突筋 (2.0V/2) 頸動脈あり。しまりあり。シントラム・遮光物が頭部。斜角筋が斜角筋に入る。
- 4.左斜角筋 (2.0V/1) 頸動脈あり。しまりあり。V型で斜角筋に入る。
- 5.左風嚢筋 (2.0V/1) 頸動脈やあり。しまりあり。V型で斜角筋に入る。斜角筋が斜角筋に入れる。
- 6.左オーバー舌骨筋 (2.0V/1) 頸動脈やあり。しまりあり。V型・斜角筋が見入る。
- 7.左胸鎖乳突筋 (2.0V/2) 頸動脈やあり。しまりやあり。V型・斜角筋が見入る。
- 8.左斜角筋 (2.0V/2) 頸動脈やあり。しまりやあり。V型・斜角筋が見入る。
- 9.左胸鎖乳突筋 (2.0V/2) 頸動脈やあり。しまりやあり。シントラム・遮光物が頭部。
- 10.左オーバー舌骨筋 (2.0V/3) 頸動脈やあり。しまりやあり。V型・斜角筋が見入る。
- 11.左胸鎖乳突筋 (2.0V/2) 頸動脈やあり。しまりやあり。V型・斜角筋が見入る。
- 12.左斜角筋 (2.0V/1) 頸動脈やあり。しまりやあり。V型・斜角筋が見入る。
- 13.左オーバー舌骨筋 (2.0V/2) 頸動脈やあり。しまりやあり。シントラム・遮光物が頭部。
- 14.左胸鎖乳突筋 (2.0V/2) 頸動脈やあり。しまりやあり。V型・斜角筋が見入る。
- 15.左斜角筋 (2.0V/1) 頸動脈やあり。しまりやあり。V型・斜角筋が見入る。
- 16.左オーバー舌骨筋 (2.0V/2) 頸動脈やあり。しまりやあり。V型・斜角筋が見入る。
- 17.左胸鎖乳突筋 (2.0V/2) 頸動脈やあり。しまりやあり。V型・斜角筋が見入る。
- 18.左斜角筋 (2.0V/1) 頸動脈やあり。しまりやあり。V型・斜角筋が見入る。
- 19.左オーバー舌骨筋 (2.0V/2) 頸動脈やあり。しまりやあり。V型・斜角筋が見入る。
- 20.左胸鎖乳突筋 (2.0V/2) 頸動脈やあり。しまりやあり。V型・斜角筋が見入る。
- 21.左オーバー舌骨筋 (2.0V/2) 頸動脈やあり。しまりやあり。V型・斜角筋が見入る。

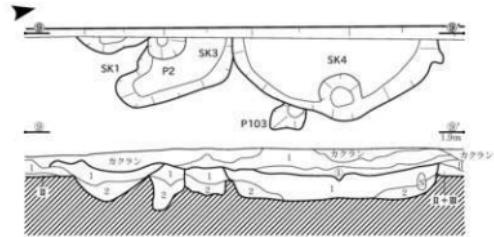
**SE283**

- 1.左胸鎖乳突筋 (2.0V/2) 頸動脈やナ核に入る。
- 2.左斜角筋 (2.0V/2) 頸動脈やナ核に入る。
- 3.左胸鎖乳突筋 (2.0V/2) 頸動脈やナ核に入る。
- 4.左斜角筋 (2.0V/2) 頸動脈やナ核に入る。
- 5.左胸鎖乳突筋 (2.0V/2) 頸動脈やナ核に入る。
- 6.左斜角筋 (2.0V/2) 頸動脈やナ核に入る。
- 7.左胸鎖乳突筋 (2.0V/2) 頸動脈やナ核に入る。
- 8.左斜角筋 (2.0V/2) 頸動脈やナ核に入る。

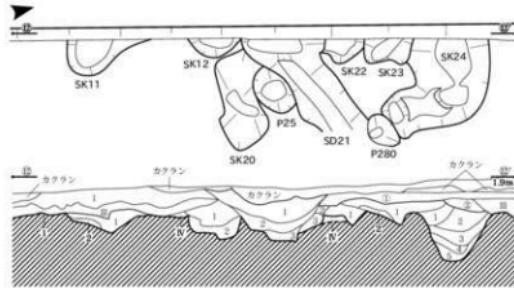
頸動脈あり。しまりあり。斜角筋側 (10VH/2) 線がナミ核に入る。
頸動脈あり。しまりあり。斜角筋側 (10VH/2) 線がほとんど入らない。
頸動脈あり。しまりあり。斜角筋側 (10VH/2) 線がほとんど入らない。
頸動脈あり。しまりあり。斜角筋側 (10VH/2) 線がほとんど入らない。
頸動脈あり。しまりあり。斜角筋側 (10VH/2) 線がナミ核に入る。
頸動脈あり。しまりあり。斜角筋側 (10VH/2) 線がナミ核に入る。

圖版 25

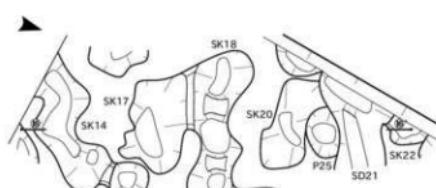
3区 遺構実測図 4



- | | | |
|----------------------|-----------------------------|----|
| S51 | | |
| 1.黒周魚シロト (2SY/2) | 駆除され、しまさやあります。 | |
| 2.黒周魚シロト (2SY/4) | 駆除され、しまさやあります。黒周魚シロトに普段ブロッケ | (% |
| 3.黒周魚シロト (2SY/2) | 駆除され、しまさやあります。 | |
| 4.オマツリゲハシロト (2SY/4) | 駆除され、しまさやあります。 | |
| 5.黒周魚シロト (2SY/2) | 駆除され、しまさやあります。 | |
| 6.オマツリゲハシロト (2SY/4) | 駆除され、しまさやあります。 | |
| 7.黒周魚シロト (2SY/2) | 駆除され、しまさやあります。 | |
| 8.オマツリゲハシロト (2SY/4) | 駆除され、しまさやあります。 | |
| 9.黒周魚シロト (1SY/2) | 駆除され、しまさやあります。 | |
| 10.オマツリゲハシロト (2SY/4) | 駆除され、しまさやあります。 | |



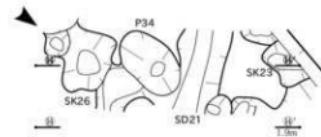
- | | SK1 | SK2 | SD1 | SK22 | SK23 |
|------------------------|----------------------------|-----|-----|------|------|
| SK11 | | | | | |
| 1.黒面シロウトリ (H082/2) | 黒面中や小判。
少しりやか。 | | | | |
| 2.オーラー・モクセイ色 (2.5Y4/4) | 黒面あり。
少しりやか。黒面シロウトリコ多品。 | | | | |
| 3.黒面シロウトリ (H082/2) | 黒面なし。
少しりやか。 | | | | |
| 4.オーラー・モクセイ色 (2.5Y4/4) | 黒面あり。
少しりやか。黒面シロウトリコ多品。 | | | | |
| 5.黒面シロウトリ (H082/2) | 黒面あり。
少しりやか。黒面シロウトリコ多品。 | | | | |
| 6.黒面シロウトリ (2.5Y3/3) | 黒面あり。
少しりやか。 | | | | |
| 7.黒面シロウトリ (2.5Y3/3) | 黒面あり。
少しりやか。 | | | | |
| 8.黒面シロウトリ (H082/2) | 黒面中や小判。
少しりやか。 | | | | |
| SK22 | | | | | |
| 1.黒面シロウトリ (H082/2) | 黒面中や小判。
少しりやか。 | | | | |
| 2.オーラー・モクセイ色 (2.5Y4/4) | 黒面あり。
少しりやか。黒面シロウトリコ多品。 | | | | |
| 3.黒面シロウトリ (H082/2) | 黒面中や小判。
少しりやか。 | | | | |
| 4.オーラー・モクセイ色 (2.5Y4/4) | 黒面あり。
少しりやか。黒面シロウトリコ多品。 | | | | |
| 5.黒面シロウトリ (H082/2) | 黒面中や小判。
少しりやか。 | | | | |
| SK23 | | | | | |
| 1.黒面シロウトリ (H082/2) | 黒面中や小判。
少しりやか。 | | | | |
| 2.オーラー・モクセイ色 (2.5Y4/4) | 黒面あり。
少しりやか。黒面シロウトリコ多品。 | | | | |
| 3.黒面シロウトリ (H082/2) | 黒面中や小判。
少しりやか。 | | | | |
| 4.オーラー・モクセイ色 (2.5Y4/4) | 黒面あり。
少しりやか。黒面シロウトリコ多品。 | | | | |
| 5.黒面シロウトリ (H082/2) | 黒面中や小判。
少しりやか。 | | | | |



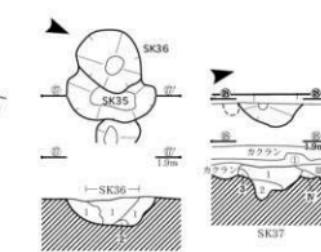
- | SK14 | SK17 | SK18 | SK20 | P25 | SD2 |
|----------------------|------|------|------|-----|---------------------------|
| SK14 | | | | | |
| 1.黒褐色砂 (3BV/8/3) | | | | | 軽室内なし。しまりあり。縦顎面のシキトプロクサ類。 |
| 2.黒褐色砂 (3BV/8/2) | | | | | 軽室内なし。しまりあり。 |
| 3.黒褐色カット (2.5BV/3/3) | | | | | 軽室内やあり。しまりややあり。上顎歯少頭。 |
| 4.黒褐色カット (2.5BV/3/3) | | | | | 軽室内やあり。しまりややあり。上顎歯少頭。 |



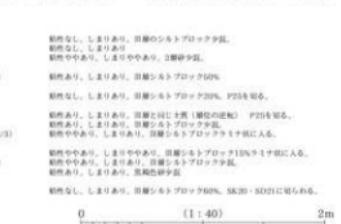
- | SK5 | SK13 |
|-----------------------|--------------------|
| 上唇白色シルク (10YR13/3) | 黒艶やか赤系、しまりやわらか、艶貴族 |
| SK5 | |
| 上唇黑色シルク (10B2/1) | 黒艶なし、しまりあり。 |
| 上唇黑色シルク (2.0Y3/2) | 黒艶やわらか、しまりあり、艶貴族。 |
| 上唇黑色シルク (10B2/1) | 黒艶なし、しまりあり。 |
| 上唇黑色シルク (2.0Y3/2) | 黒艶やわらか、しまりあり、艶貴族。 |
| 上唇黑色シルク (10B2/1) | 黒艶なし、しまりあり。 |
| 上唇黑色シルク (2.0Y3/5-5/4) | 黒艶やわらか、しまりあり、艶貴族。 |



-

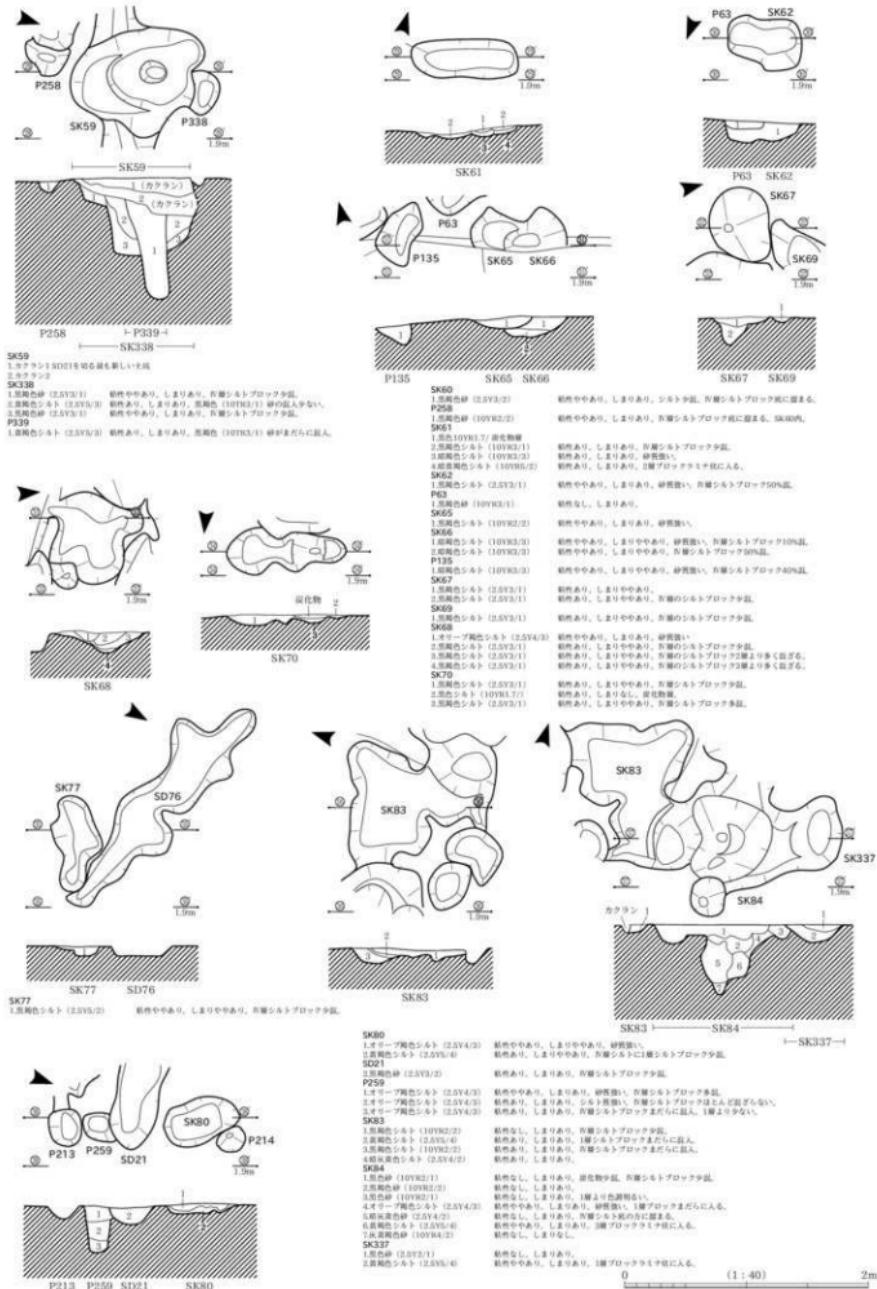


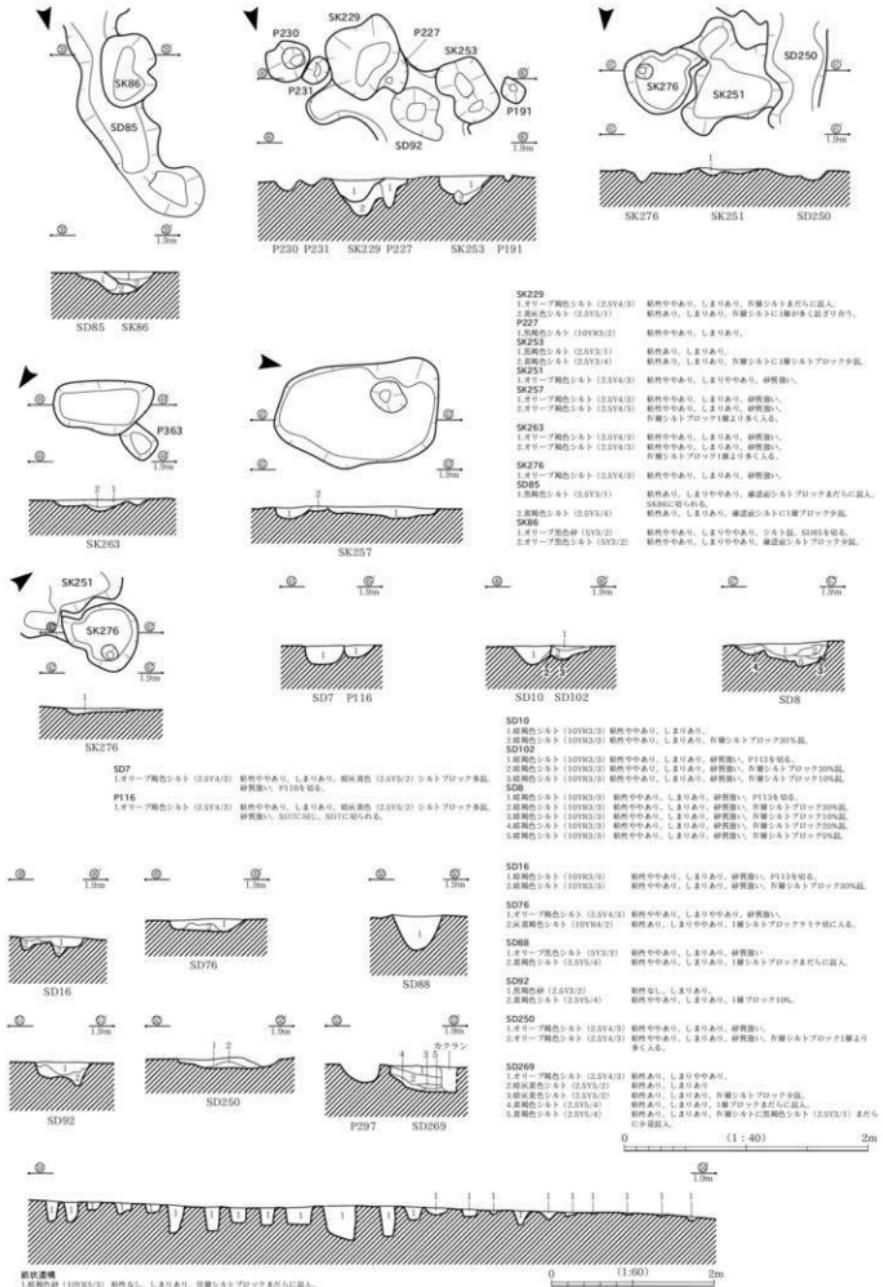
- | | | |
|-------------|--|--|
| SK27 | 黒色地に白毛(2)(SY37/2)
黒色地にシロ(2)(SY36/0) | 黙然としまりあり。♀成年後花序を呈す。
黙然とし、しまりあり。♂成年後クロマツナгинに入る。 |
| SK25 | 黒色地(2)(SY37/1) | 黙然とし、しまりあり。
留連するクロマツを呈す。 |
| SK26 | 黒色地シロ(2)(SY36/0) | 黙然とし、しまりあり。
留連するクロマツを呈す。 |
| SK28 | 黒色地(10YWU3/1) | 黙然とし、しまりあり。
留連するクロマツを呈す。 |
| SK29 | 黒色地(10YWU2/2) | 黙然とし、しまりあり。
留連するクロマツを呈す。 |
| SK30 | 黒色地のシロ(1)(SY36/0) | 黙然とし、しまりあり。
留連するクロマツを呈す。 |



圖版 27

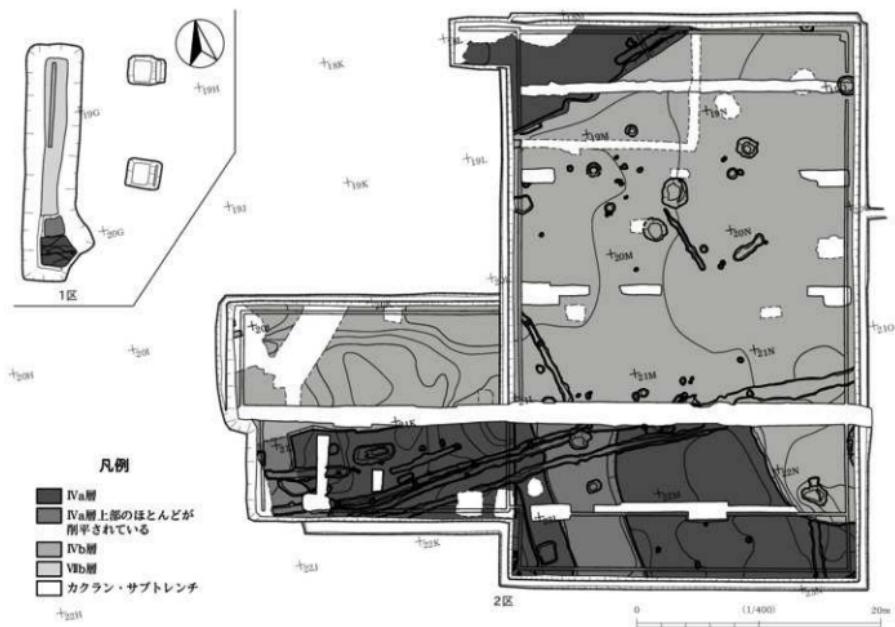
3区 遺構実測図 6

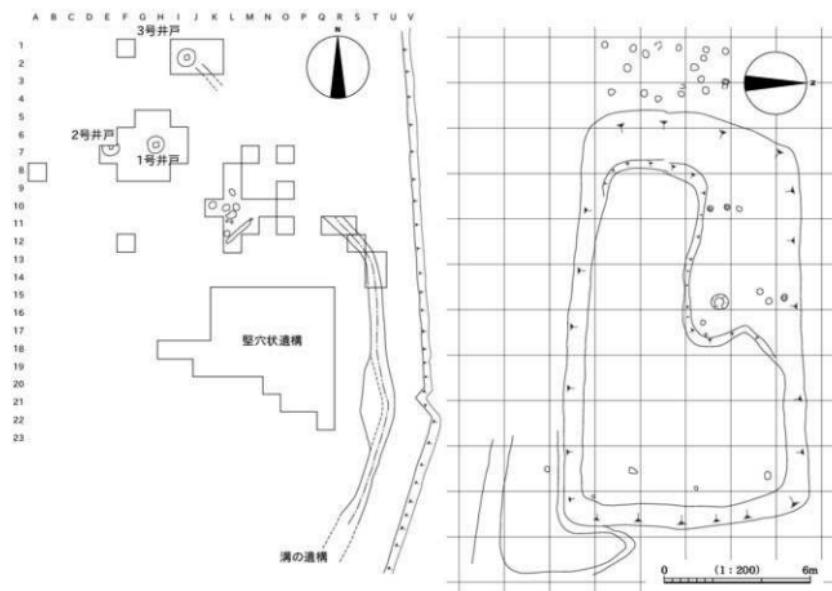
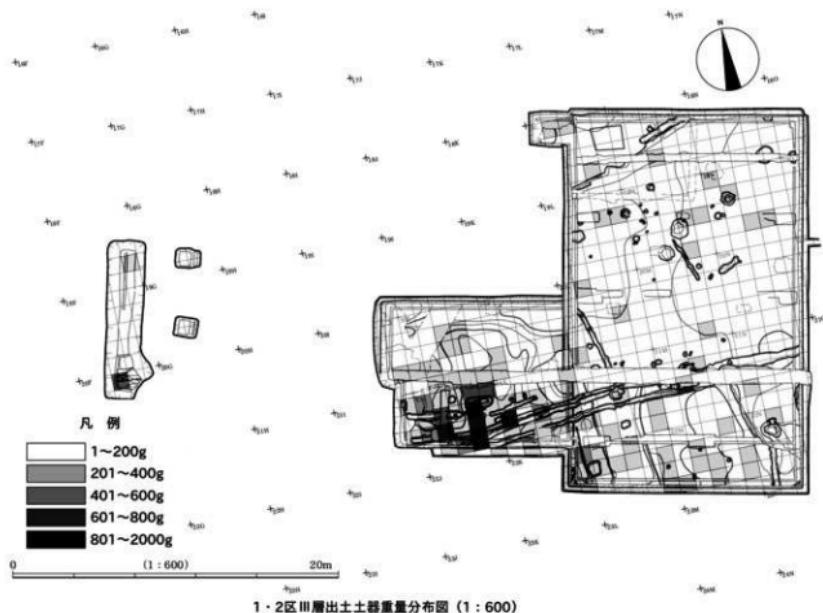




図版 29

亀田中学校用地内の旧土地利用図、1・2区造構確認面の状況

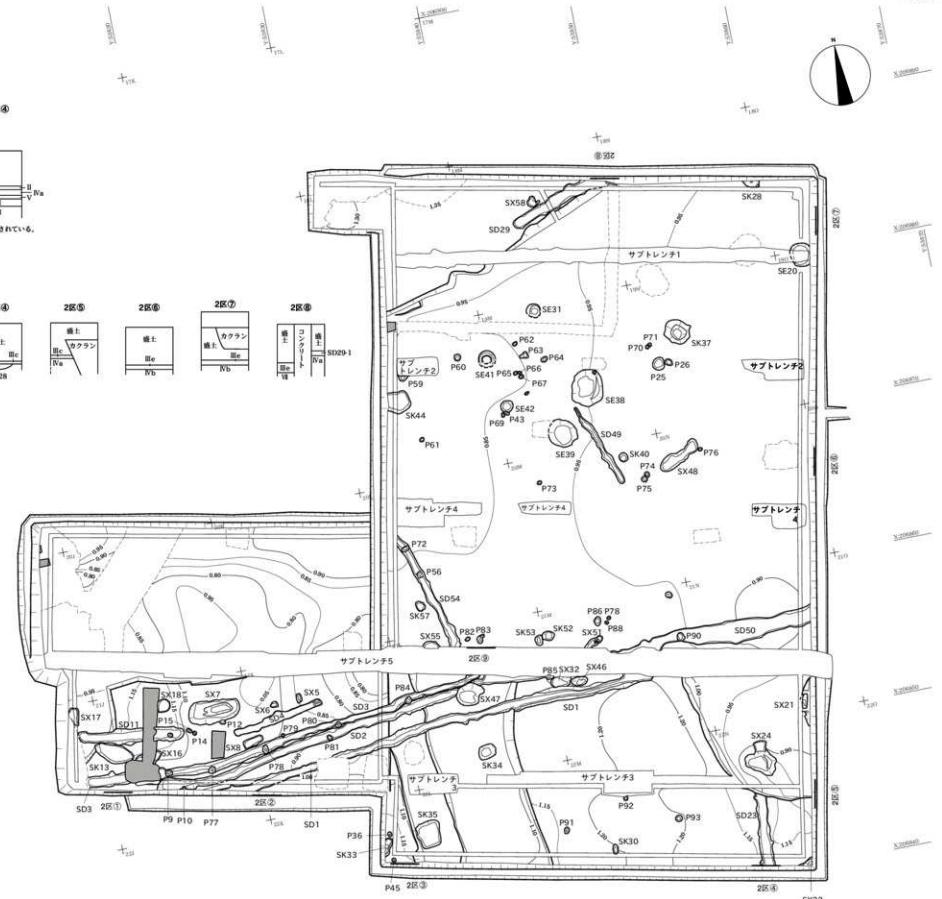




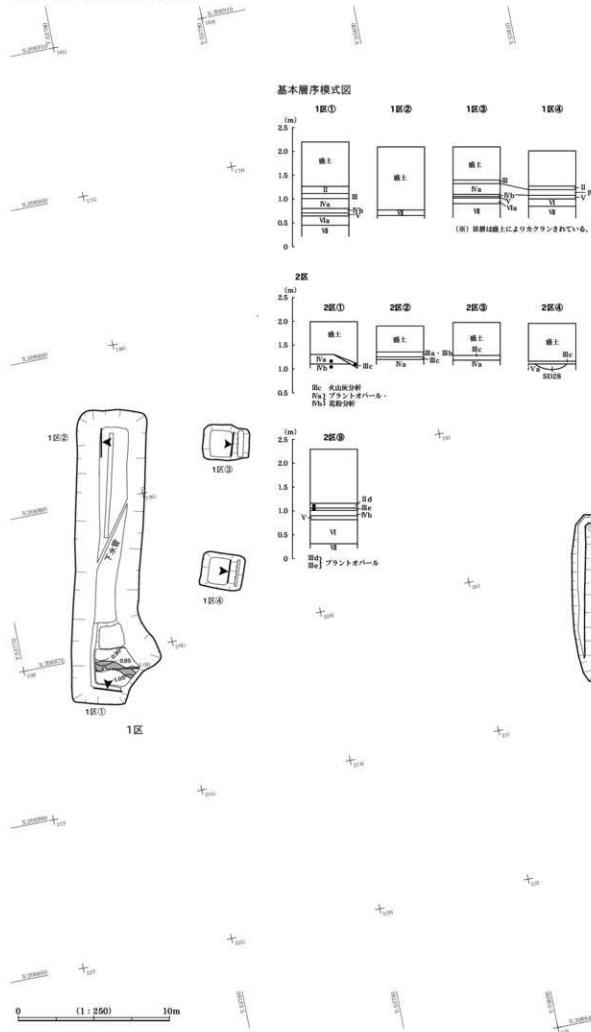
第一次調査地遺構配置図（縮尺不同）
（〔酒井1980〕4頁 第図2を一部改変）

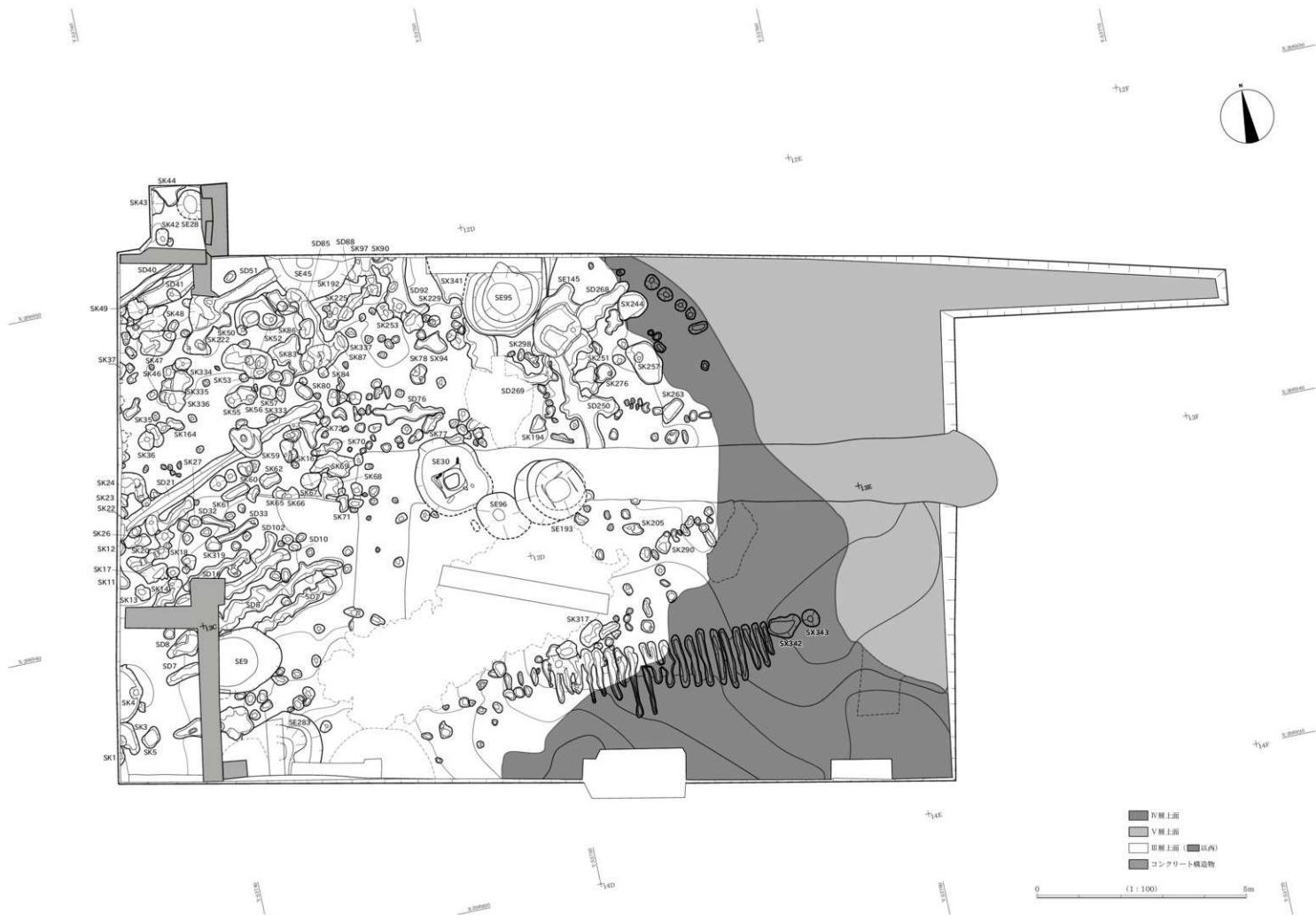
第一次調査堅穴状遺構平面図
（〔酒井1980 第3図〕を再調整し一部改変）

圖版 6

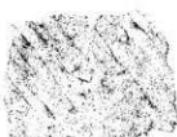


1区・2区 遺構全体図 (1/250)

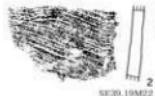




SE31 (1)



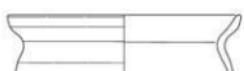
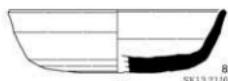
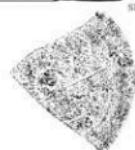
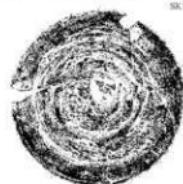
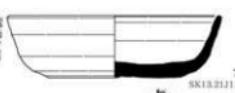
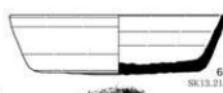
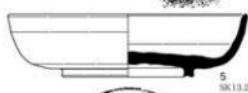
SE39 (2)



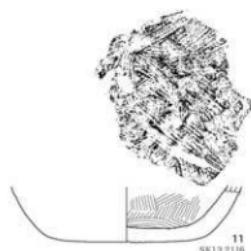
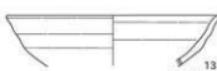
SE41 (3・4)



SK13 (5~11)



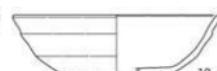
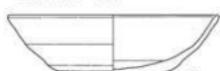
SK33 (12~14)



SX7 (15・16)



SX16 (17~19)



SX18 (20)

16
SX7.21J916
SX7.21J919
SX16.21J2

0 (1 : 3) 10cm

SD1 (21・22)

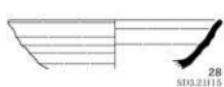
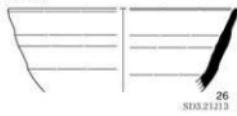


SD2 (23～25)



SD2.21J20

SD3 (26～31)

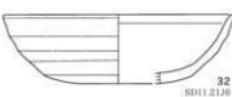


SD3.21J15

SD3.21J13

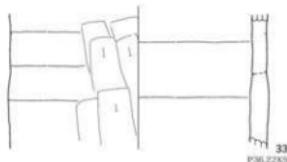


SD11 (32)



SD11.21J6

P36 (33)

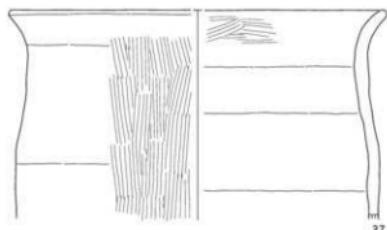
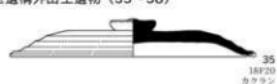


SD3.21J15

P45 (34)



1区遺構外出土遺物 (35～38)

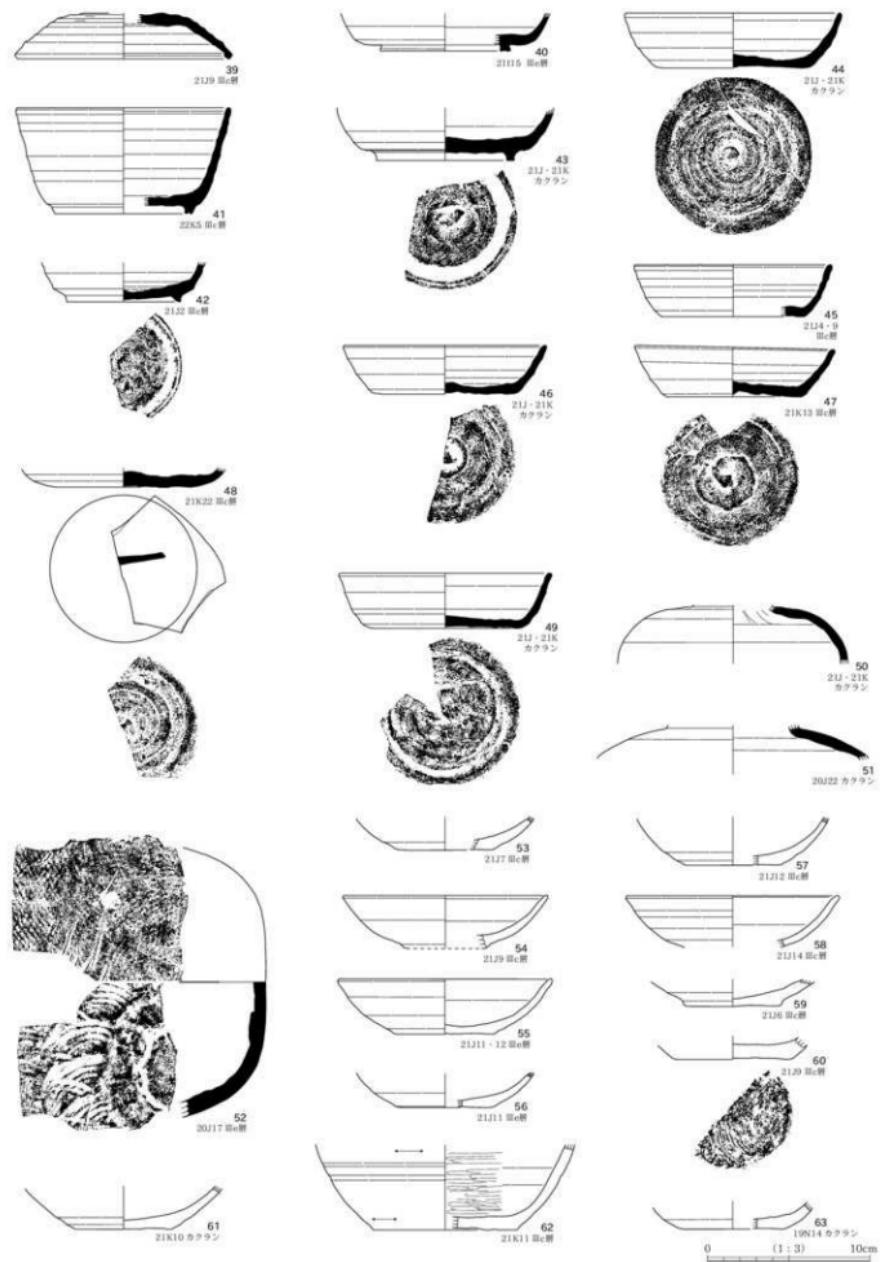


IIIc型

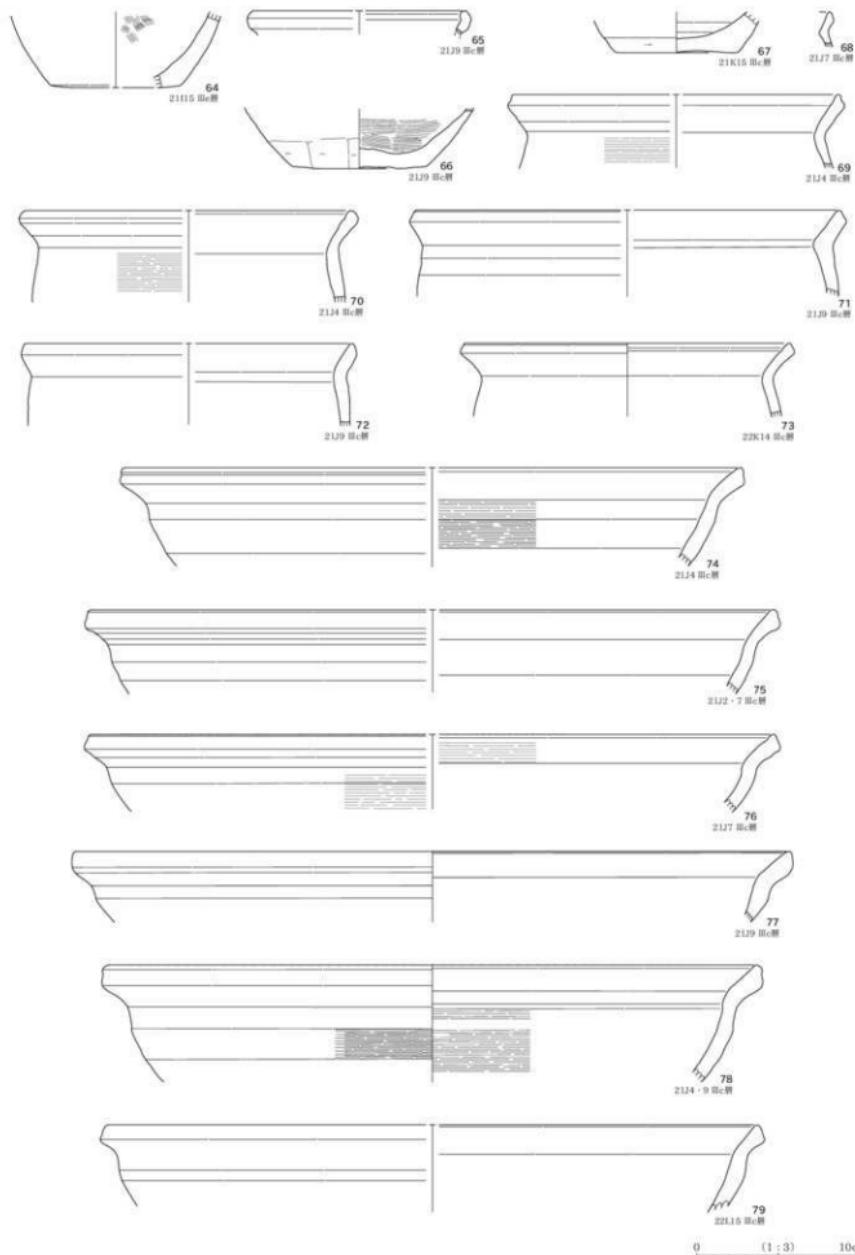
37

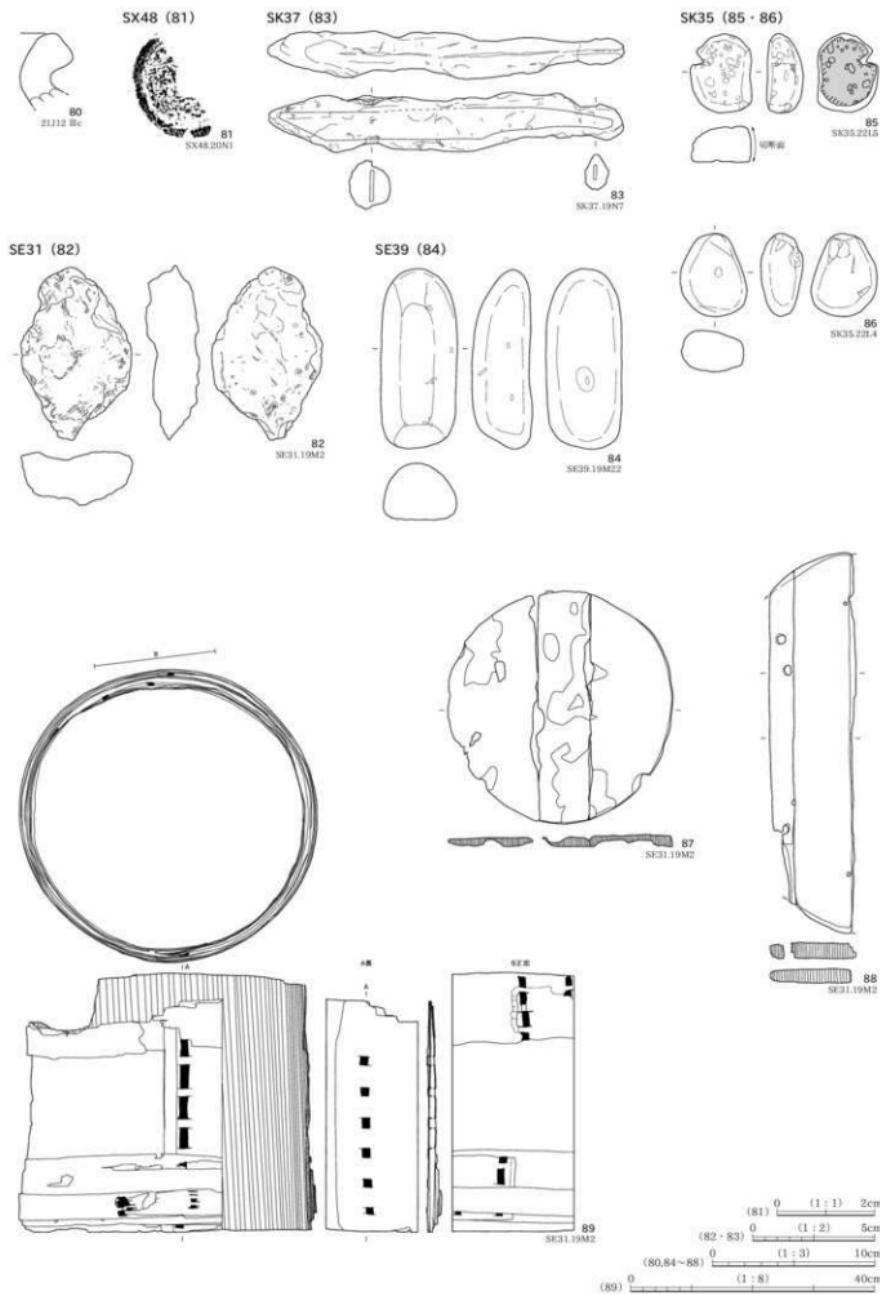


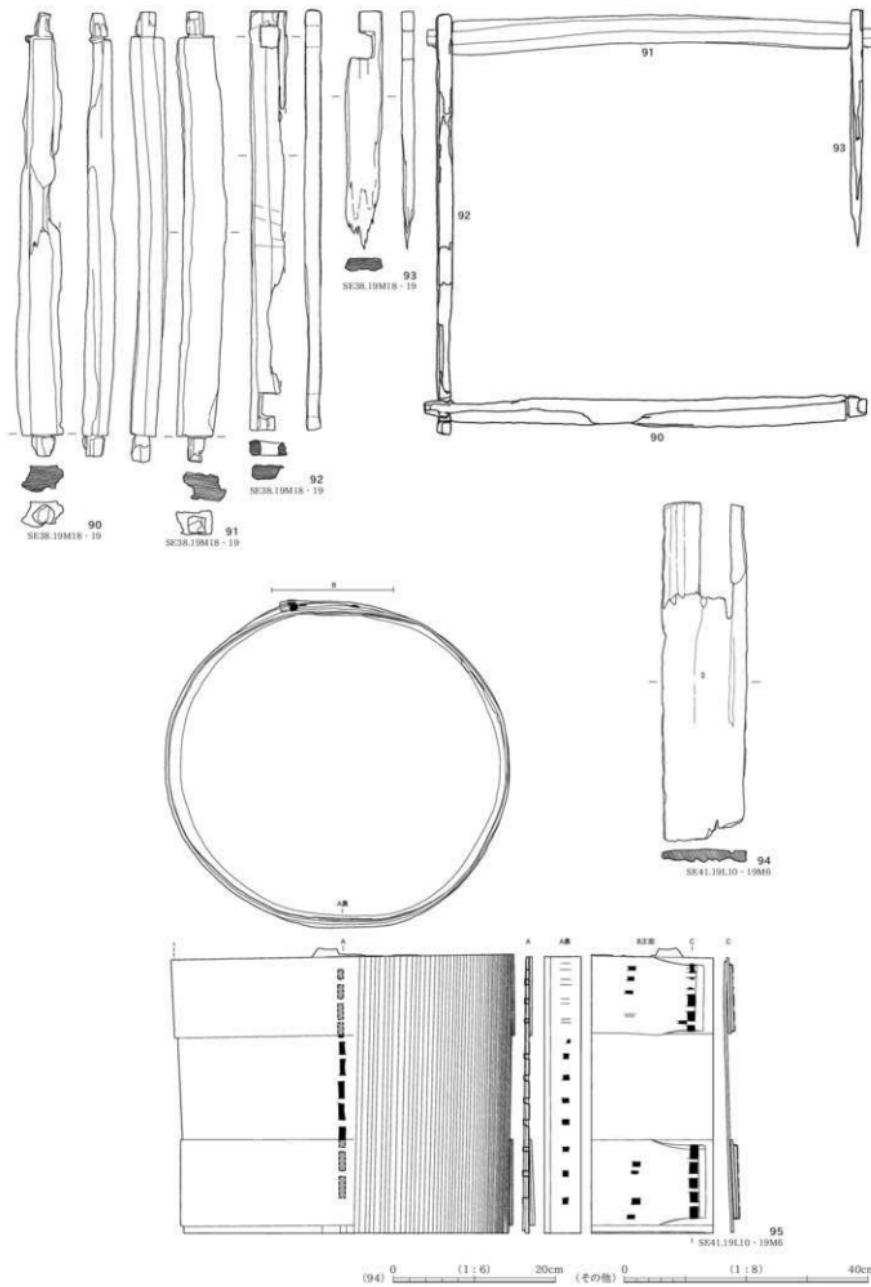
0 (1 : 3) 10cm



2区遺構外出土土器 (64~79)



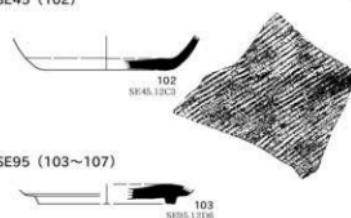




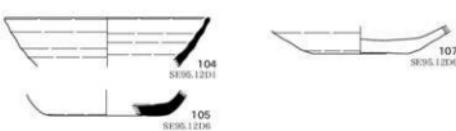
SE30 (96~100)



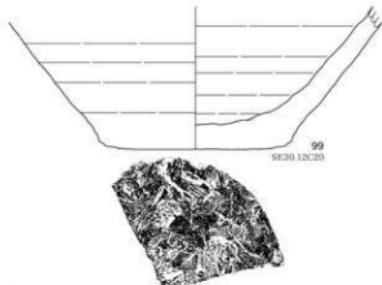
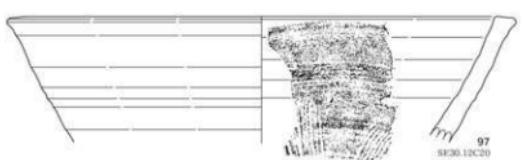
SE45 (102)



SE95 (105~107)



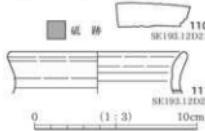
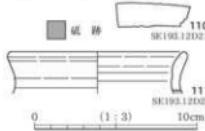
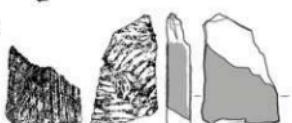
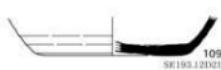
SE145 (108)



SE31 (101)



SE193 (109~111)



SK47 (112)



SK50 (113)



SK59 (114・115)



P159 (118)



P170 (119)



SK62 (116)



SD7 (117)



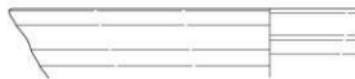
P254 (120)



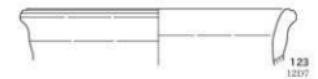
P332 (121)



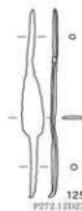
鉢 (122)



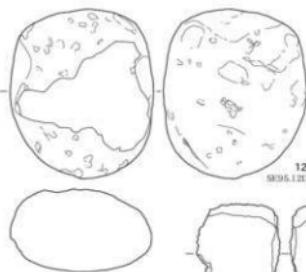
遺構外出土遺物 (123・124)



鉄製品 P272 (125)



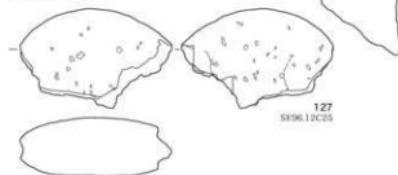
石製品 SE95 (126)



SE193 (128~130)



SE96 (127)



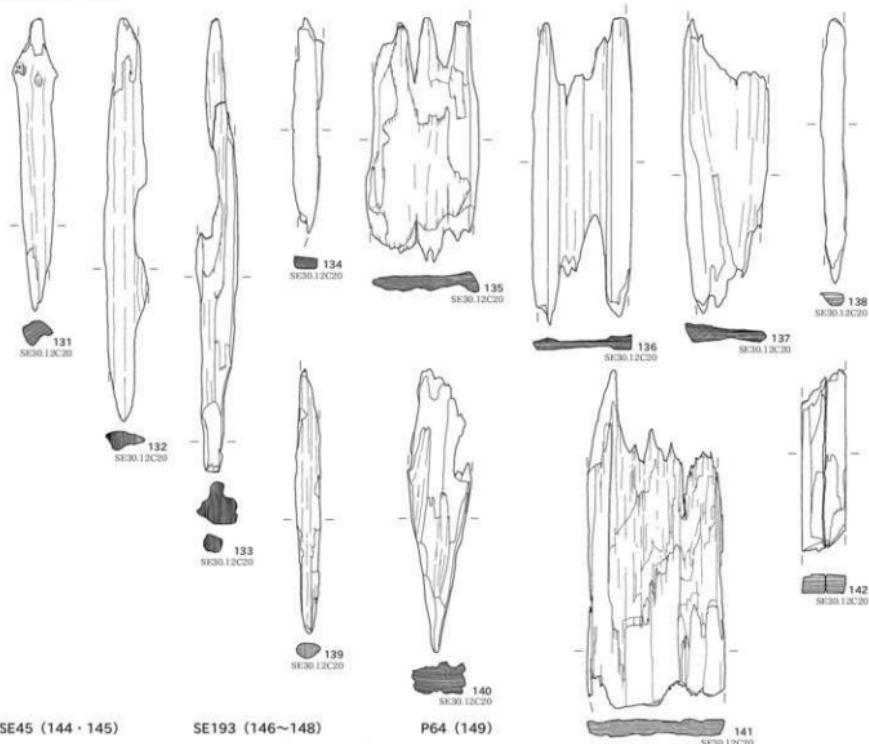
基 跡

(113・115) 0 (1 : 2) 5cm

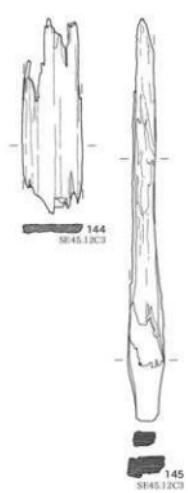
(124) 0 (2 : 3) 6cm

(その他) 0 (1 : 3) 10cm

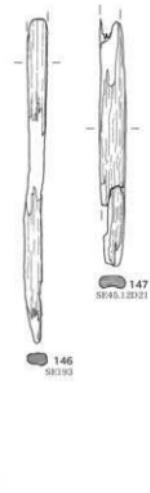
SE30 (131~143)



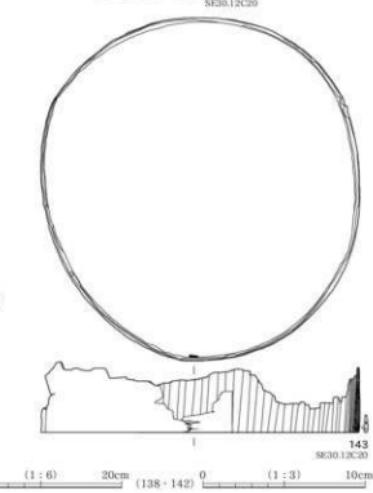
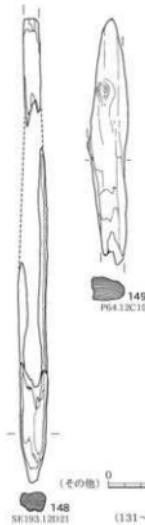
SE45 (144・145)



SE193 (146~148)



P64 (149)



(その他) 0 (1 : 6) 20cm (138~142) 0 (1 : 3) 10cm
 (131~133・145・146~148) 0 (1 : 8) 40cm



三王山遺跡周辺空中写真

米軍撮影 1948年9月



三王山遺跡 2区 全景 空中写真（合成）



2区 全景1（南西から）



2区 全景2（北東から）



3区 全景1 12C グリッドを中心に（北から）



3区 全景2（東から）



1区 完掘（北から）



1区 完掘（南から）



1区 基本層序①（北から）



1区 基本層序②（東から）



2区 基本層序②（北から）



2区 基本層序③付近（北から）



2区 基本層序⑤（西から）



2区 基本層序⑧（南から）

報告書抄録

ふりがな	さんのうやまいせきⅡ だい4・7じちょうさ							
書名	三王山遺跡Ⅱ 第4・7次調査							
副書名	新潟市立亀田中学校校舎・体育館改築工事に伴う三王山遺跡第2・4次発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	新潟市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	朝岡政康・早田勉(第VI章)							
編集機関	新潟市文化観光・スポーツ部 歴史文化課 埋蔵文化財センター							
所在地	〒950-3101 新潟県新潟市北区太郎代2554番地 TEL 025-255-2006							
発行年月	西暦2010年3月30日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
三王山遺跡	新潟県新潟市 江南区城山1丁目1170-2 ほか	15104	419	37° 51° 34°	139° 06° 53°	第4次調査 20070501～ 20070810 第7次調査 20081105～ 20081125 計 2,255.9	1,845.2 410.7	市立中学校校舎・体 育館改築工事に伴う
所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
三王山遺跡	遺物包含地	古代(奈良時代・ 平安時代・鎌倉 時代・室町時代)	井戸・土坑・溝・性 格不明遺構など	須恵器・土師器・珠洲焼・ 石製品・鉄製品				
要約	<p>三王山遺跡は亀田砂丘と呼ばれる新砂丘Ⅰ上に位置する。昭和54年(1979)に亀田中学校からJR信越線を挟んだ北東側で宅地開発に伴う緊急調査が行われている。その調査では主に、古代・中世の遺構・遺物が発見された。また古墳時代の遺物も少量発見されている。この調査では鉄鉢や銅製香炉、瀬戸美濃焼香炉といった仏具や、青磁・白磁といった貿易陶器、国内各所で焼かれた焼き物が多く発見され、中世においては階層の高い集団の存在が推測されている。</p> <p>第4・7次調査地は学校が建てる以前は水田や畠として利用されていた。特に第4次調査地は旧地表を広範囲に削平して水田を作っていたため遺構確認面の遺存状況は良くなかった。</p> <p>両調査を通じて奈良・平安時代では土坑や溝が発見され、須恵器や土師器が出土している。鎌倉・室町時代は井戸や溝などが見つかり、珠洲焼や青磁の細片が出土している。今回の調査では昭和54年調査地ほど遺物は出土しなかったが、三王山遺跡の広がりや営まれた時代について、より所見を深めることができた。</p>							

三王山遺跡 第4・7次調査

新潟市立亀田中学校校舎・体育館改築工事に伴う三王山遺跡第2・4次発掘調査報告書

2010年3月30日印刷

2010年3月30日発行

編集・発行 新潟市教育委員会

〒950-8550 新潟県新潟市中央区学校町通一番町602番地1

TEL(025)228-1000

新潟市埋蔵文化財センター

〒950-3101 新潟県新潟市北区太郎代2554番地

TEL(025)255-2006

印刷・製本 株式会社博進堂

〒950-0807 新潟県新潟市東区木工新町378-2

TEL(025)271-2600